Top & Low Bicycle

1980

vol. 12

TOP&LOW

LOWの後にはTOPあり
TOPの後にはLOWあり
楽しみも苦しみも
ずっと続くものではない
人生とは起伏にとんだ道
俺達の旅は
まだまだ終わらない

My favourite
thing is cycling

目　次

Ⅰ クラブ行事

1980 TITCC		1
1980 TITCSC	小林②	7
SUB TITLE ---- (秋) 土曜の夜は楽しいなっと!		
オリエンテーリング&ラリー	嶋②	13
春合宿"松"コース	宇佐見②	15
『なに〜部誌に春合宿のことを書くん やと〜そんなもん覚えとるわけないやないけ〜」という題』	今泉②	22
KKK団の暗躍	葉山②	25
新歓コンパ	嶋田①	35
新歓ラン	嶋田①	38
「松姫峠は俺に何をさせようとしているのか」 〜よびよびらん〜	三浦①	41
予備合宿	波頭①	55
夏合宿	下①	63
夏合宿 ザ・グリーンズ	野中①	67

夏合宿	三ッ井②	77
夏合宿　B班	兵藤①	83
夏合宿	宮崎②	91
1980 ESCAラリー報告	川村①	97
ああ！富士スバルライン タイムトライアル そして ああ！ 親の四暗刻単騎	立山①	103
工大祭	西田②	111
ナイトランの想い出 (1980.11.1　東工大 ー 城ケ島)	副島①	115

Ⅱ 自由テーマ

1980年をふりかえって	吉田②	119
夏合宿の後	村瀬②	123
サイクルマシーン	三浦③	127
無題	石田②	131
ある雨降りの日	高橋④	137
サイクリングについて	西口④	147

狂走4年間	小川④	149
Low and Low	永見④	155
透明な午后	古木[4]	171
そして今—	鈴木④	173
只酒	山口④	181
懐しき北海道 そして我が友だち	斉藤③	191

1980 TATCO

ツカレタ

1月6日(日) 新春麻雀大会 (部室)

参加者 15.5名 (0.5=永見氏)

優勝 吉田、2位 栗山、3位 山口

1月11日(金) オリエンテーリング

内原駅(常磐線) → 大洗研修C

参加者 ~~20~~名 19名

優勝 古木、2位 石田、3位 小林

1月12日(土) ラリー

大洗研修C → 石岡駅

優勝 古木・鳥山組 2位 鈴木・吉田組

役員 小川、永見、安井、斉藤

1月26日(土) 4年生追い出しコンパ

追い出されたのは

上原、小野、大塚、小島、佐藤、鈴木、曽我部

土井、西尾、三浦 の10氏でした。

2月23日(土) 24日(日) 整備合宿 (部室)

普段から怠慢な部員が、1年に1回ぐらいは、ということで、部室前でグリスアップなどの整備を行なうだけの話。

3月下旬 ～ 4月6日　春合宿　南紀伊

- 松コース　高橋、斉藤、石田、宇佐見、羽瀬
  竹コース　永見、亀山、酒井、葉山
  梅コース　山口、三浦　今泉、ミッ井、吉田
- 天候に恵まれ、順調に走れたようである。松コースは腹の不調で3人ダウン。竹コースは自転車修理で苦労した人約1名。梅コースは鬼のように"大会長"に熱中していた。

4月11日（金）　土井氏落下！（花見酒）

5月17日（土）　新歓コンパ（部室）

エッ！三浦さんが？　オニッ！斉藤さんも!?
嶋田!!　にげるな!!

5月25日（日）　新歓ラン　百草園・多摩動物園

出走がおそかったため、サイクリングロードは相当込んでいた。帰り、三浦、行方不明になる。

6月7日（土）　輪行講習会

6月29日（日）　予備々ラン　松姫峠

楽々と奥多摩駅についているはずが大幅におくれた。峠一番乗り　吉田

7月15日(火)～17日(木)　予備合宿

・1日目　(吾妻線)万座鹿沢口 → 地蔵峠

2日目　→ 車坂峠 → 小諸 → 女神湖

3日目　→ 茅野

・疲れた。事故が多かった。立山 バースト，下，西田 パンク，波頭 下りで穴にはまり転倒，宮崎 ガードレールとキス、三浦，砂漠で転倒

7月下旬 ～ 8月11日　夏合宿　北海道

・三浦m 宇佐見、菜山、野中

斉藤、酒井、三ッ井、副島、立山、三浦，

名取 嶋、村瀬、西田、佐藤

亀山、宮崎、川村、波頭、

今泉、小林、吉田、嶋田、下、

・楽しかったようだ

8月25日(月)～27日(水)　ESCAラリー

今泉，川村，波頭が参加

楽しかったようだ。この時点で次回ESCAラリーの主管校になるなんて夢にも思われなかっただろうな。

8月31日(日)　志賀会

10月12日(日)　富士スバルライン・タイムトライアル

24名参加（小川，永見，金井の3氏も参加）

優勝 三浦m　$1^h 55^m 31^s$

2位 村瀬、3位 立山

上位3名は2時間をかける好タイムだった。
役員、亀山、名取、宇佐見、山島、(鈴木)

10月18日(土)　総会　新執行部誕生
10月24日(金)～26日(日)　工大祭
天候に恵まれず、売り上げは前年に比べ劣ったかに思えたが、蓋んのその、大幅に売り上げを伸ばした。その割にはクラブへの寄付が少なかった。

11月1日(土)～2日(日)　ナイトラン　三浦半島　城ヶ島
参加人数は10人と少なかったが、適当な人数であったと言っておこう。なかなか好評だった。

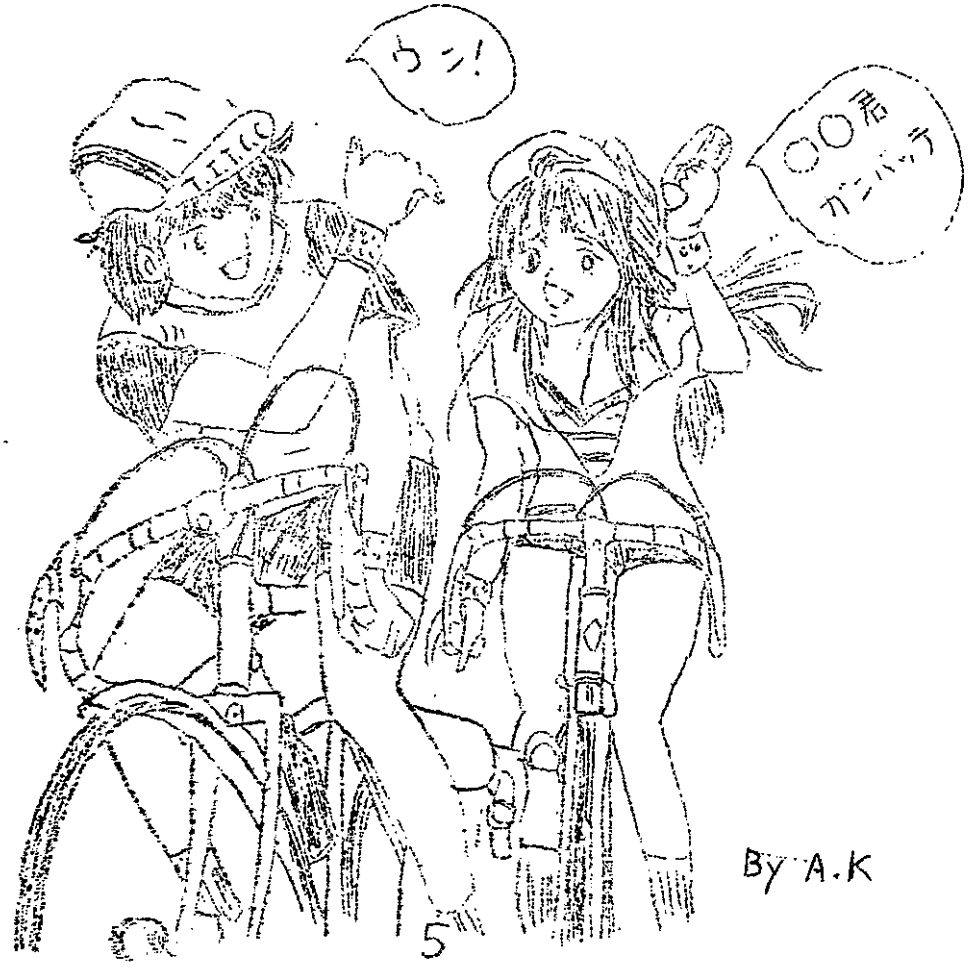
12月13日(土)～14日(日)　ESCA　CM会計
石田、今泉、吉田　参加、
主にESCAラリーについて討論する

12月20日(土)　忘年会　(コンパ峰)ボッ
酒が少なく、早くおわってしまった。だいたい野中が人の酒をかなり横取りしていたようだ。

12月23日(火)　クリスマスパーティー　(部室)
クリスマスケーキにシャンパン、とて牛(オトメ)チックにやっていたら ....
T.T.のフィルムも面白かった。

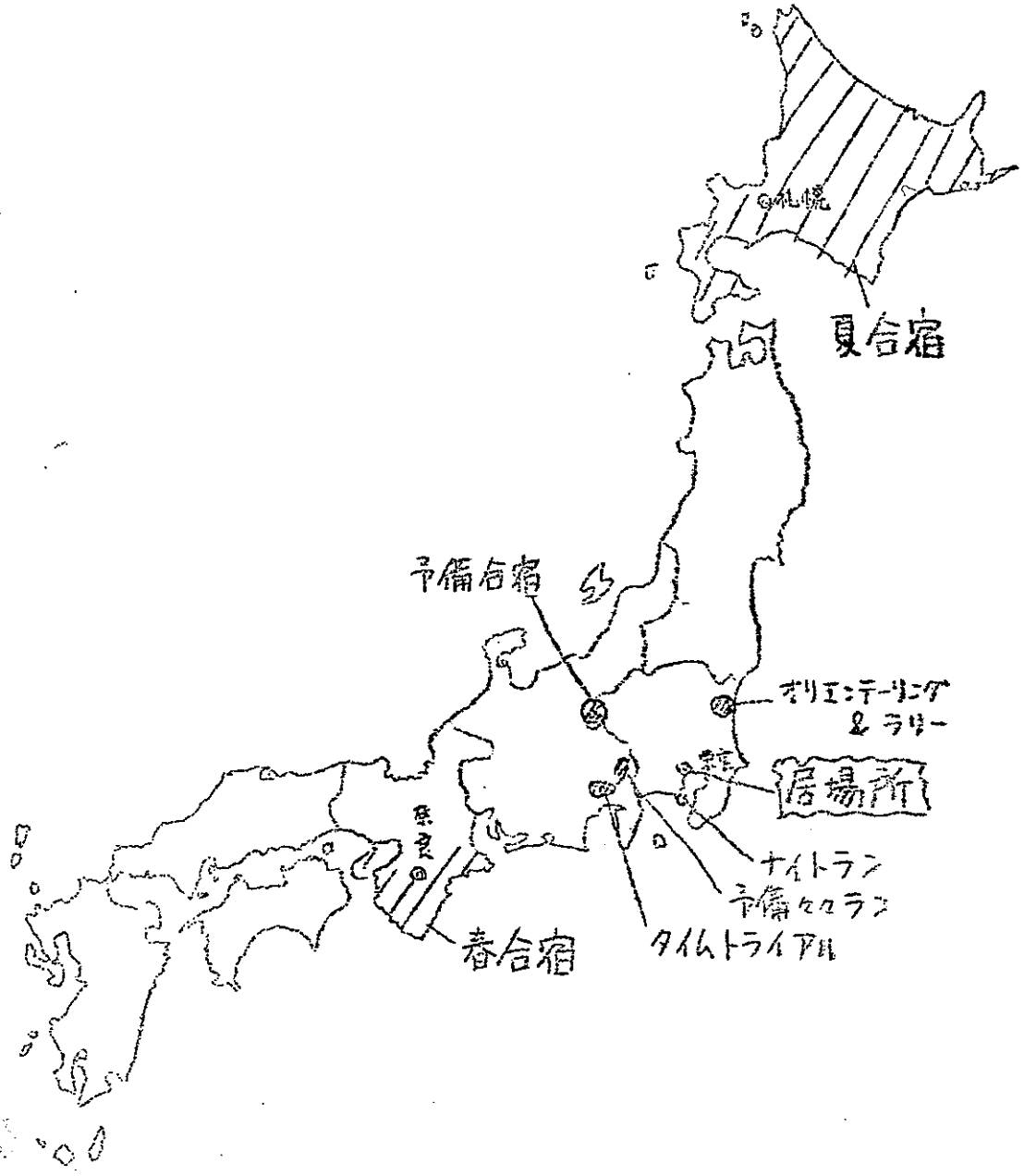
以上が自についた行事であるが、他にサイクルサッカーの活動がある。サッカーについては小林君か誰かが書いてくれるでしょう。本来ならサッカーの試合にも何回か見に行ってるべきなんだけど、なんだかんだで行ってなくてごめんね。時々（といってもほんの2、3回だけど）練習を見に行ったことがある、ということで…ハイ。
（全然理由になっていないね）

トレーニングについては非常に問題アリなんだけど あんまり書く気がしないから PASS！



By A.K

80' TIT・CC 活動図



1980 T.I.T.C.S.C

SUB TITLE・・・・(秋)土曜の夜は楽しいなっと!

今でもよく思うことなんだけど、なぜボクがサイクルサッカーをやっているかということである。これは、ひとえに、三浦Ⅲさんにダマサレタとしかいいようがないのである。「チョット練習を見にこいよ。」の一声で、見に行ったが最後、いつのまにやらサッカーをやらされているのである。全く、三浦Ⅲさんが○○○○○のであります。ハイ!

さて、今年のサイクルサッカーの戦績を次にまとめておきたいと思う。

S.54	3/21	選抜リーグ 3位(三浦,山口)
〃	5/11	春季リーグ 2位(〃,〃)
〃	6/8	東日本リーグ 4位(〃,〃)
〃	6/22	関東学生選手権 2位(〃,〃)
〃	7/20	全日本リーグ 6位(〃,〃)
〃	10/19	秋季リーグ 2位(〃,〃)
〃	11/8,9	全日本選手権
〃	11/23,24	イニカレ

12/21　新戦人戦　2位（宮崎、小林）

3位（嶋田 立山）

というようなすばらしい結果だったわけです。時に秋季リーグの2位というのには、宮崎、小林君が大きく貢献しているんですよ。知ってます斎藤さん。

以下にはサイクルサッカーについて思い出すことを適当に書きならべていきたいと思う。

その1。……土曜の夜が楽しいんですよ！

なんといったって土曜の夜が楽しいんですよ。何が楽しいかといえば、それは練習が何ですよ。もちろんサッカーの練習じゃありませんがね。それは目の練習なんですよ。目の。そういえば、もうおわかりの方もいらっしゃると思いますが。土曜の夜は、体育館では、代C.S.Cと舞踏研だけが練習をしているんですよ。だいたい舞踏研というのは、フォークダンスと違って、ミニスカートをよくはいているんですよね。そして腰をフリフリ、胸をそらして、股を開いて、乳をモミモミではなかった。まあ、ようするに、イロ、ポイですな。それに対して

扨C.S.Cはどうかというと、テクノポリも真青の宮崎君、「歩く怪獣」の立山君を始めとして、ムサクルシイ男供ばかり8人ばかりでして、男8人で熱気ムンムンとはなってみても、ムナシイんですよね。そのムナシサは「ア～、又今夜もやってしまった。この右手が悪いんだ。」と嘆く斎藤さんのムナシサと同じくらいなんですよね。（こういう表現を使うとよくわかるでしょう。三井君）そこで、ついつい隣へ目がいってしまうんですよね。ハブの調節をしているようなつりをしてギラギラとした視線を送っている立山君。ちょっと一服といって、タバコをすいながらチラチラと見る山口さん、まん中のネットへ向けて一生懸命シュートを打っているようなかっこうをしている三浦君「ナカナカ、いいもんたな。舞踏研へ入ればよかった」と嘆く三浦君。。。。。。かくいう私は、まん中のネット付近でわざところんで、下から見上げて、なんとかパンティーを見てやろうとムナシイ努力を続けているんですよね。かくも、土曜の夜はムナシクすぎていく。

その2・・・・サイクルサッカーは厳しいスポーツ!

サイクルサッカーていうのは高度な技術を必要とする為、かなりむずかしいスポーツなんだよね。誰でもすぐできるというわけにはいかないそれだけにたまらない魅力があるんだよね。そうそこには男と男のハダカのぶつかり合いがある。たくましい男達の勝負があるんだ。

(マッ・マジに書いてしまった。)

その3・・・・練習後の楽しみ(アレのこと)

今年になって練習後の楽しみができたんですよ。そう、輸入フィルムを見れる楽しみなんすよ。Ⅲ山なんかは、練習後フィルムが見れるとなるとエラクカが入っているんだよね。ボクはあんまりそういうものにすごく興味があったりしたりなんかするから、よく覚えているんだよね。

『FASTER and FASTER』

『あんなことしてよくチにならないなあ。』

「さっきよりも速くなったなあ。」

「本当に口の中へ入れてるよ。」

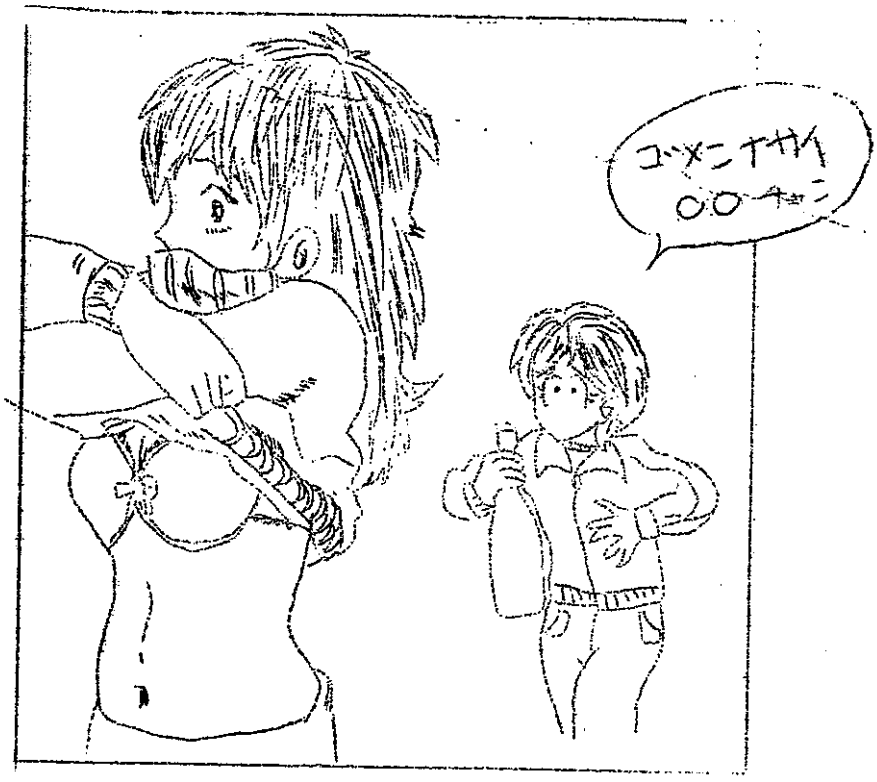
などという感想がでましたっけ。

その4……本能のままに

とにかく、一年生と試合するのは、非常に恐いことなんですよね。あいつらは危険をかえりみず結果どうなろうとかまわないという気持ちで本能のままに、つっこんでくる。その結果はみるも無残な衝突事故。いままでにも多くの犠牲者がでている。立山、宮崎の衝突による宮崎君の頭部損傷、立山君、宮崎君の衝突による立山君のジョニーのインポ化。(立山は否定しているであろうが、オレは立山がインポになったと確信している。否定したいなら、証明してみろ。オレの沙汰してやるから……本音が出てしまった)。立山、宮崎君の衝突による……。考えてみるといつもぶつかっていると立山と宮崎だけじゃないか。やはり「デクノボリ」と「Walking Monster」は恐らしい。

その5……1年生について思うこと

今年の一年生は恐ろしいの一言につきる。



ついに東工大のジンクス、つまり新人戦は弱いというのを打ち破って3位に入ってしまったのだから。しかも、他の大学の1年と比べて格段にうまい。これは3年になった時楽しみである。皆さんも応援してやってほしい。そのまえに宮崎・小林君組にも大いに期待してほしいと言ってみたりして。

※以上の文中において「斎藤さん」2度ほど登場いたしましたが、これは偶然「斎藤さん」の事が思いついただけなのであしからず。

オリエンテーリング＆ラリー

2年　嶋　信夫

今日は昭和56年1月10日、つい先日オリエンテーリング＆ラリーが行なわれたわけだが、僕の書くのは何と昨年のオリエンテーリング＆ラリーである。もうほとんど忘れてしまったが、まあぼつぼつ思い出しながら書いてみよう。

昭和54年度のオリエンテーリング＆ラリーは昭和55年1月11日～12日にかけて水戸周辺で行なわれた。第1日目のオリエンテーリングの僕の出走は確か10番目であった。出走前はどこそこを走ろうと考えていたが実際走ってみると行きあたりばったりであった。それでもこの頃は比較的元気であったから点数の高いところを目指して走った。しかし、オリエンテーリング実施の場所とゴールとがかなり離れていたことや、答案用紙に答をうつすのがおくれたことなどでかなり遅刻してしまい大幅な減点となってしまった。もっともそれ以上に他の人も遅刻したため結局僕は参加者n人中、$n+1/2$ 番目（ただしnは20近くの奇数）つまりまん中であった。それで2日目のラリーは1人で走ることになった。

しかし、1人で走る自信がなかったので志波さんとかわってもらうことにした。その結果今泉と組むことになった。ちなみにオリエンテーリングの優勝者は確か吉木さんだったと思う。

さて、第2日目のラリーであるが出走は石窪が1番目だったと思う。前半の距離計測区間はまずまずであったが、後半のTT区間がひどかった。途中のあかるみでくけるは、山道を逆から登りはじめるはさんざんだった。もっとも酒井・石田組のように完璧に逆から登った組もあったが……結局2日目は高橋・葉山組とどっこいどっこいの勝負でビリかブービーであった。2日目どの組が優勝したかは記憶にございません。

—備考—

嶋・今泉組 and 高橋・葉山組 …とつぼり組

酒井・石田組 …地図の読めない組

鈴木・吉田組 …ぶっちぎり組、曲がるべき角を通過してから気づく

三浦・宇佐見組 …どうでもいい組

なおその他の組については、全く覚えていないのであしからず。

春合宿"松"コース

2年　宇佐見健太郎

とき：1980年の休み（春）のいつか。
ところ：紀伊半島のどこか。
出場者：高橋さん，斉藤さん，村瀬君，
　　石田君，私（うさみくん）

以上のような状況で，昭和55年春合宿"松コース"のお話をしてみたいと思います。まず松という名称から説明いたしましょう。そう，言うまでもなく，松，竹，梅，の'松'なのであります。そう，一番リッチな班なのであります。すくなくともそういう予定であったのであります。だから，東京から西へ向かう時も他の班のように，大垣行日本最長ドン行，などを使わずに，新幹線に近鉄特急，なのであります。と言っても私と石田君以外は現地集合ではあったけれども。第一日目，松班は伊勢志摩ユースに集合ということになっておりました。ここでプリーランをやっていた高橋さん斉藤さん，ギフからやって来る村瀬君，そして東京発松コースの石田君，宇佐見君がいっしょになったのであります。

て事なをませ歌氏おせれな。は、に高のでとなのね を
た時。」らまジ諸はまけきす。人し器をものるラそま 辺
を食イ歌かりモ一飯り、大でのに容度くもなそはな 周
画のシのめあジパ御あん局の他口の密づうにり君ラ 湾
計スマ謝初はモルとはせ結うのに積は基いねなみよ ゴ
のーゾ感ゃくがへいでまでまそん体にに重くさる アで
泊ユオにリ多人のなうりのしめか同る理恵段なうけ 形式
連のが飯そう数これまあいてじさ。れ原知三はのか
にこう御。そのこ歌たはな っはをた入うの分子を
ス、い「すはち、でのでてなをのしを い活めし半いを惑した。
ーがとにまホうと声と犬膳にんうま質と生めまよ迷しラ
ユすい前りアのすな」ははとさいり物いそ縮かに
このでろのあう人まきす達にこ藤とおのよこ圧おた。人んリー
このし事で歌十り大で私腹う有して量ばれ。でし他せフ
はたも食のに何お「け。空歌でめし多れこう いでなまは
達いおとうめ。て、ずかもでこ縮行りす、ょぱいうし日
私てがん歌じん っはあんど声こ圧実よくでしょ一勢よは翌

見て回りました。これといっておもしろい所はなかったのですが一ヶ所だけ妙な地域がありました。新興住宅地のように小さな家，と言うより小屋がポツンポツンと建っています。それだけなら普通の景色なのですが、それらの建物の壁に女の人の裸の絵や写真が描いてあったりはってあったりしたのです。そうです、ストリップ小屋の集合団地なのであります。こんど行くときは夜にすべきです。ここまで書いたら疲れてきたので、これから話を時々ワープさせることにします。
さて話を二見浦と私達の感動の対面にとばしましょう。イセシマユースを出発した私達はあの有名な観光地、二見浦を目ざしてセッセセッセと自転車をとばしておりました。あの二見浦を今日，この目で見られるんだという気持ちで自然にペダルも軽くなります。海の上にそびえる巨大な二つの岩山，その間に世にも巨大な綱が渡してある，そんな光景を思い浮かべておりました。そして二見浦に着いたのです。私達は自転車を降り二見浦を目ざして海岸を

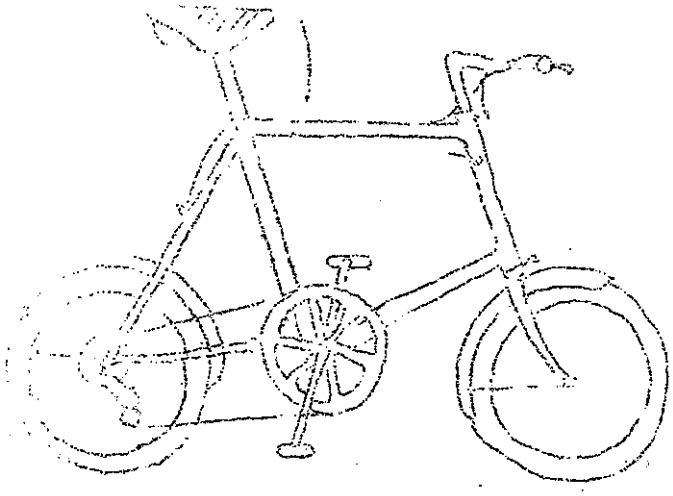
と曲がると最初の角を曲がりました。あの角を曲がって見て見ると二見浦が見えるんだ。そしてその角を曲がりました。「アッ」，私達が二見浦を見て「うそだ！」，と上げた声ですそして「うそだ！」，そこには私達が想象していた10分の1、いや100分の1の二見浦があったのです。あまりの小ささに、これは観光用のにせものではないのか，という声も出たくらいです。ガックリきた私達にその日はさらに災難が待っていました。その日泊った太江寺ユースはまさに日本最悪環境のユースでしょう。このユースについていろいろと説明しようと思いましたがやめにします。一度実際に行ってみるのが一番でしょう。途中輪行で串本に着いた私達は，一段落したあと駅前の食堂に入りました。そこで私達は、松コースらしく安いそばなどを食べた後、買い出しをしようとその食堂のお姉さんに米屋のある場所を聞いたのでした。その娘はいっしょうけんめいに居のある所をおしえてくれるのです。しかしその娘があんまりカワユかったので私達はその娘の顔ばかり見ており、米屋の場所はぜんぜ

ん覚えておりませんでした。ワープ
私達が奈良県の十津川という山奥を走
っている時、石田君はある店でパンを
買ったのでした。そのパンを石田君は、
おなかが減ったら食べようと思ったの
です。さて、山の中をしばらく走ると腹
がへってきました。そこで石田君はさき
ほど買い求めたクリームパンを食べよ
うとしました。しかし食べようとした瞬間
へんなにおいがしたのです。このパンは
少しおかしいのではないのか。石田君は
こう思いましたが松コースを選んだ
石田君のことですから迷わずパンを
食べてしまいました。さて、その夜、
川津Y.Hに着いた石田君は胃の中で
反乱が起きているのに少し気がつき
ました。これはおかしい、すこし横に
なっていよう、と思った瞬間、胃の中の
反乱軍は食道をかけ上り、口から外
界へと攻めてきたのでした。その夜、
石田君は胃の中がからっぽの状態でベ
ットの中で仮死していました。ワープ
さて私達はなんとか生き返った石田
君とともに、山奥をぬけ出して五条の
町へと出てきたのです。そこで村瀬

NANDENIKAIMOUNAJIKOTOOKAKANAKUTEMOIIINAINODA!

君とうさみ君は体の調子のおかしいのに気づいたのです。どうやら石田君のクリームパン症候群がこの二人にも移ったようです。その夜病人三人をかかえた松班は、今合宿初の民宿ということになりました。その民宿には関西弁を使う(あたりまえかな?)へんなおばちゃんが一人だけおり、私達は大広間のような広大な部屋へ通されたのでした。夕食の時間になり、私達はここしばらく見たことのないごちそうの前へとすわったのでした。ところが、石田君と村瀬君とうさみ君はもちろん食欲がありません。その三人を見ていた高橋さんもあまり食欲がないようです。一人、斉藤さんだけが元気よく他の人のおかずを食べてくれました。その夜うさみ君は完全に石田君の病気にのり移られ、ふとんとトイレの間を往復したのでした。村瀬君は、意識不明の状態でふとんの中にもぐっていました。その民宿で連泊した松班は、なんとか元気を取りもどし、あとはなにごとも事件がなく、目的地、奈良の都へ到着したのでした。しかし合宿中に病気にな

ることほど心細いことはありません。みなさんも、その土地の水や食物にきをつけて病気にならないようにしましょう。今までエピソードだけをオムニバス形式で書いてきましたがコースやその他のことを知りたい人はリーレポでも見て下さい。
なお本文中には、一部フィクションも含まれている可能性もあり（なにしろ春合宿のことを翌年の正月に書いているのだから）その場合の登場人物、団体名などは実在のものと一切関係がありません。



『「なに～部誌に春合宿のことを書くんやと～そんなもん覚えとるわけないやないけー」という題』

2年生　今泉 浩幸

「しんじさん素敵!!」そう叫びながらMはしんじの胸に顔を埋めた。しんじはやさしくMのかたい髪を掻き上げ…額に優しくはびるを触れて……「リンスしてる」とささやいた。Mは黙ったままである。目の元に丸石エンペラーのフレームが冷たく輝いている。ふと妙な声に後ろを振り返ると、そこではM'が女装した松尾氏をうしろから攻めているではないか。この怪奇ともいえる光景を目のあたりにした純情少年（弱冠未成年）はひとり、愛車デザートブラウンのユーラシアにまたがり暗黒のR42を夢中で駆け出した。ここは本州最南端の地潮岬に近い春の夜の波打ちぎわである。

「うそでっせえ～～」

代々、梅雨の春合宿12日間の行程は極めて平穏な、極めて質素な毎日であった。その固定化された1日のサイクルはESCAニュース79年版に詳細に報告されているので、ここでは省略しよう。またコースならびに日程はツーリ

ングレポートを参照してもらうことにしてここではその詳細に触れることは避けたい(いずれも筆者作)。なんと春合宿について書くのはこれで3本目である。唯一のねたで3本もの作品を産み出すことは、我々T.I.T.C.C.部員にとって至難の技であることは明白であろう。よって創作意欲をいやおうなく欠かされた筆者は、この原稿の作成を後へ後へと引き伸ばし、到々ここまで追いつめられてしまった。印刷はもうはじまっており、私のボールペン原紙が提出されなければ、次ページ以降のページナンバーが確定できず印刷活動に支障をきたすというのである。

筆者は彼もちまえの強い責任感によってなんとか書きはじめることを心に誓った。だが、あくまでも誓っただけである。彼はいつになったら本当に書きはじめるのだろうか。

(本文おわり ―― 以下おまけ ――)

次ページへ

おわび　1ページ以上をくだらない能書きに費しみな様の貴重な紙資源を浪費したこと、ならびにサッカーをやっていない三ッ井、吉田までも異常性格者に仕立てたことを重ねておわび致します

3月26日 — 3月29日

那智勝浦町から潮岬を訪れ白浜町を経由するまでの4日間は天候にも恵まれ、その分夜は寒かったが、うららかな春の海岸沿いの R42 を軽快に走った。この中で今も印象に残っているのは日置川町の海辺で大成功「和歌いため」を食べながら堤防に腰かけて眺めた海に沈む夕日である。

3月29日 — 4月 1日

足慣らしも終っていよいよ内陸部へのチャレンジである。天候は4月1日の川津コースから高野山までのどしゃ雨を除いてほぼ良好であった。やはり私は山の方が好きである。海はどうも日本中どこでも同じように見えて変化がない。それに比して山はすべてが新鮮だ。道端にころがっている石ころひとつでもまた草の一本にも暖かい趣が感じとられ、それにもまして木々の空隙からのぞく空の形は他では絶対に見ることのできないものである。

4月2日 — 4月6日

合羽を峠を越し、あとは奈良まで街中を走っていかねばならない。途中吉野で連泊し、桜にはちょっとはやいようだったが枝見酒を楽しんだ。

(12日間の全走行距離　420 km
〃　全費用　27000円以下

ノンフィクション・ノベル

K・K・K団の暗躍

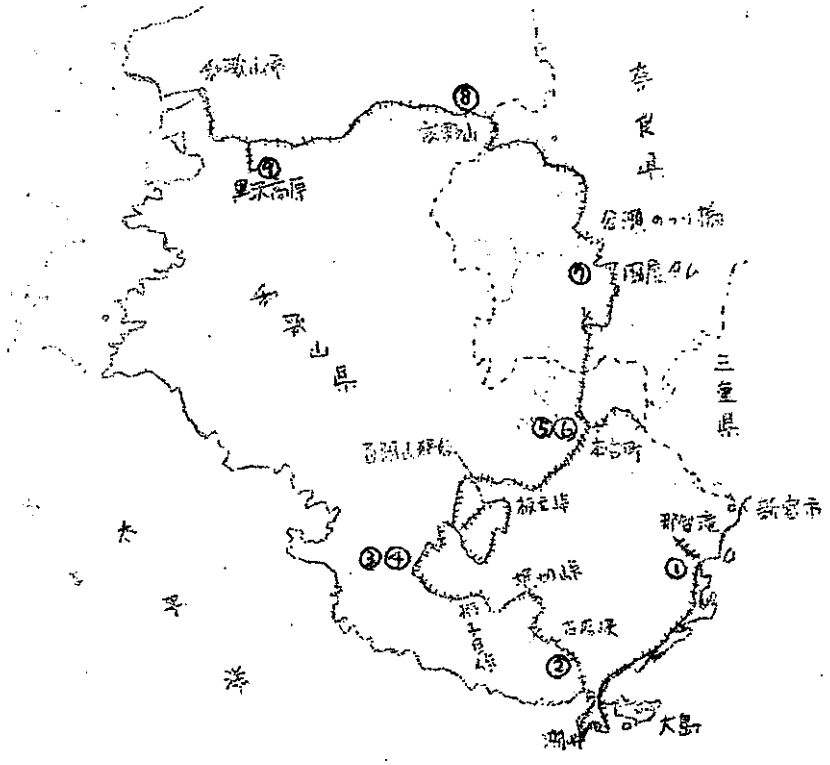
―春合宿の全容―

葉山宏幸

はじめに

ノンフィクション・ノベルとは、ノンフィクション(事実)を基にして書かれたノベル(創作)であって、純粋なノンフィクションではないので、多少の誇張が入ることをお断りしておく。尚彼ら4人組については、本文中仮名にしているが、正体を知りたいという方に、学籍番号にて代弁しておく。7545　8313　8211　9576

K・K・K団のとったコース ―― ○宿泊地



～序　章～

ある山の中の道。一台のバスが坂道を下っていた。その後ろには、一台の自転車がぴったりくっついていた。その自転車には、サイドバッグが前後2つずつ計4つ、ついていた。カーブにさしかかった。バスは減速して、慎重にカーブを切った。自転車は鋭くカーブを曲がった。そのとき、……道路上に石があった。自転車はそれに乗り上げ、転倒した。乗っていた男は投げ出されたが、ケガはなく、すぐ横になっている自転車に近づいた。しかし、それを見た男は天を見上げた。----フレームが折れていた。

所変わって、ある山の中の林道。一人の男が、自転車を横に、茫然として立っていた。☆道がない。道が落ちている。☆　しばらくして、意を決したかのように、彼は自転車からバッグらをとりはずし、別々にかついで、下に見える道まで降りていった。------仕事が終わった彼は、ただ「畜生」とつぶやいた。

第一章　異邦人　―永すぎた春―

3月26日昼、那智駅前にてK・K・K団の4人は合流した。一週間前から来ていた団長の"鳥打帽"。東京から走ってきて、名古屋でタルーカを換えた"フルサイド"。今、電車で到着した"タートル"と"未成年"の4人である。彼らは、那智の滝で身を清め、延命のお守りをもらい、明日に備えてYHで騒ぎ、叱られた。

第二章　水の葬列　―熊野島―

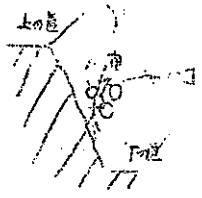
翌日、4人は本州最南端に向かって暴走し、途中で大島に渡った。船中、未成年は、財布をなくしたと騒いだが、あっさり見つかる。しかし、そのショックか、彼は当分の間　みんなに遅れをとる。大島の東端にある「トルコ軍遭難記念」は、係員のいないすきに、

無料(ダマ)で入る。その日の夜は寒かった。

28日は朝早く起き、午前中に3つの(絶切峠)峠を越え、買い出しをすませ、午後3時、河原にベースキャンプを張った。

第三章　風立ちぬ　―犬になりたくなかった犬―

29日、秘境百間山渓谷探険である。何も恐くないK・K・K団であるが、秘境という文句に恐れをなしたのか、パン一個で犬をボディガードに雇い、随行させた。探険途中、カメラのキャップを落としたフルサイドは、滝壺に決死のダイビングをおこなった。昼飯後、板立峠へ。途中、鳥打帽はうれしそうに、カツギをみんなに指示した。その夜、強風がテントを襲い、



翌朝、テント袋(?)が川にあと一メートルのところで見つかった。

第四章　魔の山　―偽だらけの山河―

30日、K・K・K団は人目を盗けるかの如く、途中から林道に入った。峡谷沿いの道、登りは鳥打帽がパンクしただけで無難に済んだが、下り------フルサイドがフルサイドの重みに耐えかねてかバースト。登りはトップだった未成年転倒。ゴール直前にフルサイド再びパンク。フルサイドの自転車終わる。

第五章　泥にまみれて　―エクソシスト―

31日、ウォータージェットに乗って瀞峡を見学してから、フルサイドは自転車修理のためバスで新宮へ。残りの3人は熊野本宮へ。そこで㊙班と合流、夜、TVでエクソシストを見る。㊙のメンバーでただ一人最後まで見ていた工氏は翌日、クリームパンから悪魔に

とり憑かれた。
1日、㊙と抜きつ抜かれながら北上。結局また同じYHに泊まる。

第六章　幽ぶらりんの男　―恐怖の谷―

谷瀬のつり橋にて。前日から腹の具合がおかしかったタートルは、元気につり橋を渡っていったが、途中でどういうわけか、はいつくばってしまった。彼は笑いで災厄に誤魔化した。フルサイドの自転車も不調。未だ年は好調だったが、その日の午後、大きな雹にぶち当たるのであった。

第七章　地獄変　―けものみち―

㊙と別れたK・K・K団の一行は、高野山への道へ。道はすぐダートになる。標高差約七百米。山あいを抜けるアップダウンの道。せっかく登った分を下り

ながら進む。未成年は後半は押しに徹する。それでも陽のある内に着いた。

その日の泊まりは高野山YH。当日の泊まり客は、男4女6。健全なるK・K・K団。場所柄か食事が終わるとすぐに部屋に帰ってスンガを読んでいたが、女人から一人来てくれとお呼びがかかる。リーダー鳥打帽が出向いてみると、親が出るとまずいので代わりに男に電話をかけてくれのこと。その日、途中銀行・民宿三連泊が決まった。さらに疲れていた彼らは早々に床につこうとしたが、坊主らが騒いでいて、安眠を妨げられた。

第八章　何処へ　―けものは故郷をめざす―

3日、高野山からの下りを快調にとばす。生石高原と黒沢高原のどちらに

しようか迷ったが、結局標高の低い黒沢高原を選ぶ。鳥打帽は途中でホビンを買いこみ、黒沢高原の登りで遅れをとる。その日は打ち上げということで、ビーフシチュー＋バターパンを買う。そして、いつものようにワンカップをあけた。

今日、和歌山まで走り、輪行して奈良まで、そして奈良から民宿まで。十日間にわたるK・K・K団の暗躍はここに終りを告げた。表街道を避け、人目を避け、裏街道を好んで走った。秘境を求め、かもぎ・押しをいとわず、最後は民宿に3日泊まった。彼らは南紀に何を残しただろうか。彼らはこれからどこへ行くのか。とにかく本編はこれにて終わりを告げる。

エピローグ

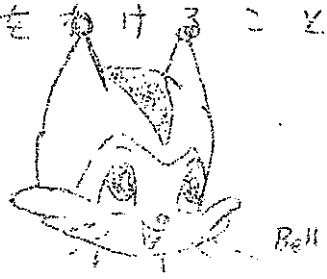
5日は、奈良で各自フリーランをおこなった。（フルサイドとタートルをいっしょで、門限を二時間オーバーした。）（未成年は寺・神社にはいかず、東の山を回って、門限より二時間早く帰ってきた。）

その日の夜、ふすま一枚隔てた向こうに、女子あまき2名が泊まったが、民宿の主人からふすまに釘を打ちつけ、K・K・K団の4人は顔も見なかった。また夕飯は外で食ったが、当然の如く、二人前食べた。

6日は、午前中フリーラン。夜、打ち上げ。鳥打帽は翌日から営業が始まるとかで、徹夜して、翌日一番の新幹線で東京に帰った。

あとがき（OSHI, PANK etc）

今回の合宿で、私は〝OSHI〟を3回だした。〝OSHI〟というものはパープッて、もうチャリンコに乗れる状態でなくなったとき、又はチャリンコを正常に運転できない道路に出会ったときにだすものである。最初の板立峠への〝OSHI〟は試にパープリンOSHIであった。高野山のときもそれに近い状態であった。しかし、2度目の〝OSHI〟は保険の〝OSHI〟であった。その証拠に　途中からDSHIたにもかかわらずトップに峠に着いた。余裕たとスピードも違う。それ以来、私はパープる前に、OSHIこと宣言としている。最後に、私は今までPANKしたことはないが、これは運転技術というより、タイヤが良かったせいであろう。しかし、そのタイヤもとっくに限界を通りこしている。今度の合宿では、新品のタイヤで現われ、パンクまたはバーストして、皆に迷惑をかけることであろう。



新歓コンパ

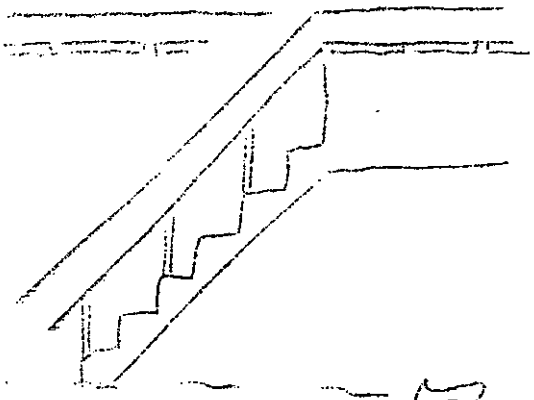
嶋田恵三

う～苦しい。う～気持ち悪い。僕は目をさました。目を開けると天井がぐるぐる回転している。すぐに目を閉じてしまう。もう一度目を開けるが、まだ天井が回っている。ますます気分が悪くなる。おまけに小便があふれんばかりにたまっている。ますます気分が悪くなる。目を閉じて昨日のことを思い出してみた。たしか昨日は新歓コンパがあったはずだ。僕の記憶はだんだんよみがえってきたが、今、僕はどういう所で寝ているのかわからない。そんなことより小便をかたづけることが先だ。便所はどこだとあたりを見回すが、目がまわっている上、部屋がうす暗いのでどこにドアがあ

るのかわからない。僕の回りには数人の人が寝ているが、誰が寝ているのかわからない。誰かが起きるのを待ったが誰も起きてくれない。「もう限界や。」と思ったところで立ち上がり、歩き出した。目がまわっているのでまっすぐに歩けない。ふらふら歩きながらドアにたどりつき、廊下を通って便所にたどりついた。(どうして便所のあるところがわかったのかは記憶にない。誰かが起きたんだっけかな〜〜〜?)小便を終えすっきりしたのもつかの間、便器を見たら突然はき気をもよおしたのである。しかし、胃液すら出てくれない。苦しさが増すばかりである。便器を前にしてかがんだとき、はじめて自分のジーパンの汚れに気づいた。おそらく昨晩でる物はすべてはき出してしまったのであろう。汚れたジーパンを見たら、またはき気をも

よおもったが、やはり何も出なかった。
新歓コンパで部室で飲み始め、スロープへ行って騒いだところまでは僕だって覚えている。しかし、スロープから、あの天井の回る酒井さんの下宿まで行った記憶が全くない。いったいあの空白の10時間に何があったのだろう。…

先輩たちの言うことが本当なのだろう……僕は信じられない、いや、信じたくない。



そ、そんな、はずが

新歓ラン〔5月25日(日)〕

嶋田恵三

一年ぶりのサイクリングということでとっても楽しみにしていたのであります。しかし，新歓コンパにつづいてこの日も，天は我を見はなしたのであります。

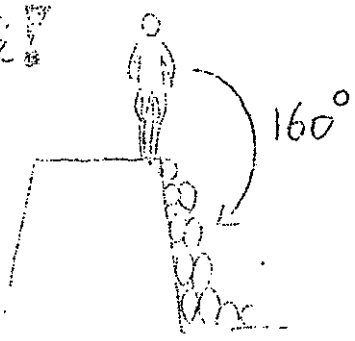
出発前に三浦Iが「また，ころぶんじゃないかなあ。」などと冗談半分に言っていたら，それが現実となってしまったのです。うでをすりむいた三浦を見て笑っていますと，三浦いわく

「もう，ころびたくないよ。今度ころびそうになったら誰かにしがみつこう。」

などと，これも冗談で言ったのでしょうが，またまた現実となってしまったのです。

多摩川のサイクリングロードを先頭が石取さんで，僕は3～4番めを走っていたのです。そして，三浦Iは僕の後ろを走っていたので

あります。日曜日ということで小供たちがたくさんサイクリングロードに来ていました。中にはたちの悪いガキがいて、サイクリングロード上に自転車を置いて通せんぼしているのです。しかたなく先頭の名取さんはストップします。先頭から順に止まり、僕も止まりました。しかし、三浦は止まりません。僕が前方でじゃまをしているガキどもに気をとられていると、後方から「うおぁぁぁ」というすさまじい叫び声。何事かと振り返えろうとした、まさにその瞬間、三浦は自転車とともにすさまじい勢いで僕の自転車に衝突。おかげで三浦のほうはストップしたが、三浦の運動エネルギーをもらった私はもう大変!!



土手のはじに立っていた私はそのままだったら頭からころげ落ちるところでしたが

とっさにハンドルを切って自転車に乗ったまま土手を急降下。そして下まで降りてからぶったおれたのであります。ハンドルが曲がっただけで体に異常がなかったのは幸いでした。

これだけで不幸は終わりません。さらに続くのです。白草園の直前の坂で，パンクをしてしまい，チューブを取り換えていると，虫とりに来ていたガキどもが
「あーあ，こんなところでパンクしちゃってえ。」
などと言うし，白草園はちっともおもしろくないし，何も見えない天望台はあるし，さっきとり換えたチューブはスローパンクをしているしといったことで不幸ばかり。

新歓コンパに続いていやな日でした。

「松姫峠は俺に何をさせようとしているのか？」

～よびよびらん～

1ねん　5るい　みうらつねひろ

予備予備ランが行なわれたのは、7月6日の日曜日でありました。最初の予定では6月29日の日曜日にやるはずだったのですが、雨のために一週間延期されたのでした。

さて、当日はよく晴れた日でした。大学に入るまでサイクリングの経験のなかったぼくにとって、輪行は初めてのことだったので、不安で前日はよく眠れませんでした。今思えば、これがあの呪わしい悪夢のようなできごとの

第一の原因になっていたのでありました。睡眠不足で食欲のなかったぼくは、朝めしになんとカップラーメンなんぞを食べてしまったのです。これが第二の原因となったことは疑いようのない事実であります。

行先は松姫峠という所で、中央本線の猿橋駅に集合することになっていました。東久留米に住んでいるぼくは、清瀬に住んでいる立山くんと一緒に行くことにしていました。余談になりますが、立山くんは都立国立高校の出身で、彼の学校と　ぼくの出身高校である都立立川高校は、東京の多摩地区で72藩として一緒に扱われている、いわば兄弟校のような間柄なのです。（もちろん立高が"兄"で国高が"弟"なので

ありますが。）そして東久留米市と清瀬市は隣接していて、こちらも兄弟のような関係にあるのです。これはなんとまあ奇遇ではありませんか。さらに言うと、彼のG.F.（高校時代の）はなんとぼくの出身中学である、東久留米市立大門中学校の出身なのです。こうなるともう、ぼくと彼は運命の糸で結ばれていると言っても過言ではないでしょう。（この運命の糸に操られて、ぼくはサイクルサッカーをやるはめにおちいったと言えるでしょう。）

余談が長くなってしまったのでこのへんでやめにして、本題に戻ることにします。家を出たのは7時過ぎ頃だったでしょうか。初めてかついだ輪行袋の重かったこと！駅まで普通に歩けば

10分で行けるのに、その倍くらいかかってしまいました。彼との待ち合わせ場所である武蔵野線の新秋津駅に着いたのは7時半頃だったと思います。彼は家から新秋津まで自転車に乗ってきたらしく、ちょうど輪行を終えようとした所でした。ここでまた余談になりますが、ぼくは高校時代にこの武蔵野線を使って通学していました。（もちろん彼もそうですが。）この武蔵野線は、一応国電ということになっていますが、実体はローカル線に等しく、多い時で1時間に3本、少ない時は1時間に1本しか走っていないのです。おかげで高校時代は寒風吹きすさぶ中、駅のホームで20分以上も電車を待つことがしばしばあったのでした。

さて、武蔵野線に乗りこんだぼくたちは、10分ほどして西国分寺に着くと、中央線に乗りかえて高尾まで行きました。高尾に着くと、ホームにはすでに先輩や他の1年生がいました。高尾発の普通列車に乗り、猿橋に着いたのは9時半頃だったでしょうか。駅の外に出てみると、もうすでにたくさんの先輩たちが来ていました。ぼくたちはすぐに輪行を始めましたが、初めての輪行だったぼくは、悪戦苦闘して何とか自転車を組み立てたものの、他の人の2倍くらい時間がかかってしまいました。

記念写真を撮影して出発。新歓ランですでに先輩たちや他の一年生に比べて"リキ"に劣ることを自覚していたぼ

くは、果たして峠なんか自転車で上る
ことができるのだろうかという不安を
抱きつつ、ペダルを踏んでいました。
峠までの道は、途中砂利道の所もあり
ましたが、ほとんどが舗装された道で
した。最初のうちはそれほどきつい上
りでなかったため、おくれながらも何
とかついていくことができました。何
せこの1年運動らしい運動をしていな
かったのですから、リキがないのも当
然といえば当然の話。中学・高校とバ
レーボールをやっていたので、少々の
ことなら大丈夫とたかをくくっていた
のですが、新幹ランでそれが全くの誤
りであることを悟りました。負け惜し
みになりますが、今から考えると、自
転車をこぐのには、一種のコツのよう

なものがあるのではないでしょうか。もちろんリキがあればそれにこしたことはないのですが、リキがなければないなりに、それ相応の走り方があるように思います。リキがないのに一生懸命力を入れてペダルを踏んではすぐに疲れてしまいます。その時のぼくはまさにそうでした。

途中2,3回休憩がありましたが、そのたびにぼくは、つりそうになる足をさすり、慣れない前傾姿勢で痛くなった腰を伸ばしながら、ドタッとすわりこむ寸前の状態でした。最後の全体の休憩はどの辺だったでしょうか。部長の三浦さんが、「ここからは上りがきつくなるから、途中休憩してもいいからみんな自分のペースで上るように。」

と言いました。ここまでは、ビリの方ではありましたが、何とか上ってこれました。そうです、悪夢はここから始まったのです！まわりでは、みんなパンやおにぎりなどを食べていました。何し3朝めしにカップラーメン1個しか食べていなかったのですから、当然ぼくもおなかがすいていました。しかしお弁当がおにぎりでなかったため、食べるのが面倒くさくて結局何も食べなかったのです。今考えると、これが最大の敗因でした。パンやお菓子を持ってくればよかったのに！何し3これほど長い坂道を自転車で上ったことなどなかったので、こんなに疲れるものとは思っていなかったのです。睡眠不足の上に腹ペコではヒてもリキがでる

わけはありません。それでなくともリキがないのに。余談になりますが、この事件以来、ぼくは必ずフロントバッグにパンを常備するようにしました。そして休憩するときはもちろん、走りながらでもパンを取り出して食べるようになったのでした。（これは夏合宿でぼくと一緒だった人に聞いてもらえればわかるでしょう。）

さて、空腹のまま再び走り出したぼくは、それでも最初のうちはないリキを振りしぼってペダルを踏んでいました。もちろんインナーローですから、なかなか前に進みません。そのうちインナーローでもペダルが重く感じられるようになってきました。頭ではペダルを踏もうと思っているのに、足が思

うように動きません。そうこうしているうちについに1回目のダウン。少し休んでまたこぎ始めましたが、しばらく進むとまた足が動かなくなる始末。休憩とペダル踏みを繰り返すうちに、休憩時間とペダルを踏む時間は反比例して、休憩時間だけがどんどん長くなるばかり。休まないではいられないほど足がだるくなってしまったのでした。そのうちに、三浦さんと斉藤さんに追いつかれました。何をかくそう、2人はスイーパーとして一番後ろからやってきたのでした。つまりぼくは完全にビリになってしまったわけです。その時ぼくはもう完璧に終わった状態でした。2人の手前何とか自転車に乗らなければと思って必死にペダルを踏むの

ですが、少し進むともう自転車を倒してしまう始末。そのたびに三浦さんや斉藤さんから、「しっかりしろ。」「大丈夫か。」という言葉をかけられ、「大丈夫です。」と答えるものの、足はちっともいうことを聞きません。まるで平地を走っているように平気な顔でペダルを踏んでいる2人を見ると、とても普通の人間とは思えず、「こいつら超人か。」と心の中でつぶやきつつ、(三浦さんと斉藤さん、失礼しました。) 足に力を入れるものの、足のだるさには勝てず、とうとう自転車を押して上るはめにおちいりました。そうこうするうちにも日ざしは強くなるばかり。ふらふらの状態で自転車を押していましたが、そのうちに歩くことさえ苦痛になりまし

た。２人は「もうすぐ頂上だからがんばれ。」というようなことを言っていましたが、その言葉も頭に入らなくなり、暑さのせいもあって、頭がボーッとして目の前が暗くなり、ついに本当にダウンしてしまったのです。自分ではわからなかったのですが、道路のまん中に大の字に寝っころがってしまったのだそうです。

それから先のことはもう書くにしのびありません。倒れた場所は本当に頂上のすぐ近くだったらしく、２人が助けを求めて叫ぶと、立山くんと嶋田くんがわざわざ助けに来てくれました。もう何が何だかわからないままに自転車を押して行くと、前方にたくさんの人たちが見えました。最後の力を振り

しぼって自転車にまたがり、ペダルを踏んで、やっとこさ頂上に着きました。もうろうとした意識の中で、「松姫峠」という石に彫られた文字を見た瞬間、「ああ着いたんだな」という何とも言えないほっとした気分になりました。そのあとどうなったかについては、写真を見てもらえればわかりますので、ここでは省略させていただきます。

全く悪夢としか言いようのない一日でした。多大な御迷惑をおかけした部員のみなさんに深くおわびいたします。最後までぼくを見捨てず一緒に走ってくれた三浦さんと斉藤さん、本当にありがとうございました。あの時おふたりがいてくれなかったら、現在のぼくはなかったでしょう。やっぱり先輩は

いいなあ。ぼくも後輩からそう思われるような先輩になりたいと思います。最後に、この体験でぼくが得た貴重な教訓をしるすことによって、この文章を終わらせていただくことにします。

気をつけよう!
急な坂道とカップラーメン!!

予備合宿　波頭 伸哉

僕がこれから書こうとしているのは1980年夏の予備合宿のことである。僕がこの合宿についてなぜ書くかというと、おそらく僕が他の部員にかけた迷惑が多かったからだと思う。僕にとってこの合宿ほどつらかった旅行はなかった。では、1日目から僕の思ったことを書いてみたいと思う。

2泊3日の予備合宿は7月14・15・16日にかけて行なわれたが、梅雨は開けたとは、いえ雨まじりの合宿となってしまった。僕は、予備合宿が行なわれるまでは、1泊2日のツーリングに数回行ったことがあるだけだった。そのせいか出発前日は、準備や用意で大変だった。まず自転車だが僕の自転車は完全なランドナーだったのでキャンピングキャリヤやサイドバックがついていなかった。そこで、僕は近くの自転車屋に行って買ったのだが、自分の自転車にキャリヤをつけるのに手間取って時間がかかってしまった。何とか準備できた時は本当に助かったと思った。その自転車にシュラフとか共同装備など

の全ての備品を入れて感じたことは、なんと重い自転車ということである。次の日の朝の輪行で全ての荷物が輪行袋に入るかどうか心配だった。

第1日目。目覚まし時計を、4時にしておいたので何とか朝早く起きる事ができた。さぁ今日から合宿だと思って心地よく起きたのだが外を見てがっくり、小雨が降っているのである。まぁたいしたことがなかったのでよかったが。輪行に手間どるのではないかと思われたので家を少し早目に出発し近くの鶴見駅に向かった。まだ朝が早いせいか駅は空いており輪行を見物してくれる(?)人もいなかった。何とか1時間弱で輪行して、京浜東北線で上野駅へ行こうとした。しかしここで手荷物キップを買ってなかった事に気がつき急いで駅長室でもらった。しかし何と輪行袋の重い事か。肩にくい込む様な重さであった。何とか無事上野駅に着き、予定より1本前の急行に乗る事ができた。前の予備予備うンをさぼってしまったのでこの日は少し早目の列車に乗った。上野駅に来ると、他の班の部員の姿は見えないが、2,3年の先輩の姿が目に入った。

列車の中では先輩達に合宿の事についで聞いたりしたが、2日目の峠がすごいという事だった。そうこうしているうちに、出発地点である万座鹿沢口に到着した。ここで再び自転車を組み合げて残りの人達が来るのを待った。この間先について先輩達は今日これから登る峠への道を地図で確かめていた。何だかんだしているうちに全員が集まり、いざ出発となった。先ずその日の夕食と次の日の朝の朝食の買い出しであった。1日目は、キャンプでは、ややマイナーなカレーライスである。カレーライスに必要な肉野菜として米、また翌日で必要なパン、バターとしてのりたまなどである。これらの買物に必要な費用は、各自から1000円づつ集められるのであった。そして購入した物は、各自に公平に分配され、目的地まで運ぶのであった。さぁ～これからが本当の出発である。今日は、2日目程きつい坂でないにしろ、相当な登りである事は確かである。出発してみて感じた事は、部員全員が1かたまりになって走るというのではなく部員各自がそれぞれのペースで走るということであった。当然僕は最後の方でひたすらインナーローでペダルをゆくり回し

ていた。あ、後ろから西田さんが来た。ぬかされたら恥ずかしいんだぞと心にいい聞かせた。しかし足が動いてくれないのである。あぁついにぬかされちゃった。それにしても西田さんの脚力には、この合宿中おどかされっぱなしであった。あ、今度は、後ろから、名取さんだ。名取さんをはじめ2、3年の先輩達は、素晴らしい1年生のスリーパーであった。名取さんは僕が落伍しないように目を光らしているのであった。あっ、でももうだめ足をついてしまおうと思った。しかしここで休めば、後が続かなくなる。あっ、変速機の調子が狂ったぞ。がちゃがちゃ、がちゃあーあチェーンがはずれちゃった。しかし僕は、これ幸いにと自転車から降り直し始め、ほんの少しの休憩をとった。しかしこの後は、乗っては降り、乗っては降りの繰り返しであった。お前方にすごい急な坂、これは押そうと思ってしまった。これがいけなかった。この後、乗るのと押すのが半々位になってしまった。あっあそこで、みんなが休んでいる。あそこまでは乗らなくちゃと思う事が何度もあった。そうこうしているうちに、なんとか今日の目的地すなわち野営地に着いた。まっそれにしても遅れたとはいえ、さほど皆に迷惑をかけないですんだのでほっとした。しかし足はすごい筋肉痛だし体力も

さほどあるわけではないので2日目の車坂峠までの登りや、女神湖までの道が心配であった。川村は、この日で帰ることになっているので、僕は、少しうらやましいと思った。そうこうしているうちに、カレーライスができあがり、部員全員が一つの輪になって食べ始めた。しかし何と酒井さんのすごい食べ方なのだろう。ここで各自テントを決め、夜は、各テントで大負民をやって寝た。ドーム型テントに寝たかったなへ。

第2日目。朝のすがすがしい気分と、冷んやりとした空気が、僕の心を洗ってくれた。なんちゃって?! 朝食で僕がビックリしたのは、のりたまをつけたパンがこのクラブの伝統となっていることである。信じられない?。かくして2日目の日程が始まった。キャンプ場が峠にあったのでこれから下りが始まるのかと思っていたが、実は、地道の登りであった。僕の自転車は、ギヤ比が高かったためか、地道は、全く乗れなかった。また地道を登っている、途中から雨が降り出し、最悪の状態となった。まぁなんとか、皆に遅れること15分位で頂上の車坂峠についた。雨が降ってきて、気温が下がり、足がつりそうになってしまった。しかし頂上からは、待望の下り(アップダウン)となった。しかしこの下りは、すごかった。なにしろすごいヘアピンカーブで道幅も狭く、おまけに道の所々に穴が

あいているのだ。あ、前方にすごいカーブ、バンカーみたいに穴があいているぞ。しかしそう思った瞬間に、何が何だかわからなくなった。実はそうなんです。バンカーにタイヤをとられて転倒してしまったのです。体はけが、をするし、自転車のバーテープは切れるし大変でした。しかしまぁ何とか、無事、峠を下り、けがもたいしたことでもなかったから助かった。さてこれからいよいよこれからの本当の登りが始まるのである。町で今日の夕食の釜飯しの材料を買い出発である。しばらくゆっくりしたペースで走っていると、前方に坂が見えてきた。またここでは1日目の様に各自がそれぞれのペースで走っていた。ここの坂は、だらだらとした長い坂で、インナーローでは、なかなか進まないし、本当にまいった。そうこうしているうちに霧が出てきはじめ、気温が下がり、足がつってしまった。しょうがない押すことにしようと思った。霧のせいで前にも後にも他の部員を見ることができなかった。1人で孤独になりながらひたすら自転車を押した。あ、前に、三ッ井さんだ。追い来ろうと思ったが足が動いてくれなかった。あ、後ろから自転車のライトだ。誰か2人来っているようだ。だんだん近づいて来た。副島と葉山さんだ。ぬかされてしまった。ついに最後になってしまった。それにしても苦しい。あ、車が来る。車で行きたい。もう放心状態になってしまった。1km、2km、どうに

が進んでいるようだ。あ峠の標識だ。やっと登りが終わった。あとは、女神湖までの下りであった。ああそこの信号の所に宮崎さんと、兵藤だ。何、また信号からキャンプ場まで登りだって。また押すしかないとそう思った。もう足が棒になってしまった。やっと今日の日程が終わった。キャンプ場に着くと、僕はテントの中にころがりこんでしまった。食事の用意をせずに本当に皆に迷惑をかけてしまって、どうもすいませんでした。食事をしたのは、もう空がまっ黒になっている時でした。でもあの日の星空は、一生心に残る程、美しかったなぁ～。明日もまたビーナスラインの登りがあると思うと、とたんに心が重くなってしまった。

オ3日目。今日は、いよいよ合宿の最終日。2日目と同様、朝食を取り、出発となった。さて、ここで上級生が何やら話し合っているようだ。どうやら、ビーナスラインを回るか、直接下るかもめているらしい。僕としては、絶対に直接下りたかった。しかし結論は出ず、取り合へず、白樺湖まで下ることになった。ここの下りは、なかなかダウンヒルが楽しめた。皆快よく、下っている時に、三浦が転倒したようだ。手の中に石が入ったらしく医者に見せる必要があったので、直接下ることになった。ほー。僕は内心よかったと思った。そして、またダウンヒルになった。しかし今度は、だめ。バスが行手

を加えいで、思うようにスピードが出せなかった。おかげで誰も事故らなかったが…。峠を下った所で町があったので、三浦のけがを見せる間大休止となった。しばらくして三浦が戻ってきて、寺野駅までいっぺに下った。ここで、軽い打ち上げを行ない、この予備合宿は終わりとなった。

無事家にたどり着き、その日は、まる1日、寝てしまった。

おわり

夏合宿　　下　正純

退屈しながらも、無事にフェリーは、苫小牧に着いた。雨。不安を感じながら出発すると、五分もしないうちに、ワ〜、時計がない!! あわてて朝食をとった食堂へもどった。あった、あった、えがった〜。と言うわけで、その夜は新冠のキャンプ場。何か知らんが、その夜は、所の祭があると言う事で、一晩中うるさかった。その上、食事をしようとしたら、『夕べの集団』予想通り『朝の集団』を行って、次の朝、わけのわからんキャンプ場をあとにした。ひたすら、襟裳岬へGO! この辺りの地形はどないなっとるんじゃ。坂、坂、坂。例のごとく、嶋田が大ハリキリ。しかし、景色は良かった。その夜は、百人

浜キャンプ場。誰かが忘れていったスイカをもらって、みんなご満悦。翌日幸福駅。三浦さんの名刺を桂に怒ってきた。熊本大学の人達は、旗をはっていた。差をつけやがって。札内川の川原でテントをハッた。翌朝、愛国駅で駅寝をした熊大にあいさつをして、襟平湖へ。その夜は、フェリー以来初めての風呂。その後、最終日の旅館まではいれないと誰が予想できただろう。次の日は、運命の日。三国峠のダートを無事に?!!に越えた。大雪湖附近。ええ景色じゃの〜。ゆるやかな坂を登りきって、カーブを曲って、ゆるやかな下り。自動車が一台止っている。背後に小林さんが走っているのを感じながら、自動車をよけた　が、小林さん

は、どうしたわけか、よける気配がない。「危ない!!」の声もおそく、[illegible]みごとにぶつかった。車から、初老の夫婦がトウモロコシをかじりながら、出て来た。小林さん、しばし放心状態。

[illegible] ⇒ [illegible] みごとにまっすぐにぶつかったので、フレームの方もきれいにまがった。前輪がフレームにこするのを気にしながら、何とか層雲峡キャンプ場へたどり着く。翌日、午前中は自転車を忘れ、黒岳登山、午後は、小林さんのみ、レンタサイクルで、層雲峡めぐり。翌々日、恐怖の修理。旭川の店で、力まかせに引きのばした。大成功!!「今度やったらおわりだよ。」の言葉を背に、再び出発。その夜は、道路だか何だかわからんキャンプ場に泊

まる。近所のガキどもが きもだめし
をやっていて、時々我々のテントのす
ぐ横でバクチクを鳴らして、ウルサー
ー と思いつつ、安らかな??眠りにつ
けなかったのよ!! ねむたーい。ここ
で、紙面の関係により(実は、作者
の気力の関係により)数日間ワープ。
と言うわけで、運命の宗谷岬。斉藤さん
酒井班に遭遇。ワー!!ワ。ワワかでた!!
じゃなかった…副島じゃった。稚内のキ
ャンプ場は寒かった。初めてテントの
中で夕食をとった。ウむー!! 翌日か
ら島めぐり。海水浴もやったべー。以
降、サロベツ原野のダートをホコリを
あびながら ひたすら、札幌めざし南
下、南下。全日テント、食って、寝て
走る生活に終止符を打った札幌に無事到着。

夏合宿　ザ・グリーンズ

1年　野中隆昭

まずは，我班のメンバー紹介

班長　三浦さん（3年）
会計　葉山さん（2年）
　　宇佐見さん（〃）
記録　野中　（1年）

以上のような錚々たるメンバーである。

○7月25日～27日

三浦さんを除く3人は，部室から上野へお発，我々が乗る十和田1号の発車5分前に到着。席を確保するべく並ぶ。発車13分前に列車が入線，が三浦さんがまだ来ない。3人は，ホームを行ったり来たり。発車2分前，まだ現われず。3人はあきらめ，列車に乗り込む。もしかするとという期待を込め列車を探すと，タラップに見覚えのある鞄行袋が置いてある。そして，あの独特の笑顔をした三浦さんがいた。いったい，この合宿は無事に終るのだろうか，心配になった。

話は変るが、この十和田は、急行であるが、特急車輌を使用してあり、スキーのための大型手荷物を置くスペースがあり、仲々良かった。
十和田ー青函連絡線ー二セコーそして今はなき「からまつ」と乗り継ぎ、合宿の出発点「新得」に午前4:30に着いたのである。
それは寒い朝であった。北海道の地に足を下した4人は夏とは思えないその寒さにうちふるえたのであった。
駅前ロータリーでカップヌードルを作り、最初の目的地『紋鄂トムラウシ』目指して出発したのである。

問7：いままでの文で、漢字のまちがいはいくつでしょう。

しかし、このペースで書いていると何枚書いても足りない。ということで、これからは、たびたびリープを行なうことを御了承下さい。

○7月28日
トムラウシ ―― 帯広（中央公園）

7月29日

帯広 ― 十勝川温泉 ― 池田町

十勝川温泉は！日本でたった1つだけの植物性温泉で，湯の色が紅茶色であり，仲々良かった。

池田は，ワインで有名な町で，町営ワイン工場が見学でき，町営レストラン，まきばの家で，ステーキ，ワインが賞味できる。ステーキは，まきばの家の方が安い（800円）

7月30日

池田 ― 豊頃 ― 愛牛

↳ 茂岩 ― 帯広！

上の図を見てみるように，この日は全くすごい日だった。予定では，愛牛から川を渡り，ずっと，そしてドッカノ沼あたりでテントパルはずだった。そして，平穏無事に一日が終るはずだった。しかし，川は渡れず豊頃まで逆戻り。これは，序ごく，まに悪夢のような事件が起きた。コースを変更した我々は，茂岩で，中食のつけめんを作っていた。突然，ピーク！が終った。初

日にも調子が悪くなったのだが、その時は、三浦さんが直したが、この日は遂に復活せず、泣く泣く、ピークBを買うため再び帯広へ。そして、宇佐見さん推せんの「何でもそろう、イトーヨーカ堂」で買う。災難は、まとまってやってきた。翌日の宿泊場所、帯広中央公園で、テニパリ、食事のあとかたづけをしていた時のこと、我々は交番の死角となる身障者専用のトイレを使っていた。すると、そこへ市職員風のんが来て、彼はすげなく我々を追い出したのである。我々はしかたなく、ナイトランをして、大通り公園へ。

ワープ

SFファンの方は御存じと思うが、ワープをした場合、外の景色を見ることができない。しかし、そこは、待い様のこと、途中のことをかいつまんで紹介しませう。

7月31日. 帯広ー愛国駅ー幸福駅
ー更別ー忠類ー野塚駅(無人)

8月1日 野塚—黄金道路—百人浜ーえりも
ー様似(海岸でキャンプ)

2日 様似ー新冠キャンプ場(無料)

3日 新冠ーウトナイ湖Y.H.

4日 Y.H.ー苫小牧ー白老ポロト
コタンー湖畔キャンプ場

5日 キャンプ場ー登別ークマ牧
場ー登別中学校跡地.

野塚では、三浦さんのスポークが2本折れていることが発覚。ここで三浦さんの得意技が出た。何と、駅の自転車置場の廃車みたいなスポーツ車からスポークをもらい、自分の車につけたのである。この技は、以後、度々出た。
クマ牧場のクマは、仲々芸があっておもしろい。下手なストリップより絶対おもしろい。ネェ～、立山君!
前後するが、私は黄金道路でパンクをしてしまった。しかし、パンクはこの合宿中、この1回だけで、後は、

誰もやらなかった。

8月6日　中学校跡ーかちどきの滝ー
オロフレ峠ー洞爺湖（湖畔でキャンプ）

7日　洞爺湖ーニセコー倶知安ー
ー六郷駅（無人・駅寝）

さて，当合宿で初めて地図に出ている峠を登る。上りは未舗装が多いが，下りは，ほとんどが舗装されており，軽快に下る。

また，洞爺湖では，ヘルスセンターみたいな所で温泉にはいる。しかし，我班はよく温泉にはいるナァ〜。

7日は，ニセコで再び三浦さんのスポーク(が)折れている事が判明。しかも今度はフリー側である。倶知安の自転車屋に行くが，フリー抜きが無くアウト。終ったかと思っていると，そこはさすが三浦さん。何と，民家の横に捨ててあるらしい車から再び失敬して来た。他の3人はただあきれるばかり。横のスポークに引っかける事で，どうにかフリー抜きを使わずに済み，出発

しかし。その後、三浦さんが自転車屋に寄った記憶はない。おのまま、走り続けたのだろうか？

8月8日　六郷ー余市ーニッカウイスキー工場ー余市海水浴場（キャンプ）

札幌も目の前ということで、前にもましての秋風きょりの少なさ、観光に徹する。ニッカでは、ウイスキー、アップルワイン、シロップが飲み放題である。是非行くべし。

9日　余市駅---バス---神威岬---余市駅ー小樽ー祝津（海水浴場、キャンプ）

さて、神威岬へ行くことは決まっていたが何で行こうかということで、協議の後結果、当然のことながら一同一致？でバスで行く。海が大変きれいで良かった。

10日　海水浴ー札幌ーサッポロビール園ー円山公園

札幌まであと40Km程ということで午

前中は雨水浴。3時頃には札幌到着。円山公園に自転車を置き，コインランドリーと銭湯へ行く。さっぱりしたところで，ビール園へ出かける。えらい混み様で長時間待たされる。税込みで¥2750払いビール飲み放題ジンギスカン食べ放題のコースへ。2時間一本勝負のはじまり。各者一斉にスタートするが，早くも宇佐見さんが落っこち，三着デッドヒートの中から，野中・葉山の2人が半馬身リード。ビールジョッキ5杯目位で野中号急にペースが落ち肉を見るのもいやになってくる。それでも葉山号はもくもくと食べそして飲んでいる。野中号最後の力を振り絞り追い込むが6杯目で力尽きる。結局，一馬身差で，一位葉山さん，二位後三位三浦さん，四位宇佐見さん。四人は，各人それなりに満足し，地下鉄に乗り込み円山公園に向かうのであった。

THE END!

以上が、我班の行動である。

○備考

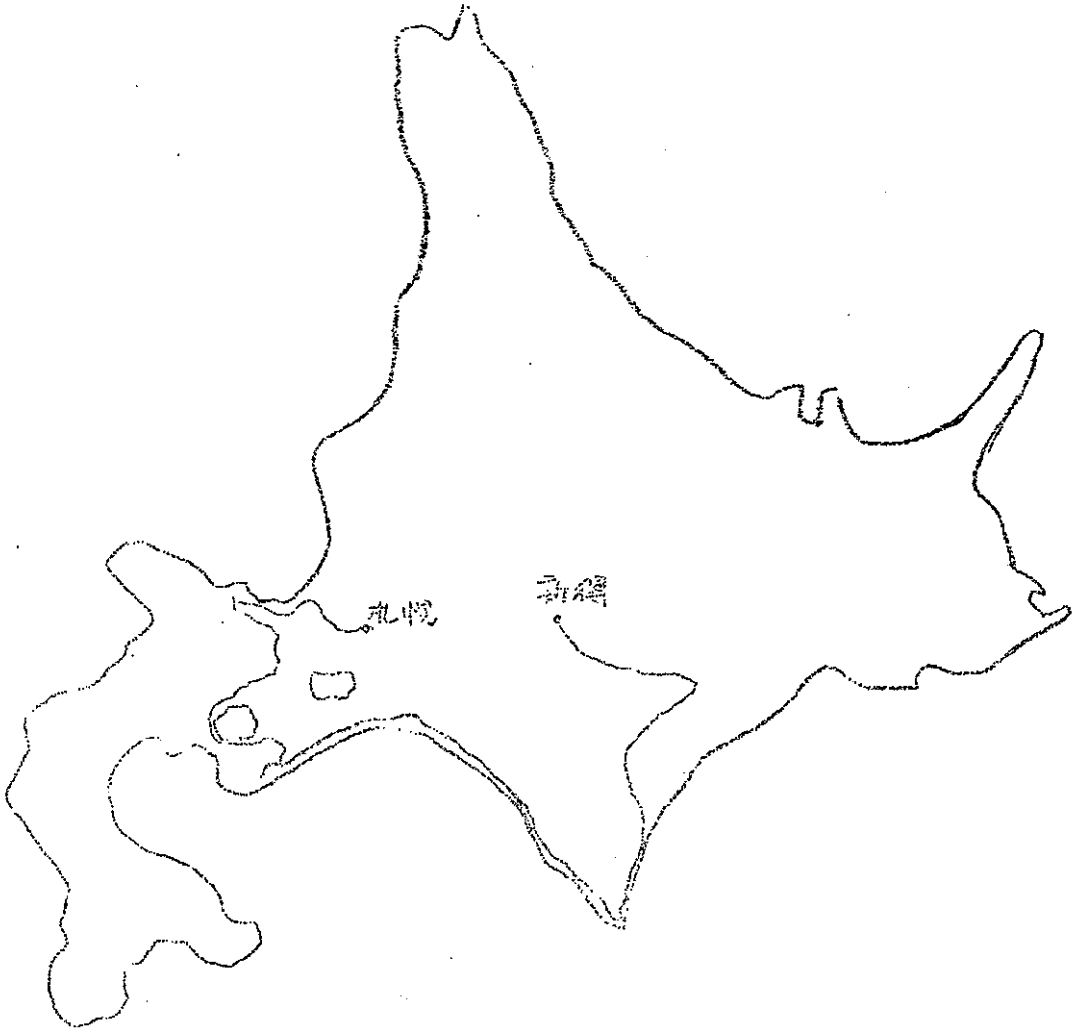
全走行キョリ	860 km
キャンプ	11回 (全テント)
Y.H.	1泊 (¥2500)
野宿	2回
ゴロ寝	1回 (円山公園)
トラブル	パンク 1回 (野中) スポーク折れ (三浦)

さて、初めての夏合宿であったが、はじめのうちは、公園などでキャンプしたり野宿したりするのが非常にはずかしかった。しかし、終りの方では、昼に歩道で堂々とラーメンを作って食べているのだからおそろしい。

僕が北海道に来たのは、はじめてであった。とにかく、走れど走れど真直ぐな道には驚いた。しかし、そういう道を、さんさんと輝く太陽の下、快い風をうけながら走るのは、何とも言えぬ快感であった。

今回は4人班であったが、この位の人数が、1人当りの共通装備の量も適当で、また、合宿の時もあらそいが起きずに良いのではないかろうか。

とにかく、天候に恵まれ(雨は暴雨が半日)すばらしい合宿であった。



夏合宿

三ッ井 飲一

1. 東京から船に乗って釧路についた
とにかくひもじい思いをしましたわ。こんな事なら、大田山のサンチェーンで、もちっと買い物しとけばよかった。三度の食事が菓子パンだもんね。それに加えて予想通りのやせがまんごっこです。一年だけrichに暮しやがってくという皮肉)。でも、5の円牛乳さんお世話になりました。あのテトラパックが救いであったよ。というわけで、揺られ揺られて釧路についたわけだ。

2. 霧多布
キリタップでは崖が切り立っぷ。

3. 根室
根室と言えば納沙布、納沙布岬からは北方領土の水晶島などが見えます。異国の地を見たことさえなかった私は、心なしか興奮していました。北方領土は、地図で見てもかなり広大な土地で

あります。望遠鏡で水晶島を見ても、島の対岸は見えませんでした。でも、いじめっ子のソレンちゃんが返してくれません。ソレンちゃんはブレジンというブルドッグをつれていて、こわくて近づけないのです。（こんなこと書いていいの）でも、真面目な話、返ってきてほしいものです。帰ってこいよ

4. 知床

知床では半島の両対岸を一往復づつ走るという、実に効率の悪い走りをしたのです。そう言えば、道ばたの商店で魚の干物をもらったりしたなあ。（副島は知らない）。標津ではサケかマスかの焼いたのをもらったし、旅をしていて、地元の人に親切にされるのはうれしいものです。

また、峠で女性サイクリストに会いました。たとえブスでも、自転車に乗っている姿を遠くから見ると、綺麗に見えるのは本当に不思議なものです。たとえば、スキー場なんかで、どうでもいいブスが、はでなスキーウェアを身に付けるだけで何となく美人に見え

てしまうのは、紫外線で目をやられるからではないはずです。

宇登呂は観光地です。ここで、観光船と言うより釣船に乗りました。知床半島というのはすごい山なのです。有名なカムイワッカの滝は見れず、ただ、さむいばっかでした。

羅臼で一日つぶさなければ知床でもうサシゆっくりできたろうにねえ斉藤さん。できれば、知床の岬に咲くハマナスの花が見たかったようなきがする。

5. 屈斜路湖

美幌峠からの屈斜路湖が一番美しいと言われど、それはVERY rightでありまして、ぼくの北海道に対するImpressionの中でも1,2番のmarvelous SCENERYでした。

6. 網走

「親の血を引く兄弟よりも……」ここには、婦女暴行(未遂にしといてやるぜ)の立山が服役中の網走刑務所があった。立山は明日脱走するらしく、紋別で落ち合うことになった。(ウソ

やで〜）

7. 紋別

ここで、一日休憩日をとった。みんな合宿を忘れかけたようだ。合宿半分にして900KM近くきって、何となくMOUIIYOの声も。ここでは、絵はがきなんぞを書くことにした。♪遠い人生の空から君に送るたよりは　カヨかせのなぐり書き・・・

8. 稚内

「う〜ん、ここはどこだったかなあ。う〜ん、思い出せないなあ。もうわかっないや」（本当にもう大変なんす）

「さすがに北の果てだ。なかなかお場がわっかないや。」

酒井さん、そんなくだらないこと言ってないで、真面目にいきましょう。真面目に。

9. 利尻島

とにかく、疲れたの一言につきますな。怖い怖い登山道を通って、よくも1800Mも登りましたわ。はっきり言

って、ビビリましたもの。でも、軽装の女の子が同じ道を登ってくるんだもんね。それにしても頂上は絶景ですな。あの景色は絶対に忘れないとともに、もう二度と行くものか。

10. 礼文島

あのピンク色の靴をはいた女の人はどこへ行ったのでしょう。

11. 無題

やはり、合宿というのは、人間どうしわかり合う上で、絶好の場所であるように思う。夜はトランプをして過すのも良いが、酒飲んで歌を歌うのもすごく良い。ユースも良いが、キャンプをするのがすごく良い。走っている時と休んでいる時は、どちらも同じくらいすごく良い。

僕は、利尻のキャンプで5人で歌を歌ったのが、何となくうれしかった。斉藤さんが'22才の別れ'なんかを歌って、涙がでそうだなんて言ったりした。冗談かなんかで言ったのだろうけれども、僕は、そういう雰囲気が好

きである。

余白をくだらんことを書いてつぶそう

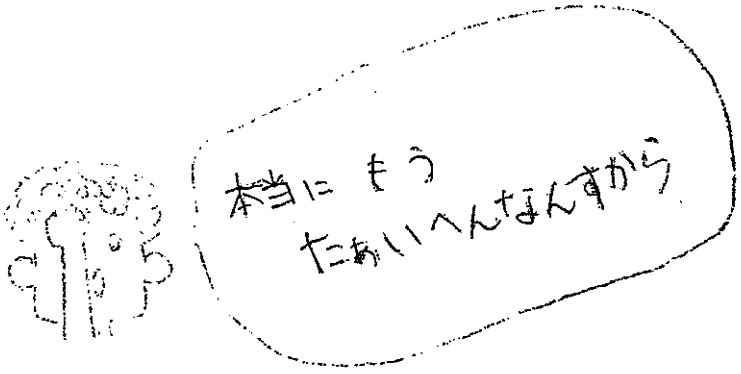
斉藤さん --- 歩くおつかれさん

三浦I --- 歩く美少年

副島 --- 歩く熊、

立山 --- 歩く怪獣（又は超人と言ってもよい）
羊を食いちらす男
（まあ平たく言えばジンギスカンのことだが

酒井さん --- 歩きはじめた人間



夏合宿 B班

期日：7/26 ～ 8/11

メンバー：名取班長，村瀬コック長，嶋サン，
西田サン（会計），それに私兵藤（記録）

☆ 7/24 ～ 7/25

先にツーリング中の名取さんの他4名が24日の夜行で幌延まで列車の旅。19:08に上野を出て次の日の21:47までほとんど電車に揺られ全く苦しい通のりであった。北海道へはやはりフェリーがいいようだ。幌延では待合室に泊めさせてくれず駅の軒下で駅寝（と言えるんだろうか）。

☆ 7月26日 幌延 → 稚内

豊富からサロベツ原野を通って抜海に至る道はダート＋迷路でわかりに

くかったが嶋さんの先導で無事通り抜けることができた。しかし抜海から稚内に向う間、海からの向い風のため、私は先頭集団(村瀬、嶋、西田さん)の快走にとり残され、目付役の名取さんの影を後ろに見ながら油汗を流してペダルをこぐという屈辱的走行を強いられた(以後90%、このスタイルが続いた)。稚内のキャンプ場は夜景がよく、水も妙に冷たくなくて伸々よい所であった。夕食後、この夜のテントの割り当てのジャンケンをする。この班は三角テント(4人)+ドームテント(1人+荷物)ということで1人寝の安息を得んが為毎夜火花を散らすジャンケン大会が開かれた。ちなみにこのドームテントを『マ○○キテント』と呼ぶような雰囲気をこの班は持ち合わせてはいなかった。(当然デスヨ)

☆7月27日　まさかの利尻登頂

フェリーで島に渡ってテントを張った後、利尻に登り始め

た訳であるが「いつ下り始めようかと思ってたんだ〜」という名取さんの言葉通り、何となく登頂してしまった。雲や海を眼下にしながら「ここ登ンのはうちだけだろ」と、その時は思っていた。

☆7月28日　礼文島

カラスがテントの上にとまって鳴き出したため目が覚めて外へ出るとおっぽり出してあった米食がカラスに喰われていた。このカラスは手が悪い。礼文島をあちこち走り回った後久種湖畔でキャンプ。ハンバーグを作ったが、この夜から班のモットーに「richな食事」という項が設けられた。湖畔の月が妖しく光っていた(特に変はナシ)。

☆7月29日　宗谷岬へ

稚内に着いて、昼食後宗谷岬へひた走る。着いた宗谷岬はやはり北の果てという感じで、「お流れ流けてんよ」という歌もそのムードを盛り上げていた。巨人がまた逆転負けをくらった。負けて元々の西武ファンは気楽であると思った。

☆7月30日　宗谷岬 → 浜頓別

左側にオホーツクの灰色の海を眺めつつ走行。班に利尻礼文宗谷岬を通過した虚無感が涼よい始めたが飲酒運転で気分を盛り上げることになる。

☆7月31日　紋別へ

前日からこの日はかなり走るということはわかっていたが、いざ走り始めるとやはり私は先頭集団にとり残され、西田さんが女であることを忘れて「まだ走るんですか～」という弱気"力無し宣言"を幾度となく発してしまった。それでも紋別まで走り、外食。紋別空港のキャンプ場へナイトランとなったのだが、これが紋別から20kmも離れているとは知らず、暗い夜道心細く走った記憶がある。

☆8月1日　網走へ

前日の疲れもなく網走まで走る。浜佐呂間の手前でA班と出会う。Tシャツからはみ出しそうなS氏の腹が目についた。

☆8月2日　美幌峠　そして事故

この日は大晴天で美幌峠からの眺めも最すぎるくらいであった。このまま屈斜路湖まで無事下れれば、この日は万に歳だったのだが……。それはダウンヒルも終ったゆるやかな直線路の下りでの出来事であった。前を走る名取さんの後輪に一瞬私の前輪が接触し、バランスを崩したと思った次の瞬間、ナント！私は道路脇40mはあると思われる茂みに突撃、転落していったのであった。3～4m走って横転した私はしばし放心状態、ケガのないのを知って、「大丈夫ですよ」とひきつった笑いを浮かべるのがせい一杯であった。道なき場所に道路を作ってしまった。

☆8月3日　摩周湖　そして　川湯

摩周湖の幽幻な眺めの後、川湯へ。川湯のキャンプ場は全くの観光地で大混雑の大騒音であった。国立、甲子園出場ということでこの夜のビールは嶋さんのおごり。

☆8月4日　浜小清水へ

徐々にしのびよる沈滞ムードの中、この日は下りのみの54Km走っただけでキャンプ。午後は浜小清水の原生花園の海岸の片隅で、童心に還って砂遊び。乞食スタイルに投げかけられる観光客の白い目も気にせず結構楽しいひと時であった。

☆8月5日　斜里そして宇登呂への雨中ラン

斜里をすぎてパラつき始めた雨が、程なく本降りになって、宇登呂への道はトラックも多いことから最悪の道程であった。宇登呂に着いたときにはグチョグチョのビチョヌレで知床岬にかけこんでホッと一息、久々のNOキャンプ。

☆8月6日　雨、止まず

この日は一日中雨が降っていたため、ユースの体育館などでうじうじていた。しかし同宿した女子大生に対するNさんの豹変ぶり、Mさんの負いぶりなど伸々興味深かった。

☆8月7日　知床旅情

この日は宇登呂より奥深く、知床半島を進んでいった。出発するとすぐ目の前はダート。上ったり下ったりしてゆくうちにあたり一面霧の海、前を走る人の姿もかすむ。なおもキリキリまいにエサをうばわれながら知床で橋に着き、そのこが絶えたのが朝8時。と、ツーレポ風になってしまったので、この日は終り。しかしこのルートは結構印象深いルートでありました。

☆8月8日　尾瀬沼へ

この頃ともかく風景も単調になってきて、記憶もサダカでなくなってきているため、関係ない事なども入ってきますが、この日は国立の試合ということで、朝から気にしていた嶋さんは得意のダジャレ（ダジャレについてはこの班は嶋さんと名取さんの間でモッパラ取りかわされていたが、大体において（特に質）嶋さんの方がまうわまっていたようでしたがあえてラジオに譲るが、順当に負け。そのあおりをくったためか、

鳴さんのサイドバッグが大破した。

8月9日　霧多布へ

特というか、この日も自転車にのって走った訳で、霧多布までいったのです。霧多布は本当に判だらけで、翌朝までキャンプ場の回りが海だなんて知りませんでしたが、最後のキャンプということでビーフシチューに十勝ワインに花火大会に少々退屈なおしゃべりなど、盛りだくさんのうちにその幕を閉じた。

本当は次の日も走ったのですが実質的にこの合宿の走りはこの霧の中で終ったとしておきます。打合げも楽しく色々な話が聞かれました。このあと昨年の[illegible]の様に寄稿など書こうと思いましたが、11 PMを見る時間が近づいてきたのでいさぎよくこの辺でおわりたいと思います。

どうも御愛顧さま

おあとがよろしいようで……

『夏合宿』

波頭、川村に亀山さん そして ○ という4人の班で、先行き不安の合宿が始まった。

まず出だしで、○ がつまづいて、予定日を一日、おそくして、上野駅発の「八甲田」?に乗った。

朝4時半 遠軽駅、天気雨、何ともしけた出発になった。

天気はすぐに復活して、たしか初日は120Kmぐらい走ったと思う。コースは遠軽から北上して、海ぞいに、サロマ湖岸を通り、網走、美幌まで。網走では、1時間以上喫茶店にいたと思う。刑務所が印象的。

この時、4人の意見が一致して、美幌ユースに泊まることにした。会員証を忘れた人間が1人いたようだが、

2日目。この日は美幌峠を越えて、屈斜路湖ぞいに砂湯キャンプ場まで。何といっても美幌峠からのながめは最高だった。初キャンプ、メニューは当然カレーライス。ご飯のケーキを作ったのはこの日だったか。もったいない。そして夜のメインエベントはジャングル風呂。ご対面したのは亀山さんだけだったが。

五百円は高い!

3日目は砂場にとどまり個人行動をした。
亀山さんと○は摩周湖から第3展望台
双湖台まで行き砂場へ。本当は阿寒まで行
きたかったのだが途中、下痢をした者約1名が
たようで、藤頭、川村は午前と午後にわかれて摩周
湖まで行った。

この日の夕飯はハンバーグ。キャンプでは
絶対にやってはならない料理であった。

ハンバーグ→肉だんご→肉いため→すき　と
いう組合せだった。この日の夕飯に何を食べ
たか覚えていない。失敗のショックから立ち直れな
いでいる時にどこかの班と食った記憶がある。
その中に「すき」を非常におしがっていた人がい
たようだが。

4日目。斉藤さんたちの班が「ユースに泊まらずに
もう600kmも走った」と聞き、初日ユースに泊まっ
たことを隠して早朝まだ斉藤さんたちが寝てい
る間に出発した。これからあとは、だいたい同じコ
ースを創路ガイドすることになった。

この日は砂場から宇登呂まで。ところが
宇登呂に早く着いてしまった。これが悪かった。

それでは と 知床大橋まで行こうと言うことになったのだ。早く着いたと言っても3時はすぎていた。宇登呂を出るとすぐにダートになり上り坂が待っていた。ひとり越えたところで川村が何か宇登呂の方に忘れてきたことに気付き、しかたなく引き返すことにしたのだが、これが正解だったようだ。あのまま行っていれば、熊にたべられていたかもう。ということで4人とも放心状態で宇登呂にもどった。キャンプ場でキャンプ 何を作ったか覚えていない。

次の日、この日も個人行動。しかし4人とも知床大橋まで行った。源頭はバス 川村は船で、そして 亀山さんと○は チャリンコで。目ざすは ナムイワッカの滝。目標があればペダルは軽いものだ。上流に女湯 下流に男湯 上をのぞきのぞきの入浴は疲れるものだ。

源頭などは ずけとよむのぼって見たというからすごい。ただ カラを持っていなかったのが残念だ。

宇登呂キャンプ場 2泊目。

6日目宇登呂 → 斜里 → 標津

知床林道がまだ完成していなかったのでこのようなコースに移った。標津まで順調だった。

そろそろ風呂に入り、洗たくをしたいと言うことで民宿「船長の家」に泊った。天候は良く、まだ時間も早かったし、民宿のショボサも加わって、あとで大きく後悔した。

次の日は根室まで行ったが寒さだけが印象的だ。これでも夏かと言いたくなる寒さだった。根室で麻雀をさがし回ったが一軒もなかった。根室人は麻雀をやらんのか！

このころから朝食は茶店で　ひまがあれば茶店へと足が向いた。新聞雑誌を読みあさり、世間の様子を知った。しかし民宿に泊ったあとからは急に節約キャンプになった。

根室は公園　浜中では駅前の草むら　そして釧路では駅裏とやっと合宿の気分が盛り上がってきた。

釧路駅にはおもしろいことがあった。夜、ニュラフに入って寝ているところへおっさんが来ていっしょに寝たというからおかしいやら腹がたつやらで。

風呂屋さんの話によると、「寝ていたら背中がもぞもぞするので目をさましてみるとおっさんが居ていた」と言う。

その前、そのおっさんを目撃したが女子高校生をこうしてひきつれていたと言う。

釧路から広尾へワープ。
広尾では寺の境内でテントをはった。メニューはこのキャンプで最高のビーフシチューだった。みんな口の中をやけどした。
夜は川村をテントにのこし夜のお買い物に出かけた。テントでは家出少年事件が起った。しかし川村の見事な処置により解決した。
あとはただ走るのみ。襟裳を回わってからの追い風に乗り、快ペースで進んだ。
静内→苫小牧→支笏湖岸モーラップへ。
モラップ1泊目は何もなく終わった。
次の日は個人行動日。例によって亀山さんと○は2人で160kmを走破した。
さて問題の夜。となりのテントのおじさんが「酒のみにこい」と言ったので よろこんで出かけた。
酒のおじさん家族づれで双子の姉妹がいた。チャンスだ しかし双子とは思えなかった。酒は飲み放題 肴は上げ放題。しかし終わった……

大ワープ

札幌につくと洗たく入浴をすませて、CITY BOYに生まれ変わり、民宿「波頭の家」

へ向った。札幌駅では懐かしい駅員集団を横目に赤い車をとばした。

ジンギスカンに生ビール　最高のもてなし、久々に味わう家庭の味　夜頭また合宿いっしょに行こうぜ！

というわけで　夏合宿は終わった。

「合宿の結果」

ユース　1回　民宿　1回　ホテル　1回
野宿2回　のこり　キャンプ

風呂　洗たく　5回

茶すり……数かぞえきれぬほど

○○……約7万

1980 ESCAラリー報告

川村 法晴

夏休みも終りに近づいた8月25日の早朝、[illegible]、波頭くん、川村の3人は、上野駅に集合し、[illegible]急行ばんだい1号に乗車。けんとうが[illegible]予定だったが、病気のため欠席。これから[illegible]3人でESCAラリーに参加することになった。

電車で猪苗代まで行くのは、けっこうこの電車が[illegible]ため、電車には、100人以上のサイクリストが乗っており、[illegible]輪行袋が置いてあった。私たち3人は最前車両に乗り、ほかの他の人たちとは話もしないで、自分たちだけで雑談をしていた。このころから、3人という少人数に[illegible]を感じ、さらに[illegible]のキャンプファイヤーへ[illegible]出し物のことを考え、なにも思い浮かばないので落ちこんでいた。約4時間で猪苗代駅に着き、電車を降り、駅前に出ると、そこはサイクリスト天国だった。みんながいっせいに自転車を組み立て始めた。町の人たちは「いったいなにをしているんだろう。」という感じでながめていた。私たちも、自転車を組み立てていると、専修大の人が8ミリとマイクを持ってインタビューに来た。波頭くんと今泉さんが答えていたので、今年の新歓レセプションに出演するだろう。

集合場所の郡小学校へ行くと、人がぜんぜんいない、心配になって3人でうろうろしていると、サイクリストがぞろぞろとやってきたので、ひと安心。集合時間になると約200人のサイクリストが集まった。よその大学は

だいたい5～10人で、多いところは15人くらいで家族単位。開会式が行なわれ、その日の行程のグループ、翌日のグループ分けがあった。学年別のグループでコースを走ることに決まった。第1グループは、女性1名を含めた9名で、すべて駒澤大学の人たちだった。他の人の自転車を見ると、ロードレーサー始(なぜかいれて笑)、フル装備のキャンピングカー、3段、5段、15段という信じがたい装備だった。走りだしてみると各自のペースはばらばら。最初のロードの人が先頭を走っていたがペースが速いので、女性が先頭にして走り始めた。このペースがえらく楽。あすなんりなのに10kmを軽くこなしていた。そしてスタート後1時間休みをとり、軽食とした。これは思いでもあるし、また、この時間を走ると筋肉の疲れパラリンピックが出ていた。この日の夕食はいまいちだった。何かしら足りない。

9歳になる人という大人数のため自炊で炊事をすることになっていた。食材ではピーマンとかふくれていた。ガスの文明の利器を使って炊事をしたが、ニンジンは、なかなか生ではなかなか使っていた。よその人は、あの食いっぷりから、頑張って合宿へ行ってほしい。申し訳ないことに、大人が一度に鍋を食べるとなると生存競争になってしまったが、あの年齢の野性というか生命力のすごさには驚いたが、私たち3人もしっかり食べていた。男子部屋では、上品に「ごはんの歌」をみんなで合唱してから食べ始めていた。

夕食後のミーティングで明日のペアラリーの説明があった。
参加者があれば、私は明治大学のパイロットの人と組むことになり
ミッションスペシャルを走るコースに決めた。今夜は
遅くまで雑談した。以上で前半戦は
バンガローに帰り、仲間と談笑して終了。

○2日目（8月26日）

この日は朝から雨が降っていたが、予定通りの日程が
作られた。雨用の準備をしかりして スタートを待ったが、
一年は出走が遅いので出発は10時ごろになった。
始めは軽いアップダウンが続き、雨は強くなったが、レークサイド
のゲートについてからは、ちょっとした上りが続いた。しかし、手色は
非常によく、右手には雨が少し降っていた。
別に、疲れもなく走られたとは思ったのでこの雨のなかを
走っていたが、このころには雨がかなりふってきて、雨用のパンツを穿
いたのでかなり汗をかいた。雨が降ったり止んだり
走るとすぐに上り、すぐ下りが始まった。この下りは10%の
勾配なので下るのは気持ちがいいが、カーブは途中で
曲がり返して、雨が側溝に溜まっているところが多いので、後ろの
板を踏んでつかまればならないと思うとあまりよくなかった。
しかし、この時分かりドリ、そして、長い上り、下り、
最後にはドライブハウスについた。ここで休憩をとっていると
雨がひどくなったため、余分にかなりあれついて、寒かったので
長居をしてしまった。他のESCAラリー参加者達も、同様なので
かなりの人がここで暇をつぶしていた。

再び走り始めるとさっき下った…勾配10%の坂が待っていた。私がマイペースでのぼっていると M.ん.L.Kの人がパープリ始めたので彼にあわせてゆっくりと走った。上りが終り下りになると体が雨と汗でぬれているため、かなり寒むかったが雨やどりするところがないのでしかたがなかった。ゲートをくぐり少走ると大きな通りに出て ここで「外はなんかどうでもいいから サボらないか」ということで…喫茶店に入ったが同じことを考える人はかなりいて、ここも ESCAラリーの人たちばかりだった。30分ぐらいしてから再び冷たい雨具をつけて第2ポイントに向かって走り始めたが、1時ということで…腹がへってきたが弁当を食べれるような場所がなかった。第2ポイントでチェックをすまして少し走ると民家の軒中で雨やどりしているサイクリストがいたのでそこへ入ってみたすると中には12、3人のサイクリストがいて弁当を食べたりお茶をわかして飲んでいたりしていたので、そこでお昼にした。結局、ここで30分ぐらい雑談をしていたので、もうJust Time賞を取ることは不可能になった。ここにいてもしかたがないので、今日のキャンプ場に向って走り始めたが、雨は全然弱まらない。全身びしょぬれになってキャンプ場についたら、今泉さんや坂頭くんはすでに着いていて紅茶を飲んでいた。やっぱり軟弱OLコースに行った方がよかったかも…

ここのキャンプ場では、炊事場から離れた…4人用のバンガロウに入った。残りの3人のうち1人は今日いっしょに走った人だったので2人で売店のほうへ行き雑談なんかをして時間をつぶしていた。1時間ぐらいしてバンガローに帰ってみて

戸を開けてみると、まだ4時で明るいというのに、残りの人が[illegible]、以前見たことのある[illegible]を[illegible]して出発した。[illegible]なので仕方なくその時に残りの[illegible]は[illegible]時まで[illegible]どこかに行ってしまった。終わったバンガローに入ったような気がした。そして[illegible]が降って[illegible]の[illegible]はどうなるのかなぁなんて話しながらバンガローの中にいた。夕飯の時間になっても[illegible]まっこうかいつも[illegible]に行ってみると、なんと夕飯の[illegible]があった。すぐにバンガローに帰って食器を持って行ったが、もう、すでにおそし。おかずの残りは「ミソ」と「かす」しか残っていない状態だった。生存競争に負けた私のバンガローの3人(1人はしっかり食べていた)は、のりたまライスという粗末な食事をした。その後は、3人でバンガローの中で「ボケッ」状態になっていた。

この日は、雨が降ってばかりいたら、きれいアイ[illegible]をして打ち上げを行なう予定だったが、雨が降ったので、[illegible]の人が各バンガローに「各バンガロー」でそれぞれ打ち上げをしなさい」と言って、ビールや[illegible]とおつまみを持ってきた。隣のバンガローにも寄らずに[illegible]で[illegible]の[illegible]と3人で[illegible]のバンガロー(5人用)に行くことにした。ここで1杯ぐい3人でちびちびと酒を飲み、いろいろな話をした。12時ごろ[illegible]と3人で隣の、バンガローに帰って再び酒を飲み、それから寝た。それにしても悪夢の1日だった。

○3日目（8月27日）

昨日とはちがって雨は降っていなかった。朝飯を済し、荷物整理をしていると集合の合図がかかった。広場に行ってみると閉会式が始まった。昨日の競技の成績発表があり、ハークライン コースの林さんとJust Time賞を求めていたが（ちなみに私たちのペアはJust Timeを1時間以上オーバー）OLコースの方は順位のつけようがないらしく、抽選で優勝者を決めていた。そして記念品のウッチャンが配られ閉会の言葉をもって、'80 ESCAラリーが終った。解散する前に知り合いになった仲間と記念写真を取り再会を誓って、別れた。

東京の3人は、再び集まり、このまま真っすぐに猪苗代駅に行ってもおもしろくないので、ゴールドラインを通って会津若松から帰ることにした。ゴールドラインのゲートまでやっぱりアップダウンが続いたが、ゲートをすぎるとかなりきつい上りだった。しかし、ESCAラリーのコースが軟弱だったため、サイカチがらしさを感じながら1時間くらい登ると、峠らしきところにでて、目の前に猪苗代湖が現われた。後は、広大な猪苗代湖を見ながらダウンヒルを楽しんだ。そして会津若松駅から電車に乗り帰路についた。

以上で'80 ESCAラリー報告を終ります。

1981 ESCAラリーを成功させよう!!

ああ！富士スバルライン タイムトライアル。
そして
ああ!!親の四暗刻単騎

1年　立山 正之

今日は、なんと1月25日である。しかも時間は23時30分になろうとしている。――― 去年、S.54年度の「TOP and LOW」の小林さんの文の最初の部分と、ここまでは全く同じである。ただ一つ違うことは、部誌の最終メ切は、約1週間ほど前、つまり 昨日 土曜日 であった ということである。諸先輩の方々、ゴメンして下さい…(^^)

などと言いながら去年の小林さんのように字数を水増ししてしまったようだ　といいながら最後にもう一言つけ加えさせてもらいます。

今日は僕のBirthday なのでオメデ

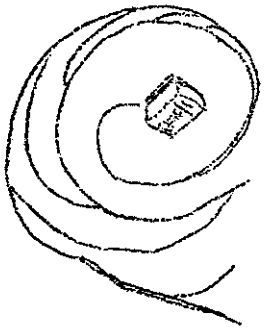
ラッキー!!

しかし、よく考えてみると、あと正味1年でやらなければ、"やらずの20才"になってしまうではないか！今年の夏が勝負のようだ。それまでに4級の○○君に教えてもらわなくっちゃ。でも○○君は答じゃないとだめかな…？　とかなんとかいいながら一言ではなくなってしまった。ではそろそろ「かん」か。さて、何を「かん」のでしょう？ 健康のため 禁煙だに 決まっているだろ――

さて、前置きが長くなりましたが、ここから、まじめなライフリストに戻って、本題に入ろうと思います。

今はもう恒例の富士スバルライン T.T. が10月12日に行われました。実は、その帰り、丁目の副島5人4人で麻雀をやったのです。そして、僕はそこで最後のとき四暗刻単騎をテンパったのです。確か、二萬待ちでした。ちょうどの瞬間ができたとき、声援が「リーチがかかっていたのですが、僕は、ためらいもなく、ドラの三萬を切って勝負したのです。ドラ単騎ではあがれるはずがないからです。さいわい南家には通りましたが、たとえ北家から「ポン」の声がかかったのです。かたや リーチ、かたや ドラ3 ---- 西家副島は、ヘタ おりに走りました。僕はこのドラ三萬のポンで二萬はかなり出やすくなったと密かに期待を抱いたのですが、そんな僕の淡い願いもむなしく、その場は流れてしまいました。その後、二萬の行方を探したら、たとえ、副島の手の中で完全に寝ていた二萬があったのです。その場では、二萬の待ちで考えられるのは単騎か、シャボ しかなかったハズ……。もし私1枚副島が最序パイで引いてきていたら、おそらく二萬は出ていたでしょう。そうしたら、もしそうしたら……
今考えても涙が出てきそうです。ウ〜ン！（おのおのさん）
……このあと、もしかしたら他の人に使用して、うまくいかないかもしれないと、ちょっと心配してきました——……

実は僕は自分が部誌でTNTを担当すると決まった時から、僕の麻雀史上最大のテンパイだった。この四暗刻単騎をのがした男の悲哀と未練を、もっと長々と書こうと思っていたのですが、そんなせめてものなぐさめさえも奪い去るような事件がつい最近起ったのです。そうです、あのヒっくき副島が、親でいんねんの四暗刻単騎をリーチったのです。五萬でした。



その時僕はリーチをかけていたのですが、僕だって五萬をツモれば、中、三暗刻、リーチ、ツモ、で、満ガンだったのに……。クソー副島一人甘いシナ吸いおって からに！ だからそんなにたるんだゾ——。

とまあ感情的になったところで、麻雀は運だという結論を添えて、この論題を終わろうと思います。

今度こそ本当の本題に入ります。（以下シリアスです）

序章　タイムトライアル、その前日

10月11日（土）——勉学の道を志す私は、当然のことながら、数学演習、ドイツ語と2つの授業に出席し、溢れ出る知的欲求をいずかながらも満足させた。その後昼食をとり、部室→新宿→大月→河口湖YHと向ったのであるが、途中大月へ向う車中で私は再び頭をもたげた知的欲求をまぎらわすため車内広告を見回した。そしてある1つの広告に目をやったとき、私はしごく単純な

経験に驚かれた。
（いい旅チャレンジ2万Km をやっている人は、果して何人いるのだろうか？）
まあ そんなことはどうでもよい。とにかく大月へ着いたこととして話を進めよう。
大月から河口湖YHへは富士急行を利用するのだが、深い経済的余裕を持ち、走ることをしたら楽する永見さんと、嶋田と私は、YHまで走ることにした。途中 永見さんからあのナウい"Walk Man"を借りた。私はナウイ"Walk Man"のことだから、きっと フュージョンかレゲエ※でも入っているのだろうと期待したのだが、聞こえてきたのは、"宇宙戦艦ヤマト"であった。私は永見さんの性格をあらためて疑がった。そして、富士吉田 あたりまできたところで、にわかに雨が降りだした。黒々とした雨雲は、私達3人が600円あまりの電車賃をけちったことをあざ笑うかのごとく、おうしゃなく迫ってきた。しかし、私達の青春の熱い炎は、そんな雨をも水蒸気とし、私達の体には一滴の水滴もかからなかったということはなかった。私達3人は濡れた。なんで男が3人で濡れなければならないのだろうか。私はホモではない。もしかしたら、嶋田と永見さんが------。
とにかく、河口湖YHにたどり着いた。

※ フュージョンとレゲエ
私は何のことだか、さっぱりわからない。

さて YHでは、別にたいしたことはおこらなかったが、ホステラーという人種に対して、私はこれから、ホステラーは、利に慣れ慣れしい人が多く、しかも、それが、知らぬ間にという場合が多いように思う。例えば、誰かが、小銭もらを「ピッター」と俗に言われるようなギターを買ったとする。すると、おかしくもないのに御愛想で笑ってくれたりするのである。友好的で親しくなろうという努力は認めるが、何か違うのである。アメリカ人ならば、親しくなるのかも知れないが、日本人が、なぜ、どうして、その仲間になるのは、障害なる存在のためだろうか。私は、ハンパに慣れ慣れしいのなら、かえって、ある程度の距離を持った話をしたほうが、お互いにいいと思う。(親しくするなら親しくするで、ホントに親しくなるのとこまで行くべきである。ただし、女に限る)はとも言いながらも、私は、その日、他のホステラーの人達とトランプをしたのだが、やはり、何か違れた、という感じが残ったのであった。

夜はふけて、皆、明日の冒険を祈って、いや、明日の南天日出を祈って、寝床についたのであった。

ここで、しょーもない話もう。
デスクの本棚に、初会の参考文献であった「秩序の法則」という本がある。無秩序のどさくさにまぎれて、何度、ご、するのかなと考えていると、その隣にある「なんとなくクリスタル」という本が「なんとなくクリ○○○」に見えてしまった。すると、

その隣にあった「スキーの手入れと保存法」という本が「スキ○の手入れと○○法」に見えてしまった。ふと横目を見ると、そこにはティッシュがあった。

さて○の中には何が入るでしょう？

本章　タイムトライアル

この日の朝、天候がどうであったか、あまりはっきりとは覚えていない。でも、確か、曇りがちで寒い朝だったように思う。私は中川のしゃっきりない朝食を済ませ、軽量化を終えて、私達は、ブルドッグラインへと向った。そして話が久しく続いたが、スタートの時間になった。出走順は、1番三浦さんで、ラストが三浦さん、私は、真中より少し後ろであったのだが、私の丁度前に、永見さん、山口さん、小川さんの長老（すみません）3人が並んでいたのがなんとなく怖かった。話はどんどん進んで、私の1つ前、小川さんのスタートになった。小川さんは3回目の経験を生かし、新しいスタート法を試みた。スタートラインの後方10m程の所から、スタート開始の2～3秒前にスタートし、スタートラインをトップスピードで通過しようというものである。しかし、タイミングが悪く、スタート時刻までにスタートラインに到達できず、無駄に終わった。さぁ、いよいよ私のスタートである。スタートラインの入口で、交通量調査のアルバイトをしていた女の子の熱い視線を受けながら、私は日本の最高峰へ、スタートした。

しばらく走ると、山いさんの魅力的なヒップが見えたので、欲望にかられた私は半死になって追いついた。最初の頃は、順調と思い、坂を何とも思わず、強引につっ走ったが、その無理もたたり、又、そろそろ終盤かなと思っていた頃に、1合目の看板があっていて、精神的ショックも与えていたハズ、約1時間を徒歩しようっていた。その頃には、山口さんに追いつくのが、むずかしくて、私はもうは無理であった。そこで私は、前もって用意しておいた、森永ハイクラウンチョコレートをかじった。クルコロチョコの西郷ちゃん（今は亡きちゃん）には悪いと思ったがハイクラウンは、やはりうまかった。そして、その時、私は、少し元気を貰ったポパイのように、体の中から、エネルギーが湧き上がって来たのを感じた。そして、山いさんを一気に引き離し、その後、中合目付近で、ハイクラウンをもう一つ食べて、快調に飛ばしていったのである。前方には、おびただしい太陽、右手には、雄大な景観、そして、左手には、そびえ立つ、富士……。なんとしずかすがしかった。

そして最後の、ゴール目前の平坦は、楽勝にさしかかった。そこで当然のように、ギアをアウターのトップに入れた。すると、自分でも不思議なくらい、足が軽かった。あまりに軽かったので、ちょっと下を見てみると、なんのことはない、チェーンがはずれていた。慌てて、チェーンをかけ、走りぬけると、やはり足は重かった。だが、なんとかそれも乗り切って、ゴールインしたと書いてしまおう。（あー終わった終わった）。

追記（）内の話は、タイムコントロールが終わったことによる喜び

ではなく、最後に言葉を終えるメドがついたことに対する喜びの表現です。

とにかくTTは終わった。私は後輩の2時間を切ることができた。勝因は春季ハイクラウンの一言に尽きる。その他、TT全般で時間がかかったことと言えば、三浦君の健闘であろう。彼は予備ラウンドにおける最高を見事に破って一年の中で上位にくい込んだ。又、パンクの嶋田君のことも忘れてはならない。彼の場合ラリーのTT直前でパンクをして、バーストの直前から、パンクの嶋田へと、人口の注目が移ったのである。あとは、個人的なうらみも添えて、ドリオンの副賞のことも付け加えておこう。彼はチェーンを内側にはずしてしまい、なかなか見つけることができず、結局3時間を上回る不記録を残してしまったのである。

最後に、このTTの歌の中で、一番印象に残ったのは、四番刻車輪であったこと、そして、この文がTT中心でなければならないのに、TTのことは約2ページ分しかないことに対するおわびを添えて、終わりとしたい。

ちなみに今日はもうすでに2月25日である。

工大祭　9540西田真佐子

☆本題に入る前に……。：ボールペンって書きにくくって大っきらい！ 元々きたない字が増幅されてしまいそうな気がします。私は、どちらかといえば、軽くてすっすっ抵抗の大きい筆記具が好きでして、しかも筆圧がスゴいほどきれいな字が書ける気がするのですが、この原稿には、それでは、用をなさないし……。

乱筆のいいわけは、このくらいにして、自己紹介に入りましょう。

☆本題

今年の工大祭も、例年とおりつつがなく、始まり、おわることができました。その後、学友会のお兵様が殺されてしまうという事件は、ありましたが、工大内はさほどでもないといういたずらかざりの事件も、あることにはありましたが……。

さて、本年度の工大祭で、サークリング等が売ったもの、売ろうとしたものは、

食べもの関係

ぶどうジュース、ポップコーン。コーヒー。ビール。
カレーライス

飲もの関係（かしかし）

ダニラム（手造り一輪車）

ふろく

工大祭パンフレット

売上げは、上々であり、配当金も、約1×10^4円と、全くなしたものなのでは、ありました。

一匹について、私は、工大祭では、カレーおばさんに徹していました。夜の大岡山を、カレーの材料を求めてさまよい、四個ものカレー粉をみつけては、歓喜激の落涙にむせぶのでありました。早朝のスーパーでは、レジのお姉様に、"晴れてよかったですね。"と声をかけられ、個切ることもせず、部屋へと いそぐのでありました。
部屋で待っているのは、2台のコンロ、こまぎれ野菜、山盛りコッペルと、精根こめて煮ていたタンデムが、ぶっこわれたため、ひまになった鍋頭位でした。

それから当日まで、間断なく、カレー作りが続いたわけです。もう熱いのと、カレーのにおいで時々涙みに出なければならないほどでした。カレーのにおいは、すっかりしつこくて、髪の毛、洋服にしみつき、以後カレーを食べていません(ウソ)

☆☆ 西田家における おいしいカレーのつくり方 ☆☆

材料：お肉（予算によって適量）

玉ねぎ…たっぷり一個　じゃがいも 2個

にんじん…半本

チキンコンソメ一個　バター…たっぷり、

しお、こしょう一少量，カレー粉（ルーの他に）

ローリエ…　乾燥はっぱ　お好みで｛ほしぶどう／トマトピューレ／牛乳

まず！　玉ねぎ玉ちゃんをいためます。これは、気長に一日かけるのがいい本当だそうです。まっ黒こげにこがさず，きつね色に，ふつふつと，いためます。そのためには、たっぷりのバターが必要です。玉ねぎのダシは、このようにしてとると、甘くて、こくがあって一番いい……はずです。

次に！　お肉を強火でいためます。にんじん君 じゃがいもさんも、ザッといため、お水を入れて、煮こみます。長く煮こむ気だったら、じゃがは、後から。この時に乾燥はっぱのローリエを入れ、一ズ本格的だ”と悦に入ります。お好みでほしぶどうもどうぞ。チキンコンソメもここで入れます。

最後に…　カレールーを入れ、辛くない！と文句をいわれないために、カレー粉をたし、ピューレや牛乳でまろやかさを出します。

つづく

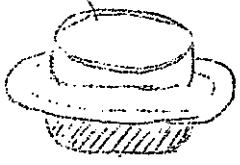
☆「なあんちゃって、突然こんなことを書いたのは、
人の好みの味付けってのは、その人の家のあじつけ＝
お母さんの好みの(少なくともうチの場合は)味なの
でして、合宿中でも、"うチではこうする"が遠慮なく
発揮されちゃうからです。

つづき

さあ食卓へ。サラダと供にどうぞ。ごはんは、釜で
たいた カニの穴あき。(うチには電気がマ，ガスだ
のたいは、ありません。) 福神づけ，ラッキョ
白エいづけ，何でも、そこいらにあるつけものの
ビンを開けておきます。で，たいてい私は、
粉チーズをふって、食べるわけです。

るいた

本体



制作工房料の
西田真佐子でした。
HAKORAN

ナイトランの想い出（1980.11.1.東林～城ヶ島）

1年　副島昌二

このナイトランからまだ三ヶ月位しかたたないというのに、私のパーアッタ頭はもうかなりのことを忘れてしまっているので、フィクションがかなり含まれることをお断りしておきます。しかし、今頃になって新歓コンパや新歓ランのことを書いている人はたいへんですな。

ということでそろそろ本題にはいりたいと思います。おう、そこのお兄いさん！居眠りしてちゃダメですよ！しっかり読んでくださいよ！オンチャッタ。前置きがだいぶ長くなりましたので、そろそろ継私の文章を終わらせていただきます。…じゃなかった、今度こそ本当に本題にはいりたいと思いますが、いかがなもんでしょうか？

病気にはおよそ縁のなさそうな野中や兵藤（たしかこの二人はOL&ラリーの時もヤゼでオッコチしたんじゃないかな？）など次々にカゼの前にひれ伏し、一年の参加者は疲れを知らぬバカカマン下と私の二人だけとなって、恐ろしい二年生に

食べられてしまいましたとさ……(イヤー、JOKEですよJOKE。)そのうえ吉田さんがキャリンコを盗まれるという回暗刻単騎が、いや必殺技が襲いかかってきたのでした。しかし、それにもめげず、顔にひきつった笑みを浮かべ、記念写真をとって部屋をあとにしたのでした。

はじめは冷えきっていた体も、昼間からは考えられない程車の少ない中原街道を走っているうちに暖まってきた。しかし、多摩川を渡ってしばらくすると、アップダウンがきつくなり、もはや暖かいという段階を通りすぎて顔がゆがんでくる。だが、歩こう会の参加者が見えてくると、顔には余裕の笑みが浮かんできて、足は軽く坂を登ってゆくのでした。国道一号にはいるとさすがに車が増えて、少々ペースダウン。このころ歩こう会に参加している[redacted]小川さんたちの一行に出会った。この時はまだ元気そうだったがその後どうなったかは定かではない。桜木町の駅で一回目の休息。ここはしょーもない駅で自動販売機もない。というわけで寒さをこらえてタバコを吸ううちに再び出発とあいなったので

した。このあと途中の深夜営業の食堂でのこと。

僕：チャーハンありますか？

店のおばさん：ちょっとできないねェー

B：（チェッ、しょうがないな）カレーありますか？

O：できないんですがねー。

B：（クソッ、できんもんをメニューに書くな！）ヤキソバありますか？

O：できないんですよ。

B：（数秒考えてから獣化を訴えるように）じゃラーメン！

O：ハイヨ！ラーメンいっちょ。

というわけでまずいラーメンを流し込み出発する。この後は見通し距離内に車が一台も見えない（ちょっと不安という事も）という状態で、例のとうり（？）ロードレースがはじまったのでした。時間があるというわけで、遠まわりして行くことになり、街灯もない田舎道へとはいり込んでゆく。こういう真暗な道では道の外側に何があるのか全くわからない「断崖になってて落ちたらこわいなー」とか想像しつつ走っているとスリルがあっておもしろいもの でした。そういう頃、突然後ろから近づいてきた車のアンチャンが車をとめて一言。「てめえら何だと思ってやがる。ダンゴになって走りやがって、まっすぐ走れ。」と

言いのこして去っていった。我々は、「クソー車から降りてくれればこっちの勝ちなんだけどな～」と思いつつ、なおも真暗な道を走っていった。すると、ついに城ヶ島大橋が見えてきた。橋から下を見ると目まいがするという人はすぐにいやくて、全員無事に城ヶ島についたのでした。しばらく寒さをこらえて待っていると、待望の日の出を見ることができた。この後、紅茶を飲んでお昼しようとする頃には、寒さと空腹のためにカラータイマーが点滅していた。ここから三崎口駅までけっこうたすら、「こどもがバス」(この表現は、疲労が多用する)もれして、ただりついたのでありました。

〔エピローグ〕

僕たちが電車の中でいわしをしゃぶりながら帰っている時に、四人の極人は鎌倉目ざして走っていたのです。しかし、上には上のバカがいて、村瀬さんと下は、なんと東京まで走って帰ったそうである。

これで私の文章をすべて終わらせていただきます。最後までおつき合いいただきありがとうございました。ありがとうございました。また、お越しをお待ちしております。---ナンのこっちゃ。

1980年をふりかえって　　2年　吉田松夫

その1 オリエンテーリングでの話

水戸市街から宿舎に帰るとき、僕はあせっていた。なんと、知らないうちに腕時計に一時間以上の時差が生じていたのだ。僕には地図を見ながら走るなどという余裕はなく、僕はひたすら ⇨大洗 の標識をたよりに走っていた。（これがどつぼの原因だった。）途中村瀬に会った。彼は宿舎までの地図を持っておらずそこまで土地の人に東工大の宿舎へはどう行けばいいのか聞きながら来たということだった。ということで それからは村瀬と一緒に走った。 …… 僕たちがたどりついたのは「東光台」という、宿舎とは全く方向違いのところだった。

その2 春合宿でフリーがばらけた話

春合宿では前半から『ギヤをトップからロー側へ変速しようとするとチェンがフリーとエンドの間に落ちこむ』という奇怪なトラブルに悩まされた。そして中盤からはフリーとチェンとのかみ合いが悪くなった。僕はそれをチェンに

ドロや砂がついているせいだと思い，ひたすらチェンをきれいにし，油をさしていたのだった。（実際にはこのころからフリーのフタはゆるみ始めていたのだろう。）

そして高野山へののぼり。フリーとチェンは相変わらず異音を発していたが，かまわずのぼっていた。僕は合宿装備での急なのぼりはどうも苦手で、あの時も終盤には山口さんにもおいていかれ，完全にぶっちぎられてしまっていた。ついに運命の時。すでにのぼりはあとほんの少しになっていた。僕はインナーフォースで走っていた。坂が少しきつくなった。インナーローにした。ガチャガチャ…カラカラカラ…急にチェンがから回りし始めた。僕は一瞬，チェンがスポークとの間に落ちこんだものと思い，直そうとした…がよく見るとフリーが外側へずれていた。終わった!!と思った。そのあとはあと少しということもあり，他の4人が待っているところまで押して行った。これがよくなかったようだ。あの時すでに直していればボールの紛失をもう少し少なくできただろう。

合宿後このフリーを分解して調べた！ベアリングボールは38コ

しかあっていなかった（Normalは 36+41=77コ）そしてボールが少ないまま使い続けたため，ボールレース部はひどくでこぼこになってしまっていた。

〔原因〕フタをあけてスプリング調整をしたのがよくなかったようだ。

〔その後〕フタとボールについてはスペアがあったので，無理矢理復活させて，予備合宿，合宿等で使用した。予備合宿の途中でもフリーのフタがゆるんだが，この時はすぐに気づいたため，大事には至らなかった。

その3　リム振れの話　（夏合宿）

あれは美深から浜頓別まで走った日のことだった。休憩後，走りだそうとするとリムとブレーキシューとがこする音がする。仕方ないのでレバーのクイックをはずして走りだした。しかしそれでもまだ音がする。しかしリムを調べてみるとそんなに狂ってはいない。変だなあ，と思いつつも結局前ブレーキのワイヤーをはずして全く利いない状態にしたらやっと直った。その後は片ブレーキということで慎重に走り，その日の夕方，浜頓別のキャンプ場でホイールの狂いとりをすることにした。しかしホイールには問題になる

ような狂いはなかった。しかしまあ、ということで少々いじっておいた。すると次の日からは全く大丈夫になったのであった。非常にふしぎなトラブルだった。

その4　事故った話（夏合宿）

事故といっても小林ほどのものではないが、雑内公園からの下りでスピードを出しすぎてガードレールにはりついてしまった。小指をハンドルとガードレールとの間にはさんでしまい痛かった。ダウンヒルの帝王を自ぜす僕としてはこういう姿は見られたくないわけで、この時いちばんうしろを走っていたというのは非常にラッキーだった。

その5　愛車ルマンスポルティーフを盗まれた話

この問題については次号にくわしく書きたいと思います。

その6　腰痛の話

12月中旬から急に腰が痛むようになり、現在も完治していない。原因についてはいろいろと言われているが、僕としては一輪車の練習のしすぎだと思う。とにかくあの頃は自転車には乗れないし、麻雀をやっても勝てないし、ということで一輪車に乗ってばかりいたような気がする。去年はひざが痛いわ、腰がいたいわで医者に行ってばかりだったようだ。今年は健康人になりたいものだ。

原稿がなくなったのでこれにておしまい（'81.1.31）

'80夏合宿のあと　9702 村瀬 健

札幌見物　1日目

ほとんどのあんちゃんたちが札幌をあとに帰ってしまったあと、私は札幌見物をした。（ところで徳さん、ういた旅費代4000円どないなったんですか？）といっても北大植物園と旧道庁舎だけを見ただけで（植物園はよいところです）あとはせんたくをして郵便局を2つ回った。くっこいくっさいパンツたちを洗おうとコインコインランドリーを捜がしたが方かなかみつからんかった。やっとみつけた所がしっぱいなんと3000円でびっくり。

ここにきて今日のねぐちをどこにしようかという考えが、銭をないので駅寝ということで15時ごろ思ちんと歩く意っ工夫あへ。結局寝るつもりが追いだされてのき下で一夜を明かす。

たくさん走る　2日目

朝トマトスコ食い神威岬へRoute229を伝っているわけトラックさんたちが多く中せかうし、トンネルのやつらがたくさんいるのらとてもこわい道であった岬の見まで見に行ったあと引き返し、

食ウヰスキー工場見学。ここでせこくApple酒を何ばいもをらい，ボトルに半分くらいちょろまかした。

工場を15時ころ出て洞爺湖へ向かう。まっぱらいながら小さな峠を二つ越えて前方に羊蹄山を見ながら（といってもふはかすんでいたが）走りつづけた。留寿都のころ真暗になりサイトラン。そのうちがスも出てきて車らが追越してくれる時のヘッドライトらがないと前がよく見えない。ヘトヘトにつかれて洞爺湖へ。21時すぎ，もしかとめてくれるのではとユースへ行った。中に入っても誰もいないので先にふろに入った。それでも管理人らしき人がいないのでピンポンをしている人たちのつめたい目を背にユースを出て盆おどりの舞台の下でねる。（予約を無視して，ふろを無断借用したのです）

ところが夜中，ひまわり屋さんにたたきおこされる。職務質問され，うだうだ文句をきわれ，立ちのきを命ぜられた。（頭にくる）それでバスターミナルへ引越し寝る。この日の走行キョリは歩き（神威岬で5kmくらい歩いた）を入れて

200km そして食事はトマトスコとじゃがいもスコ（ウィスキー工場で食った が札幌のよりうまかった）と酒。あとジュース15本。宇佐見くん，君はこれに勝てるかい？

雨のオロフレ峠　3日目

次の日起きてみるとどしゃぶり。昨日おい出してくれたマッポさんに感謝。[illegible]島を見て（行っても何もないつまらん所や）[illegible]着らきでしっかり濡れてオロフレ峠へ。寒くてしょうがない。標高930m[illegible]んなんならくるのではなかったと強[illegible]反省。どしゃぶりの雨とダートの下[illegible]今はかじかんでブレーキがおもうようにきかない。途中パンクしたサイクルストに乗った。こんなんにならないようにといのりながら登別へ。

[illegible]とっかえしてくま牧場，地獄谷[illegible]を見る。（湯気の出る水面に雨が[illegible]ると活火山となかなかよい所だ）[illegible]は乾燥機がまともに働かないユ[illegible]にとまる。

[illegible]に飛行機で　4日目

[illegible]時に出発する。今日はお盆であ[illegible]もし飛行機に乗れるとしたら，

今日をのぞいては晴し。　　ふれた。
ったちみじめの格好で歩くが　いたい
ばちか千歳へ向かった。あいかわらず
雨がふっているから全身ぬれねずに
Route36を走ると，トラックこんでかい
っぱいし，かりと水をかけてゆく。警
備のおじさんや一般客たちの白い目に
迎えられて千歳空港に着く。スカイメ
イトに入り，キャンセル待。スカイメ
イトで1番，一般キャンセル待は6人
いた。時間が近づくと予約客たちが乗
りこんだ。キャンセル待の人たちが6
人呼ばれた。ぎりぎりアウトかと思っ
たら10分くらいして私も呼ばれセーフ
1番前の中央よりの席であった。私が
席についた時はもうドアはしめられて
いた。

もう書くことがなくなった。でも余白をう
めるために何か書こう。4日間で走っ
たキョリは400kmちょっと いろいろと
きめどい旅行であった。0千番代の
人たちにゆいたい。'81年の夏合宿
も北海道にゆきたい。東北なんて
いやだ～～～～～　　君に栄光あれ!

サイクル・マシーン

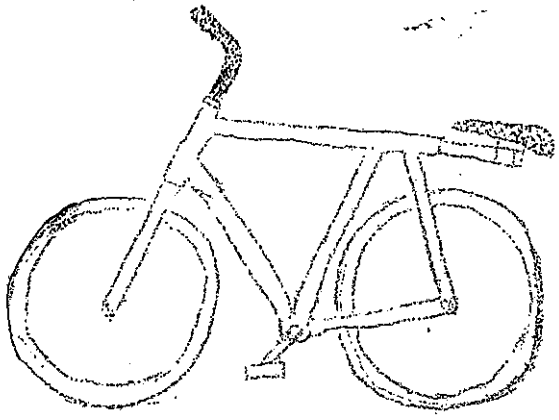
3年 化学科　ミウラ
ミツナガ

なんとも奇妙な響きを持つコトバである「サイクル・マシーン」。私は3年間 サイクルサッカー という、知らない人が聞いたら目をパチパチさせ不思議そうな顔をするスポーツに心身ともにうち込んできた。当然のことだがかなり金もつぎ込んだ。特に2年生であった1年間、毎日のように練習した。1日1回サッカー車のハンドルを握らないと飯が喰まなかった。バランス、ボディコントロール、などを養う独自の工夫、フォーメーションプレーの研究、力学的観点からのサッカー車のスケルトン(寸法)の考察、その他このスポーツについてのあらゆる知識、技術を身に付けようとしていた。私は、ようするにサイクルサッカーが好きなのであった。大学生でもある私は、勉強もしなければいけなかったのだが、ある一つのことに熱中してしまうと化けまるでだめな性分なので、成績は超低空飛行を持続していた。つまり私はサイクルサッカーをやるだけのマシーンになってしまったのだ。

なぜこれほどこのスポーツにほれてしまったのか。

私は、サイクルサッカーをやるために大学に来たのではなかった。ふっとしたハズミにサイクリング部に入り、そこに安井さんという風変りな人物にあった。それが運命の出合いであったのだろう。私にとって不運だったのは、最も上達する

時期である1年生の後期、体育館の床のはりかえのため使用不可能になってしまったことである。よく寒さんと寒い風が吹く外で、暗くなるまで練習したことが目に浮ぶ。安井さんにおこられながら、一つ一つの技術を修得してきた。そのおかげで私と山口さんのペアーは、まあまあの戦果を修めてきたのであった。確かにうちの大学は、サイクルサッカーは強い。しかし、体育館が使えて、サッカー草も各自持っているし、ボールもあり余うほどあるので強いのは当然であろう。つまり他の大学が弱いのだ。後輩どもは週二日の練習で満足しているのか不安である。私はサイクル・マシーンではあったが、それはサイクルサッカーに限ったことで、他の事は人間らしさを失わなかった。(?)



オレはサイクリング部の部長というものを経験した。任期が終わってみると、自分は一体何をしたのだか、よく覚えていない。部員にとってはたよりない、どうでもええ部長だったのかもしれない。しかし楽しかった様これでもう以前と同様には、部にはいられない立場になってしまった。

それが辛い。全国を飛び回った分だけ、金もかかった。しかし、もう金をいくら積んでも以前のような経験は再現できないのだ。サイクリングとは オレの趣味以上のものであった。サイクリング部を通じ人間関係を学び、体を鍛え、ついでに遊びも覚えた。オレは去りゆく者の1人であるが、これからの部に望むことは、もう少し大人数のクラブになってほしいのだが……。みんなでワイワイ、がやがや、1人1人は勝手なことをやっているのだが、ここぞという時はみんなが1つになるクラブが本来の部の姿だとオレは思っている。

まあ石田君。適当にがんばってください。

来年は麻雀大会出るぞ バカヤロー

来年も五月しガッタ出たいな ナンツッテ

来年のT、Tは出るのかな～ フザケルナ

来年は山口さんはいないので部室にはいつも誰がいるのかな。（オレだったりして）

来年は新入生（部員）何人はいるのかな？（元気のいいのがほしい）
ヨよタラッタ タラッタ、ラッタ ～よ用

㊟ 来年とは昭和56年度のことであります。

アコガレ

石田

サイクリング部に入った頃といえば、古木さん小川さん、そして鈴木さんは中心になってクラブを盛りかしていたし、4年だった小島さん、三浦さんなんかもよく部室で見かけた（だいたい三浦さんは寝ていた）。山口さん、高橋さん、秋元さんといった面々が部室を本拠としていた。といっても4人組闘争に明け暮れていた訳だけど。安井さんなんか（今様じゃないけど）本当に親衛のしがいがある感じだった。ぼくらにとってその頃の印象がとても強い方だから（一年の頃からよく部室に顔を出す方だったから）本当に懐かしいなんて思う訳。

で、先日、とうとう（本当に"とうとう"って感じで）この7000番台を思い出す日がきて、久し振りに4年はと（それに先輩、話すことの少なかったんと）すごく気持ちよく会うことができてよかったなんて思っている。

で、今、7000番台と本当にさようならをしてぼんやりと物思いにふけっていると（まあ、ぼくにだってこんなことはよくある訳で…）なんとなく、ひょっとしたら確実にぼくの意識が変わったような気がしている訳。ほかの3年はどうかな？まあ、新しいクラブをつくる気持ちでがんばってみたいね、思いきって。

1981.1.26. 深夜.

ドッペルゲンガー
ドッペルゲイロウ

1980年、8月20日、天候不順の東京で石田あつむちゃんは思想的向上心、肉体的向上心の焦燥を押さえて敢えて日本社会から隔離されてしまったが、新聞を賑わすまでには到らなかったのは不幸中の幸いであった。脳細胞欠陥の原因は明らかであった。過去4週間、情報過多社会から見い情報過少社会に移り住み、極度の情報不足から生じたのである。生まれながらにして情報を常に体内に取り入れていないと生きていけない情報中毒にかかっていたのである。肉体的欠陥は、その3日ほど前に食べたカエルの足が原因とも考えられるが、いまいち不明である。はっきりしているのは、合宿のクリームパン事件からしてわかるように、あつむ君はダチョウの胃袋をもっていない、ということである。

隔離されてすぐに肉体的欠陥はサヨウナラ…。という訳で毎朝、6時起床、ラジオ体操をして運動不足解消、というのは大ウソだけど腕立て伏せぐらいはしていた。問題は脳細胞だった訳で、あつむ君は1ヶ月間で「知識の吸収」(情報、でないところがみそだい)をせねばならなかった。ハイ。

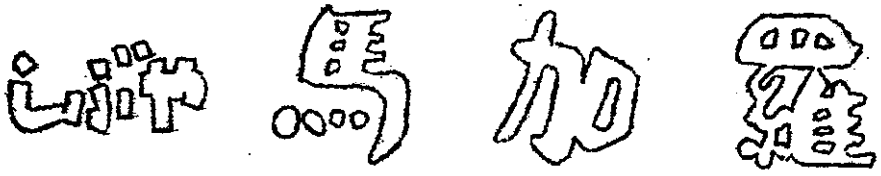
（語調をかえて…）

まあ、実状は察しの通り、何もすることがなかったので活字を読んだ、というだけの話であります。普段からマンガを読まないあつむ君でありますから、当然マンガは読みませんでした。そのかわり（？）毎朝7時間以上かけてこれでもかと思うほど新聞をほじくりかえしていました。最近売れ行き落ち目の"文芸春秋"なる月刊総合雑誌もリキを入れて読んだりしていました。（文芸春秋は腰を据えてじっくり読むためにあります、念のため）

（ウッ、ミッ井病がうつったようだ…）

（余談ですが）化学科には1年入院して本30冊読破の文学青年がおりまして、彼の部屋は下宿なのに蔵書の山であります。（チョット大げさのようだ）

晴れて日本社会に復帰したあつむ君、部室では、なんと、コレラにかかっていたことになっていたりして。斉藤さん、「イヤ、イヤ、アレだよアレ…」



『オ～イ、小林～！吉田つれて飲みに行こうぜ！
ボトルもはいってるからさ、
野中も一緒に行こうぜ！おごってやるから』

パート。四クロ

ポカポカ陽気のお昼すぎ、もう天文台の桜はおわったかな、なんて思いながら家の近くをのんびり歩いていると、突然ぼくの目の前に4さいぐらいの青いコールテンのズボンをはいたカワイイ男の子がトコトコとやってきて、立ち止まったかと思うと突然(本当に突然)涙をポロポロと流しはじめたもんだから、もう本当にびっくりなんだよね。さすがに無視できなくて、男の子の前にひざまづいて、

「どうしたの?」

「ママがかえってこないの…」

「ママはどこにいったの?」

「…おにいちゃんのようちえんにいったの…」

「家はどこ?」

「…(?)…」

「おうちはどこ?」

「…(あっち)」と指先すもんだから、

「じゃあ、おうちでもうすこしまってようよ。そうしたらかえってくるから。」

なんて適当にごまかして(もう、逃げ出したい一心に)ぼくは男の子の手をとった。この男の子の手というのがメチャクチャかわいくて、手をつなぐといってもぼくの子指にしがみつく感じで、おまけに涙にぬれているせいもあったけどなまあたたかい。

もう、こまったような、うれしいような、よくわからない気持のまま男の子の家のドアの前までトコトコ歩いて、
「じゃあね、バイバイ。」
といって逃げ出した。少し歩いて後ろを振り返ると、左手をドアの取っ手にかけたままじっとこっちを見ているもんだから（アー、どうしようかなー）なんて思ったけど、したことといったら左手をあげてバイバイだった。（マッタク、モウ、）そうしたら男の子も右手でバイバイ。（バイバイ）
また先生はじめても、まだあのカワイイ手の感触が残っていて、傾きながらニコニコしたりしていた。
（1978.4.15.晴）

こんな出来事があった約1ケ月前、本当に久し振りに（もう何年ぶりという感じで）幼なじみのあいつに会って話すことができて、あいつが
『男の子なんだから、頑張らなきゃだめよ』
なんて励ましてくれた。男の子なんだから、と言われた時のあの気持。ヨシッ！がんばるぞ、って1年間がんばったもんね、本当に。

「男の子って、ちょっとしたことですぐ頑張るからかわいいわ。」
「ナニー!!」

アトガキ

1月1日　初日の出ラン・城山湖・八王子城跡
　　（友人2人と　夜3時半、自宅出発）
6月22日　大弛峠
　　（友人1人と、夜行で信濃川上へ）
10月4日　ヤビツ峠　（今泉で4人と）
10月11日　本栖湖～河口湖
　　（T.T.の前日，1人で）

最初はフリーランのことなんか書こうかなと思って下書きまでしたのですが、うまく書けなくてやめにしています。まあ、日記にちゃんと書いてあるし、クラブにはツーリポを出してあるし、別にとりたてて書くこともないだろうと思ったのです。

あと、インドネシアのことも書こうかなんなんて思ったけどまあ、友人となくやめにしました。夏合宿と重なってしまい、夏合宿に行けなかったのは残念だったけど、本当に行ってよかったと思っています。今までと違った環境の中に身を置くとやっぱり、自分が見えてくるようですね。特にそこの人との接触を通して。

ここまで書くのに本当に苦労した。もう下書きを何回もしたもんね。特にマエがキとパート・ツーの後半部分は。来年はもっと楽に書きたいね。そういえば名前を忘れているけど、書かなくてもわかるね。

ある雨降りの日

4年　機械科
高橋俊充

その1

Mr.Tは朝食(トースト＋ハムエッグ＋ブラックコーヒー)を終えて仕事に出かける。マンションのガレージに入って新品の「流星号」に乗りこみ頭上で風防をしっかりと閉じる。軽くギヤを入れて人々の感嘆するような視線を感じながら通りへ出る。手を伸ばしてC.V.M.(心臓・血管モニター)のスイッチを入れ旧首都高速4号にてマンションの目の前の麻場インターから入るとしだいにスピードを上げながらゆるやかに左に曲がり特別車線「還七」に入っていく。この車線は「流星号」のようなクルマの専用車線で完成してまだ新しいので非常に走りやすいMr.Tは満足そうだ。雨雲が厚くなってきているが彼は気にもかけずにどんどんスピードを上げていき、メーターは80kmをさしている。カーブで下の車線を見ると最近はもう見かけなくなってしまったシグマターボがアクセル「全開の経済速度60km程で走っている。シグマを追い抜い

下に旧首都高速3号を見かけたあたりか

ら雨の粒が風防をポツポツたたき始めたが気体力学的なカーブを持たせてあるため、風防に水滴はつかない。C.V.M.は「すべて良好」と表示している。減速し下にMr.ドーナッツ洗足店を見おろしながら右接すると彼の会社「大岡山株式会社」はもう近い。いつもなら正面に富士山がくっきりと見えるこの最終ロードが彼は気に入っている。が、今日は雨降りのため見えない。正門でヒゲの守衛さんに軽く挨拶すると100年記念館前で「流星号」を降りて駐車場の係員に渡し、彼はオフィスに吸い込まれていった。通勤時間はぴったり15分。昔、電車で通っていた頃は晴れの日でも30～40分かかっていたのだが、「流星号」のC.V.M.の表示は彼が心肺機能を完全に使って394.7カロリーを燃焼したことを示している。それ以外にはほんの少しも、ガソリンも電気も消費していない。「流星号」は自転車なのだ。

その2

午後3時彼は「流星号」に乗り込むと朝とは逆の方向へと走らせた。笹塚のマンションに愛車を収納すると、急いでまた出かけていった。4時に新宿で待ち合わせをしているのだ。あいにく、雨のため京王線は運休している。(曇or雨の日

は太陽発電ができないため、天候によって、京成、東急、私鉄、京王、小田急、西武、地下鉄、国電の順で運休するのだ。今日は小田急までの5社が運休だ。20分遅く待たされて、やっと新宿駅へ着いた。地下鉄駅は深く、地上へ出るには、さらに10分程階段をかけあがらなければならない。エスカレーターは3年前に廃止になってしまった。

やや脈拍数を上げて地上へのぼりついた彼は目的地とは逆の方向へ下町街道を歩きだした。しばらく歩いて橋のたもとで立ち止まると、彼は何かを捜しているようだ。そしてそこに東京タワーを見つけると、ゆっくりと微笑んだ。橋の下には線路が幾本か敷かれ、静かに輝いていた。彼は目を閉じて、過去の風景をゆっくりとかみしめた。うす暗くなった中を、赤と白の光の点滅が交互に走り、東京タワーにはその輪郭を示すように点々と灯がともっていた。そんな想いを走らせ、そしてなつかしんでいた。

どのぐらい時間がたったのだろうか。数秒だったのか数分だったのか。彼は電車の音で、我に返ると、もう一度はっきりとタワーを見つめ、そして来た道を待ち合わせ場所である新宿西口地上派出所前へと歩いていったのである。

その3

2,30年前、イラン・イラク戦争というのが起こった。それによってIJPCに失敗してしまった三井物産は資本金の問題で政府との折合いを悪くしてしまい三井系はことごとく倒産してしまった。トヨタしかり、東芝しかり(東芝の場合は社員M氏によるモーターの設計ミスによる影響も大きかった) ただソニーだけは西口新社長の下で着実に営業していた。WALK MAN以後、新製品が出しても出しても当たらず、つぶれかけたSONYは西口氏によるHIT作品「CYCLING MAN」に救われたのだった。これはただ自転車にラジカセをのっけてダイナモとバッテリーをつなげて、速度に関係なく聞けるというものだったが 世はまさに自転車の時代。そして「CYCLING MAN」を商標登録してしまったという強みで、その製品名のセンスの悪さにもかかわらず売れたわけだ。これによって彼は新社長になったのだ。

石油事情悪化により自動車メーカーはほとんどつぶれてしまっていた。トヨタは完全に破産、日産はかすかにヨット部門のみが奮起している。東洋工業は最期の作品RX-7.47もパッとせずほとんどつぶれかかっている。それらに変わって伸びてきたのが自転車産

業である。その中でもシマノは今日、日本を代表する企業に成長している。

トヨタの倒産とともにつぶれかけたヤマハは、二輪を作っていたため難をまぬがれた。バイクのエンジンを外すとすぐに自転車を作ってしまったのだ。他にもバイクメーカーはあったがヤマハは国内第3位の自転車メーカーになっている。ここまで強くなったのには鈴木氏の貢献があったからこそである。彼はヤマハ自転車のおまけとして「うなぎパイ」をつけることを提案したのだった。それが厳しい販売競争の中で当たり、ヤマハの自転車はある程度売れた。

シマノ、ヤマハ等、日本の自転車は世界中に広まり、過去の自動車と同様に各国との経済の摩擦係数(μe)は上昇する一方だ。日本は他国からのたばこの輸入量を多くするために、外国たばこの値段を大幅に下げることを要求された。そこに厚生省の圧力が加わった。これ以上国民にたばこを吸わせてはいけない。国としても国民の健康を考えるべきだ、ということになり、専売公社の反対にもかかわらず、結局、国内たばこを外国たばこ並みの価格に引き上げるということで話はまとまったのだった。

その4

Mr.Tは待ち合わせ場所に5分程遅れて到着した。が、そこにいたのは山口氏と金井氏だけだった。

「あれ？あとの2人は？」

「まだだよ」

(やっぱりサイクリング部だなあ)と思いつつ待つことさらに5分。永見氏が現われた。

「途中でパンクしちゃったんだよ。それも2回もだよ。菊名と綱島で。やっぱ雨の日はパンクが多いんだよなあ。」

さらに10分程で西口氏が頭をかきながら

「ワリーワリー」

と、全員そろったところで5人は西へ向かって歩き出した。

何本もの高層ビルが林立してはいるのだが実際に使用されているのは、どれも10数階までだ。三井ビルは完全に廃虚となっており、どうやって書かれたのか側壁には1個が数m もある文字で「政府は三井閥をつぶす気か！」「三井物産に愛の手を」などと書かれている。

5人は住友ビルへ入るとビル中央の気圧式エレベーターに乗り、⑤のボタンを押した。約5分後、エレベーターは50階に着いた。住友ビルは中央部が空洞ふきぬけのビルだったため、そこにエレベ

ーターを取り付けることができたのだった。そこから階段でさらに上り展望台へ行くとそこで他の5人と合流し、目的地であるセントラルパークへ入っていった。

計10人で酒を飲み、時がたつのも忘れて話こんだ。約1時間半で彼らは帰ることになった。時計を見ると5時46分だ。

「間に合うかなあ」とみんなつぶやいている。

「終電まではまだまだあるぜ。2次会行こうぜ。」と金井氏が言った。

「オレはチャリンコだから平気だよ」と永見氏が酔った顔つきで一言。

2次会に行くことになった5人(金井氏、永見氏、西口氏、山口氏、それとMr.T)は歌舞伎町へと向かった。彼らは「土の家族」に入ると飲みなおした。

「そろそろ帰ろうぜ」

「オレはチャリンコ――ムニャムニャ」

「いや、今日は終電まで飲もうぜ」

結局、終電で帰ることになった。店を出ると、ほとんど人通りもなくなって閑散としている。西口氏と金井氏は国鉄で、残りの3人は地下鉄で帰ることになった。再会の約束をして別れた後、3人は新宿三丁目の地下鉄駅へ急いだ。

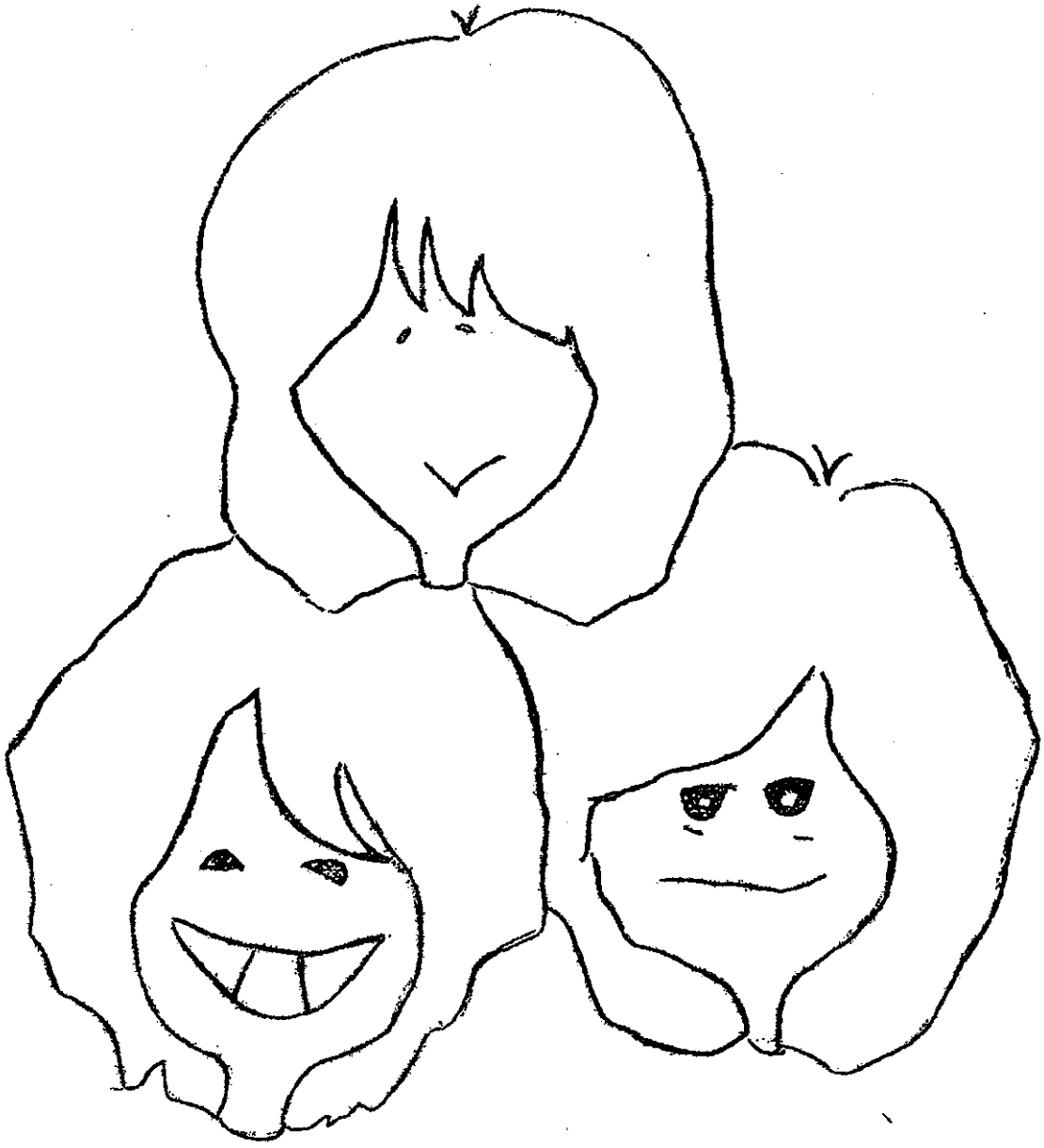
やっとのことで7:58の終電に間に合った。

「あぁーあ、終電になっちまったぜ。」
「今日、夜間雨降ってただろう。」
「住吉までいくらかかるかなあ。」
「基本料金が2円だろう。まず夜天割増が2倍、深夜割増(6時以降にかかる)が10倍だろう。終電割増が5倍、オイ 100円だぞ。」
「歩いて帰りたいところだけど、この酔っぱらいをかついで1時間じゃ無理だろう。」
「まったくだ」
「戒厳令で9時以降は歩いてられないからなあ。」

マンションに着いて水を飲むと、永見氏の酔いも少しは醒めたらしく、
「おい。懐かしいテープ持ってきたんだ。聞こうぜ。」と1本のカセットを取り出すとラジカセに入れてスイッチを押した。
「♪雨の降る夜にはビリージョエルなのか?」
スピーカーからは今はなき八神純子の曲が流れてきた。
「えらい古いやつだなあ。音が消えかかってるぞ」
「まあ、そう言わずにかけとけよ。」
水色の雨、想い出は美しすぎて、エンドレスサマー甘い生活……パープルタウンとかかり、ドゥ、ブルーが流れている時だった。突然、聞こえなくなってしまった。

「おい どうした。頑張れ」
と永見氏はラジカセをたたいたがだめだ。
「今日は雨降ってただろう。だから あんまり充電されてないんだよ。もう寝るしかないぜ。
「明日は起きたら昼だろうなあ」
ということで3人は寝ることにした。
Mr.Tはベッドに入るとラークマイルドを吸いながら考えていた。
(今日は長年の夢がかなってよかったなあ。オレ一度でいいから青短と合コンしたかったんだよネ)

登場人物に似たような人がいたとしてもあんまり関係はありません。



CANDIES

FOR EVRE

サイクリングについて　　西口正之

今まで僕はいろいろなサイクリングをやってきたと思う。クラブの合宿や、2～3人でのフリーランや、ソロツーリング等々。そして最も印象に残っているのは、3年の夏休みに行った北海道のソロである。サロベツ原野を1日誰にも会わず、もちろん誰とも口をきかずに走った時のことが忘れられない。空は今にも雨になりそうな重いくもり空で、風は真夏だというのに冷たく、朝なのか昼なのか、それとも夕方なのか、全然わからない天気であった。そして、稚内にやっとたどり着いた時、「なんて都会なんだろう！人間がたくさんいるぞ」と思ったりしたものだ。一人で走る時の

不安や、開放感を存分に味わった1日であった。もちろん風景の素晴らしさも忘れられない。そして、そういう、不安とか開放感や、何事にもしばられない自由さ、こそが、サイクリングの楽しさであると思われる。そこの空気にじかに触れて、草花の匂いをかぎながら旅を出来ることこそが自転車の最大の特長だと思えるのだ。そして、そういうサイクリングの面白さを一番引き出してくれるのが、ソロツーリングだと思われる。もちろん、複数の仲間と走らなければ得られない喜びもあると思う。でも一人でなければ感じることの出来ない喜び(苦しみ)もあるのではないだろうか。

サイクリストは観念論者で、ロマンチストで、夢想人であるのだから。

狂走四年間

S33,9,9生 小川武史
通称 ぉ

狂走といってもべつに狂いそうな位自転車に乗ったわけじゃない。どっちかというと酒をのんで狂走した方が多かったナヤ〜。狂乱ぶりをあざ笑うかの様に工大際で109円で買いクリーニング代に650円もかかってしまった社長用スーツが下宿にぶら下っている。今夜は、渋く『ジン・ライム』のグラスでも傾けながら四年間をふり返ってみようかな…。

Ⅰ 入部の巻

『おい鈴木! お前何かクラブに入るんか』とまだ、たどたどしい標準語チック語で、同じ語学クラスに居たやたら『…ら』と言う麻黒い奴に恐る恐る聞いてみた。奴は高校時代サッカーをやっていたらしく、サッカー部に色目を使っていたが、サイクリング部の説明会に一人で行くのもナンダカラ一応さそってみた。結局そのまま二人共入部…。その時のくされ縁が今の研究室までつづいているのだ…。

Ⅱ新歓コンパの巻

部室がゲロまみれになり初の急性アルル中が出た今年もスゴか。たしたら一酒井知ってんだぞー！お前一年なんだろー！」とわめき散らす弱そうな九州男児のいた去年もスゴかった。俺が一年の時のは、実に痛かった。先づ、フラフラしていてスロープを転げ落ち肩を脱臼。「痛い、痛いとわめいていたら、やさしい先輩緒氏が、「ヒモンヤ」に連行してくれた。「こんなのほっときゃ治る！」と病院でもわめいていたら、いきなり、看護婦に張りたおされた。「ヒモンヤ」とのくされ縁もこの時からなんですよ。

Ⅲ下宿の巻

高校時代の下宿は、四畳半　三食(弁当)風呂、洗たく付きだった。大学でも似た様な所でいいだろうと思って三畳二食付の下宿だった。とにかくひどかった。となりの室のため息が聞えるのである。一年たって下宿をさがし始めた頃、山口もさがしていた。別に何も考えずに二人で不動産屋に行っていたら、結局北千束である。今から考えると、一人で住もうむ事しなかった。でも、便利でもあったが、便所のモと、ビールびんの山が、やたらと印象的である。

Ⅲ合宿の巻

＊茶柱

川要グリーンユースでの朝食。しぼりたての牛乳が出た。実に変った味であった。でもそれは、しぼりたてであったから変った味がしたのではなくて、くさっていたのである。急拠牛乳のかわりに紅茶が出た。しばらくして、安井が、

「あれ、茶柱が立ってるぞー!?」

とうれしそうに声を上げた。しかし紅茶(ティーパック)で茶柱とはいささか不可解この茶柱実はウジ虫であったのだが、安井君ヒョイと茶柱をつまみ上げると、またうまそうにその紅茶をのんでいたのは52年の夏だった。

＊合宿が始まらない

合宿前日に俺と鈴木は、中村(高知)入りした。その夜先ブ飛びこんだニュースは、技阜のS氏が合宿の始まる日を一日間違った事であった。追い打ちをかける様に新幹線不通のニュースがはいった。結局二人は一日何もぼうけであった。

次の日一応全員そろったけれど、T氏の東京から送った自転車が中村駅に着いていないのである。その自転車と一緒に送った鉛本のシュラフと俺の食器もないのである。ショーガナイのでユースホステルだけでその辺を走り、T氏だけは中村駅で自転車を待った。二日後自転車はまだ来てないので、安芸の我家へ行きドライブをしたりしてさらに二日待ったけれどまだ自転車は来なかったのは、53年の春だった。

＊雨

54年の夏は、現業実習と、合宿がぶっつかって行けなかった。くやしいので実習先の土浦から東北の空に向って「フレー，フレー，雨フレー！」とやっていたら、本当に雨ばっかりの夏合宿であったようだ。中でも山口君有藤君たちの班は俺のオンネンがエラクきいていた様で、非常に気分がいい！

合宿の日、山口多[illegible]さんもうやめた！

Ⅴ 部長の巻

どうしても今回書かなければならない事です。

部長を買って出た背景から始めると、当時は、二年の夏合宿の終った直後で自分なりに頭に描く合宿像、クラブ像もでき、クラブ活動に対するファイトがあった。適切な言葉がみつからないけれど、目標とするものはありました。でも実際始めてみてあまりに思い通りに行かないクラブに負けてしまった様です。いつも、「何故こういう様にしてくれないんだ」という風に他人の責任にばかりしていた、という大きな間違いがあったのです。本当の原因は、自分の器のちいささだったのに。それに気が付くのに半年かかりました。まわりを見てみると自分よりも部長にしてず、としっくりくる奴がいっぱい居るではないか。部長を途中でほっぽり出す事はこれに気付いてもまだ考えていたわけではありません。とにかく部長を買って出た以上とにかく最後まで頑張ってみようと思いました。しかし現実は、新部室の交渉等の諸問題に負けて、クラブをまとける努力をするに至らなか

ったのです。しかしあの頃の俺としては、あれで限界だったと思っています。新部室問題がほぼ終った時自分が部長を次の代に受け継ぐまでの日数を考え自分で以前の様にまとまりのあるクラブにする事はできないと思いました。時間があればできたかというとたぶんそれも否でしょう。本当に自分がなさけ無かったし、疲れてもいました。どうしようもなくて、きさらぎ寮の小さな部室の壁を見ながら考えたもんです。結論は、部長をやめてしまう事でした。今にして思えば、あの頃の役員もそれぞれよくやってくれていたのに、それを信らいしきってはいなかった事も確かです。これではやはり部長失格です。へ利屈をこねて部長をやめてしまった後何とかやってくれた諸君に心から感謝しています。

これからのサイクリング部に期待するものは、過去にとらわれず、皆んなが、『絶対このクラブはいいんだ』と言いきれる様なクラブであってほしいと思います。

Low and Low

4ねんPくみ　ながみ さとる

その1 Tour de Kinokuni

プロローグ（ごくかんたんに）

"大杉谷は良い"と言ううわさはぼくの入部当初（1977）からしつように流れていた。

そして1979年の秋だったかに、アホな観光客どもが、大杉谷のつり橋を落としてしまった。

1980年春、ローテーション通り、紀伊半島に春合宿が決まり、そのコースに入っていない大杉谷と大台ケ原はぼくのツーリングのコースに組みこまれた。

Act 1. 閉ざされた道 3/20 1980

事前に大杉谷から大台ケ原への道は通行できない事がわかっていたので大台ケ原有料道路から大台ケ原に入って大杉谷も見るつもりで熊野でブルートレインを降りた。

大台山荘に宿の予約をとるつもりでTELを入れたら，なんと積雪のため道は通行止めだと言われてしまった。

どーしよーもなくなったのでとりあえずR168を北上する事にして新宮に向ってスタートした。

本宮で昼食の後，宿を川津ユースに予約してから二津野ダム（ふたつのダム）（ひとつしかない）の登りにかかったが，向い風と延々と続く上りに完全にうちのめされてしまった。しかも頂上に着いてみたらはるか下にダムが見えるではないか，何もこんな高い所まで道を通す事はないではないかくそ，おまけにひらがなで「ふたつのダム」なんて看板が出ているからどこにふたつもダムがあるのかしばらくなやんでしまった。（ろくに地図をみないで走っているのがバレてしまう）

とにかくユースについてみると大学生らしいサイクリストが3人おったがそ奴ら決して自分の方から大学の名前を言わんので（ふつう自己紹介ぐらいすると思うんだけど）聞いたら東大のおぼっちゃまだそうで，東大生とゆーものはそんなものかと納得してしまったがしかしねえ。

ユース班（よその大学には良くある）のせいかもしれないけれどえらいおとなしいとゆーか品の良いおぼっちゃまでありました。ちなみに彼らは八幡平でダイの夏に雨にもかかわらずハイキングに出て行った連中の中にいたそうで[illegible]

Acte 2。失なわれた道 3/21 ⑧→⑨

やっぱり大台ケ原にはみれんがあったので歩いて登る事にした。(おろかにも)

地図を見てもらうとわかるが、R168とR309の間にはろくな道がない、と言うわけで必然的に行者還林道を通る事になる。こうして悪夢は始まった。

雨とやたらにあるアップダウンをのぞけばR168はなかなか良い道であったし反本から天川村への道は雨も上って最高にゴキゲンな道だった。

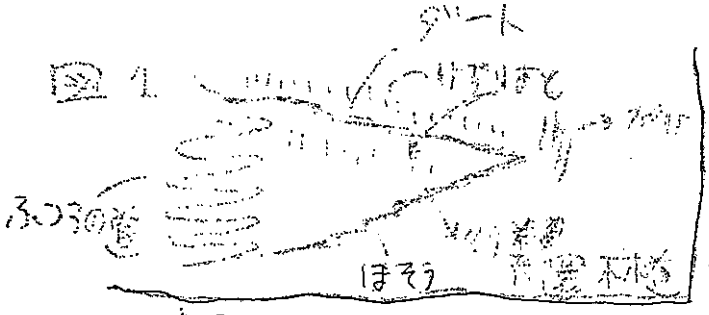
天川村で昼食とり食料をイレて林道に入った。最初のうちは別に何事もなく結ぶいの走りやすい道がつづいたが最後の5線と別かれしばらくすると急にグートがはえそうになった。

はえそうといっても上に草がごろごろついてかえって気にまかわるい。

そしてふと上を見上げたら上にぼくらはとが見た中で最も高い高い高い高い山(ルートがみえたのではなくはりけまっと道をつけた人がいるはずだ)

道の登り方もアップダウンを繰返しながらの山はだをかりかりはりけながらなめしたとこまでも登っていって次のピークでおりてつかれたしてまたなめ上へ登っていくなんてもうこりごりだ。荒っぽい林道である。(図2)

図1



しかもおそろしい事に
思っていると……
パラッ パラッ カツーン
と石がかけのにかち落ち
て来る。道の上には雪というより雪みたいなのがごろごろ
していると遠くの口笛で一度でなくがいたりカーブ
を回るたびにパラ パラ カーンと言うので生きたこころが
しなかった。

Uターンした所からまたゲートに30Mが何と言
か下を見ると下の下にはるか下の道が見えるというのも
なかなかおそろしい。

頂上のトンネル近くなってまたはるかにはるかこころ
どころ道のわきに雪が残っている。水どけが凍って
不気味な青い透明な柱を作っている。

とにかく静かで高く高く遠くの音がけがらく心
細かった。

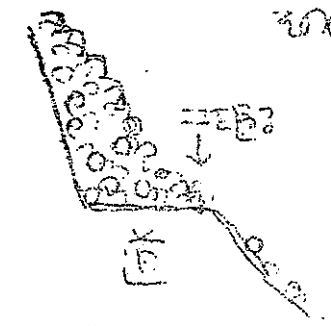
頂上の行者堂トンネルは標高1100mもあることな
ら長さが1151mもあるむちゃくちゃ暗くておまけ
に電灯はない。

とにかく [illegible] 目でいて方向ライトをたより
に走ったが トンネルの壁からしみ出た水が凍ってまるで
中はえいがにしてしまった。[illegible]

トンネルを抜けてから10分ぐらいは大台ケ原も見えて、快適に下ったのだが……。

まずがけくずれ第一弾に出会った。(図2)

Fig.2 がけくずれ、その①その③

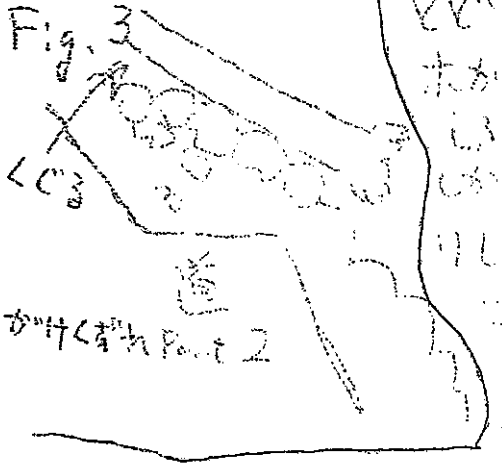


これは自転車をかついで軽くパスした。

そして50mも下らない内にがけくずれパート2にぶつかった。(図3)

これはその①より大きな石でできていて道から完全にあふれた上にどどめとして根っこぎ落ちて来た大きい岩というとうなかなかしぶいものである。

しかもこの下はぐらついていて危ったりしたが、300m下に前方の少しかフーフクーにたどり着くもので[illegible]



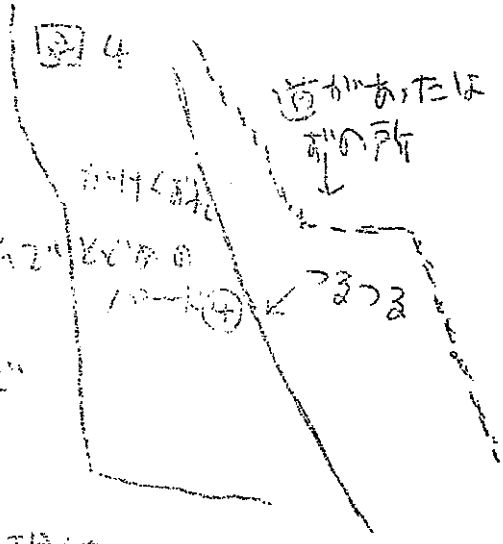
してはいるので手がしびれだけで[illegible]をくぐった。次は自転車だけ[illegible]は下をくぐって どうやら通りぬけた。

んでもって通りぬけてふと前を見ると がけくずれその③がしっかりいた。(コンの先)

だけはその①と同じで一見あまりたいしたことなさそうであった。

えーかげんつかれてきたのでそこまでとことこ自転車を押して行って、ていさに行ってこしをおろした。(図4)

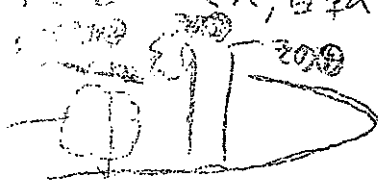
とにかく2〜30mにわたって道がなくなっているはずのスパー永見居モタ台からすがおけて15分ぐらいそこにすわりこんでいた。



そしてパンを食いれを飲んでおちつかせてはりきり(自分を)回りを見回して15分ぐらいうぅぅぅして思考をとにかく整理した。

つまり、まずここで死ぬつもりはない事 次に今さらもどるのはかったるい事、そして向う側の道に出るのは不可能である事、約50m下に引返してきた道が通っている事である。

結局Totalで30分ぼーぜんとした後ボトルの水を全部すて自転車から~~[illegible]~~バッグ類をはずしまずフロントバッグを首に下げサイドのいもに手首を通しかけを下りサイドは肩の首に放りなげ、フロントはカメラが入っているのでできるかぎりそっとおいた。そしてまた50mのかけをはいのぼって自転車を首にかけてまわりてとにかく人、自転車が行きまわるまで待ってやった。



しかしてエ事がおっぱじまりかいたのに助けてくれちゃって

ぼくが自転車を下ろし始めたらマイクロバスで帰っちまった。つめてーでやんの。

もーこんな所には長居は無用なのでとっとと下った。林道の出口に、がケくずれにつき通行止めの看板がでかでかと出ているのにはハラたった。反対側にも出しとけよなオメーラ。

新伯母峰トンネルをこえて大迫ダムへまいおりて行く時も入之波の家たこうがりこんだ時も精神的にうちのめされていてえらくなさけなかった。

Act.3 ゴーストタウン 3/22 ⊗→◎

朝から小雨が降っていたが、天候が回復するという予報を信じて大台ケ原にアタックした。

途中で社会人の3人パーティーと出会い同行させてもらったおかげでどうにか大台ケ原に登る事ができた。

一人だったら引き返すしかないくらい積雪がひどく、ひざまでもぐる雪の中を必死に登った。

一台も車がとまっていない広い駐車場の周囲にレストハウスがならんだ。ちょうどクリスマスの正念日に冬に来たようだった。―それにさながらゴーストタウンの中に雪まみれで佇立っていると、ぞーしょうもなく寒くこんでしまった。

3/23 ⊗→◎

とにかく一泊して朝起きたらふぶいていた。

食料はあったが、しーもない山小屋のおばさん相手に一日つぶす気がしなかったので他の3人と下山し荷物を置あずけてあった入之波の宿にもどった。

Act 4 春が来た！ 3/24 ⊗一①

大迫ダムから新伯母峰トンネルへの登りをはい上っている時雪がふり出した。車は一台も通らず谷のころがる音と雪のふるやわらかな音以外何も聞こえない。

風もなく垂直に落下する雪につつまれ全ては静寂につつまれた。

峠と言うかトンネルの入口に着いた時、帽子とフロントバッグにつもった雪を落としながら、下りはさぞさむいだろうなと思い、ヤッケなんかをありったけ着こんで防寒態勢にした。

重い心を引きずってトンネルに入った。…… 体制

春が来ていた。トンネルを抜けるとそこはもう春だった。ちぎれ雲と青空と雪どけ水として何よりお日様！

与えられて初めて自分が何をほしかったのかわかったのとぶくぶく着こんだ自分がおかしくてしかたなかった。

サイクリストには、走れる道とお日様が一個あれば充分なんだと、日向ぼっこしながら思った。旅をしていて本当に幸福な気分になれるのは、自分のセッティングした所でも観光名所でもない、二度と戻る事のできない時の流れの中のある所に自分がいるんだと気付いた時なんだ。

その2　Ecocyclism ―旅の方法―

ぼくは、観光客（ぼくの定義する所の）が単純にきらいである。つまりゴミをすてるから（所かまわず）

そんなわけでぼくは彼らと自分を区別（差別）する理由を考えた。

考えてみると共通点ばかり生てくる。世間一般，または経済学的に見れば ぼくもレジャーとして他の町を訪れ，何がしかの金を使って（たとえ1日，二泊でも）去って行く観光客である。結局，残されたのは心と行動だけ…　ゴミはゴミ箱に，少なくとも地方自治体が処理してくれる所まで持って行くこと――これだけが彼らとのちがい。

ぼくは山屋（登山者）を不信の目で見る。彼らは明らかに自然破壊者である。夏の北アルプスはゴミの山だし冬山登山者はゴミを雪にうめて下山し，ビバークは各国の（特に日本の）遠征隊の置きみやげのゴミであふれている。一部の者のやった事だろうが何だろうが自然破壊という点から見れば彼らは一般の観光客より悪質だし今はかつての公害企業の方が良心的ですらある。

ぼくが生きて（生物として）いられるのはもちろん現代文明のおかげである。つまり自然の中で自分だけの力で生きられるわけではない。だからどんなに山の自然が好きだろうと現代文明の在り方が気に入らなくてもその現代文明を否定する事はできない。

同じ様に一応無公害であるはずの自転車もフレームは製鉄所，軽合金は大量の電気を消費するアルミニウム精錬所で作られる。

つまり公害あるいは自然破壊という点で自転車やサイクリストは直接的には無罪かもしれない。しかしその存在自体あらゆる意味で現代文明の産物である以上それらの現代文明のひずみを非難したり目をそらしたりはできない。

何よりもサイクリストが走る道自体，文明の単純に代表的産物である。

そしてそれらの道は第一義的に自動車のために作られたものがほとんどである。

ぼくらが峠で見る風景をどんなに感動しようともその足元にある道路は山をけずり木をたおして出来たものだ。

今着ている羽毛服は水鳥の羽をむしったものだし鼻をかんだティッシュは東南アジアの山をハゲ山にしている。

ぼくが何故，旅－サイクリングに出るのか自分でも良くはわからない，でもぼくがそこに求めるのは人間社会と自然（あるいはそれらしきもの）との調和なのです。それは，もしかしたら「いなか」とか「街道」とかの言葉で一部を表わせるけれども結局都会生活者の勝手な好みでしかないのかもしれない。

旅の友として自転車は[illegible]ものだと

思う(もちろんぼくの少ない経験の中での話だけど)

それは、ぼくにとっては自転車に乗る時が

がいても相性が良かった事と自転車に乗って

で直接自然を傷つける事が無い事が主な理由

だった。(その他にも色々と言えるといえばあるけれど)

美しい山なみを見ようとしてその山々を横目にして

進んだスカイラインを走る時ふとどうしようもない感情

にかられてしまう。

広大なお花畑で一人の乙女(別に男でもいいけど)

が花を一輪摘んでもいいもそれだけなら別に問題

にならない。それは自分のお花畑の再生能力

に収まるだろうから。

だけれども現代社会では、一人の人間がそ

れを思ったら100万人は同じ考えをしていると思って

まちがいないだろう。すぐにお花畑は全めつする。

100万年前はともかく今は自然に対して人間の力

は圧倒的に強くなっている。だとすれば我々の何げ

ない行為がさらに自然をいためつける事に加担しているか

もしれない。

もっと人間以外のものたちにも目を向けてない

断じて地面は灰皿でもゴミ箱でもない。

サイクリストと言う単語が単なる自転車乗りで

終らないためにも我々は旅人でありたい。

サイクリストは、ただそこを通りすぎるのみ…

-- 風の様に。

その3 Heart and Hand

自転車は故障しない事が一番大切だ。何故高い金出して買っても走らないものはくず鉄といっしょである。

と言う訳でまずしかもない部品のこきおろしでもやることになる。

まずシマノ600GSとケルビムエンドである。なかなかこの様な最高のコンビはめずらしいと言える。

この組み合わせで使うと、600GSをトップに入れた時プーリーケージが本体に引っかかってしまうことが多くなる（もともとこれ以前にトップに入りにくいので一担、Low にしてから力まかせにトップにぶちこむのだから）と言うわけで一度トップに入れると今度はギアを下げようにも下らなくなる、それで力まかせに引っぱるとテンションアームが力まかせにスポークにぶっくんで行き、チェンをまきこむと言うわけである、しかも恐しいことにケルビムのプレスエンドはそれでいとも簡単にまがってしまう。

ついでにケルビムをこきおろすと、あそこのランドナーを設計した奴はロードレーサーかなんかと言うか、ろくなんじゃなかろうか、やはりフロントセンターがつよいかい。

これもついでだけど600GSは他のエンドにつければ実にスムースなチェンジする良いディレーラーです。

フィルップのステムも根本的が無い、だいたいハンドルもしっかりくわえていられないステムはかすかに一回向を走ったらすぐハンドルがたおれてくると言うのは実にスリルがある。だったら安かったんだけどか。

ちなみにヘッドを抜く輪行を初心者はなるべくオ
ノスタムにした方が良いですよ、

なぜかかっこ良いスタムにしたがっかりに輪行
の時スタムが抜けなくて苦労している人へ私が最近
開発した必殺技を公開しよう。

① まず引上げボルトをゆるめる。ふつうはここで軽く
ボルトを左右へと抜けるのだがどうしてもはずれない時は、

② 自転車ごとたおさまたして持ち、10cmぐらいの高
さからやや力をセーブしてボルトに対し垂直に力
が加わる様に軽く突く。この時、ボルトをはずして
おくとボルトの頭以外はきずつくことなく楽にスタム
は抜ける。(何か気チックな説明になってもーた)

こきおろしを手早く事終わらせよう。ミヤタ600フリーは材質
がやわでハブから抜けなくなる。サンツアーウルトラ6
チェンはこれもやわでTour de Kinokuniの最中に
プレートが欠けた、最後にストロングライト49Dのクランク
はペダルをくわえこんだままはなさない。もーつおまけに
ナショナルの単二×3ヶ用のバッテリーライトはスイッチに
根性がない。

このビンにも使い様のない部品を集めて一台
ポタリング用に作ろうと思っているのだけど走るかな。

走っていると思わず歌いたくなる様な気分になっ
たり、「この道のBGMは ---」などと思ったりする
事がある。それはそれとても気分の良い時だけど。

そんなわけで結局ウォークマンを買っちゃしまった。
最初は面白がって使っていたが、その内、ぼちぼち気付いてきたわけです。
まず単に性能面では、ノイズが少し大きいけど、外部騒音を考えればまあ聞けるし操作もフカレットバッグの中で手さぐりでできる。段差やダートには弱いがふつうの道なら別に問題はない。
ところで実際、聞きながら走ってみると、もし曲がその時の心理状態や道にある程度フットしていれば、エラクノッてしまう。けれども人間の頭にはキャパシティと言うものがある様で、市街地走行や、T.T.にはちょっと向かない様だ つまりヘッドフォンはどちらかと言うと強制的に聞かされてしまう面があるので、へたをすると単にBGMとして聞き流せなくてわずらわしい時さえある。サイクリングの中には静けさを楽しむ事も入っているのだろう。
けれど好きな時に好きな曲を聞ける言う点で多少なりともサイクリングの幅が拡がったと思う。
もともとウォークマンを使うのは一人の時に限られるけれど。

その4　やっぱりサイクリングだなっ!

今さらサイクリング(自転車を媒体とする諸々の行動)が良いのすばらしいのと言ってもしょーもない事だけどやっぱりサイクリングですね。

もはやクラブの方は追い出されつつあるぼくだけどクラブのOBになってもサイクリングのOBにはなるん様な気がする。もし10年後,20年後のぼくがサイクリングをやっていなかったらそれは今考えるに,とても奇妙な事だと思う。

明日に向って

あたたかな日差しの中を,土砂降りの冷雨の中を,
苦しい登りを　舞い落ちて行くダウンヒルを
風の様に走り抜けて行く旅人よ.

何を求めて,何から逃がれて
Topをふみ Lowを回し
汗と呼吸だけを残して行く旅人よ.

出会いと別れと
孤独と仲間たちと
何を得て何を失ったのか旅人よ

帰る所がある、失うものもある。旅人よ
雪に閉ざされたこの道を
水に沈んだあの田畑を
そこに見る事が出来るか。

旅が終れば町に還る 旅人よ
風のささやきを
路傍の仏にささげられた思いを
聞く事が出来たか

明日に向って行く旅人よ
答えの無い問いと
問いの無い答えと
風の様に走り抜けて行く旅人よ

by S.N.

Bon voyage!

透明な午后

6631　古木 登

ある晴れた真冬の昼下り、がらんとした研究室の中で、10^{-4}M $Mg(NO_3)_2$ 硝酸溶液の半分ほど入った50mlメスフラスコをみつめていると、ふと、ある種の透明感が蘇ってきた。この透明感はもう忘れかけていた自転車の感覚、それも各枝葉の間隙のあぜ道をぼんやりとポタッていたときのあの感覚に近いもの。ぶらりと自転車に乗るのはたいてい今の自分が何となく嫌になった時だったけれど、そんな時この透明感が得られればあとしばらくは何とかやっていけたものだった。今、わずらわしい実生活の中でこんな透明感を感じている自分が少しだけおかしかった。考えてみれば80年の末から81年の初めにかけて、うかれるにしろ落ちこむにしろ、ずいぶんとはしゃぎまわっていたものだ。一度完全にふられるという恐怖体験をして、しかもそのあとちょっとしたことで今度は気持ちが通じあうという、ハラハラ時間をくぐりぬけてきた。そしてもう絶対に放しはしないと決心したときから、俺にもやっと透明な生活ができるようになったのだろう、と今思う。日常生活はあいかわらずわずらわしいけれど、そのわずらわしさを超えたところに存在する〝何か〟が得られた気がするからである。　（了）

おわび

6631　古木 登

こんな文しか書けなくてごめす。だけど今の気持ちを凝縮して、しかも自転車に関係ずけるとすればこのくらいしか書けないわけで。しかも受けとりようによっては強烈な"のろけ"にもなるし。（自分ではのろけのつもりです）しかし今回の事では大学4年間のブランクを一気に吹きとばすほどのリキが出てしまった。全く自分でも不思議な程自分が変わっていくのがわかった。そして一番のポイントは、自分で意識しなかったけれど結果的に、"やさしさ"とか"思いやり"を実践していたこと、振られたあともそれが持続していたことだと思う。何はともあれ、気持ちが通じあっていると感じる時を持てるようになってうれしい。

反省

6631　古木 登

しかしマイッタなこりゃ考えようによっちゃボリゃで

合理化

6631　古木 登

まあけど部員として最後のギムは果したわけで。

ヤケクソ

6631　古木 登

Sukkiyanen!

そして、今……

鈴木真人

「うおー！はようバイクに乗りたいなーー！　くそったれ、卒研に入ったらバイクに乗る暇もあらへんやんけ」だが、4月からは毎日バイクに乗れると思うとうれしくなってしまう、なんせバイク通勤だからな、

"ポンポン"って知ってる、オートバイ発祥の地「浜松」ではバイクのことをポンポンって言うんだぜ、ポンポンって、なんていい響きを持った言葉なんだろう、浜松の人間はみんなポンポンに乗ったことある人ばかり。だからポンポンの良さをよく知っている。反面ポンポンの恐さもすでに知っている。けどね、ポンポンの悪口は言わない。ポンポンは危ないとは言うけど、乗るなとは絶対言わない。

「気をつけて乗れよ！」

この一言なんだよね。みんなわかってんだよね。俺たちの気持ちを。

今から7〜8年前、俺が中学生のころ、あのグリーンに輝くYAMAHA XS-1に乗せてもらった感激は今でも忘れられない、ドッドッドッ… というバーチカルツインの叫びがたまらなかった、あのころはいいポンポンがいっぱいあったっけ、XSを初めとして、KAWASAKI W1 Special HONDA CB750 YAMAHA TY250 DT250 etc と味のあるポンポンが多かった、

俺が高校生のころ、俺は毎日、サッカーに熱中していた、朝は早起きして学校へ行き、早朝練習、そして正規の練習が終わってもボールをけっていた時もあった、そんな毎日の俺にとっては、ポンポンは忘れられた存在に近かった、忘れていたのでもない、俺は16才になった時、原付の免許を取得してポンポンを乗りまわしたかった、しかし、サッカーをしてポンポンに乗って、それでもって勉強なんて自分には無理であると思ったので 俺はサッカーを選択し、ポンポンを忘れるように努力した、けど、サッカーをしていて

本当によかったと思うことがある。サッカー部自体の成績は、県内ベスト8が最高で、高校選手権では、静岡工業に、新人戦では、藤枝東に、インターハイでは、静岡学園に負けてしまった。
自分としては、結果どうであれ、サッカーをやっていたことはプラスであり、サッカーをやっていたからこそ今の自分があると思っている。何て言うか自分にとって一種の自信に通じているのではないかと思う。

ところで、僕はなぜサイクリング部に入ったのだろうか。入学当時、サッカー部に入ろうかとも考えたし、自動車部なんかもいいなと思っていた。
そんな時、サイクリング部の説明会を見に行った。T.Tの8mmをやっていたと思う。そのフィルムを見てとにかく感動したね。おもしろそうだの一言につきると思った。サッカー部も完全にあきらめたわけではなかったが、サッカーではきっと自分が物足りなさを感じるだろうと自分で思う。うまく言えないけど、自分の世界をもっともっ

と広げてみたくなってきた、自動車部だっていろいろな所へ行けるとも思ったが、サイクリングとは決定的な違いがある。Jeepなどは別として、自動車は概して箱の構造であり、その中で運転をする、そのことが違いをもたらす。何が違うかというと、サイクリングにチャリンコには「風」がある。走っている場所ごとで違う風がある。走っているスピードによっても違う風がある地方に行けば、その場、その場での香りだって違う。それを自分の肌で感じとることができる。

また、チャリンコはポンポンと同じ2輪だったってこと、今考えるとあと付けくさい気もするが、そこがまたいいとも思う。動力こそ、人力とエンジンと違うが、2輪であることに変わりはない。in Englishではmotorcycleと言うくらいだから　本田宗一郎だって自転車に原動機を付けて走り、その後、ポンポンを作ったんだ。2輪っていうのは4輪では絶対にない味をもっていると思う。コーナーやカーブの楽しさをいったら2輪だけのものだと思

う、リーンウイズ、リーンアウト、リーンイン、アウト、イン、アウトなどと口で言うより、自転車をコーナーで傾けた時の路面の接近の感じなんて最高だね　それはボンボンでも同じことだけど、

今でも俺はチャリンコは大好きだ、あの自力で峠を越える楽しさはサイクリストならではのものだと思う。あの苦しみといったらたまらない、体調の良しあしで、自分の走りが全く変わってしまう、体調が万全だと、あるペースで一気に行けるけど、体調の悪い時などは、古木さんの言ったように「後を見れば下り坂、いっそこのままUターンして下りたくなるよな」という心境になる時もある。寝不足なんかだと全くだめ、合宿では、最初、体が合宿ペースではないので、上りがえらいきつかったが　体がそのペースになじんでくるとすいすいと走りぬけるようになる。そういう時は、人間の体というのはよくできているなとつくづく感心してしまう

合宿も、北海道、東北　九州　四国といろいろ行ったが、どこもおもしろかったし　楽しいものであった。

俺はポニポニに乗っていて注意していることがある、ツーリングに行った時などは、特にまわりの風景を見るようにしている。ポニポニだとついついスピードを出して走ることだけを目的としてしまいがちであるが、そと立ち止まって自分の今来た道をふり返ってみる、そんな時素晴しい発見をする時だってあると思う。チャリンコだって同じだ、ただ上る、ただ下るんじゃなくて自分の来た道をふり返ることが大切だと思う。もうこんなに上ったのかとか、さっきはあんな所にいたのかとかあらためて自分の来た道をながめる、そんとか、チャリンコからおりて自分の回りをぐるりとながめてみる、チャリンコに乗っている時とは違った何かが見つかると思う。そのくらい気ままなツーリングこそがポニポニであり、チャリンコしかできないものだと思う。

昨年の1月か2月ごろ、俺は大井町の駅前で一台のポンポンを見た、そのポンポンが俺にポンポンの面をよみがえらせた、それはYAMAHA XS650 Special中学のころの感動がよみがえってきたその時から、もうポンポンがほしくてたまらなくなった、別に体がおとろえたからチャリンコからポンポンにしたのではない、自分でそうしないと気がすまなかったからだ、

みんなもいつかチャリンコからおりる日がくることだろう、その時、一度ポンポンにまたがってほしい、ポンポンを馬鹿にしないで乗ってほしい、チャリンコとは違うけど、チャリンコに似た感覚があるのがわかると思う、そしてオフロードバイクで林道にトライしてほしい、富士山の演習林道なんか最高にGoodだぜ、オフロードバイクで箱根あたりのワインディングロードを走ってもいいとも思う。

一生チャリンコで走り回ろうとしている人でも一度はポンポンを味わってほしいと思う、

俺の愛車は今、YAMAHA XT250 早く浜松へ帰って遠州の森の中を駆けめぐりたいと思う

そして、今、ポニポニに夢中の毎日である、

♡ ♡

去年はこの道を自分だけの力で
走った
苦しく、もういやだと思った
今年はSOHCの心臓と共に走る
しかし、あの苦しみを忘れたわ
けではない
あの苦しさは決して忘れない
そして、今、
走り終えた後での喜びを再び思
い出す

♡ ♡

只酒（ただざけ）

三河安城（みかわやすき）

小春日和の穏やかな日曜日の夕刻である。買ったばかりの本を一冊、小脇にかかえ、ひとりの長身の若い男が、新宿の紀伊國屋書店から出てきた。紀伊國屋の前は、相変わらず、待ち合わせの若い男女がうようよしていて、まっすぐ歩くのが困難なほどである。

「宮本君じゃない？」

ざわめきの中に、確かに自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

長身の男は立ち止まり、上半身だけ振り返ると、ひとりの、やはり若い男が、にこにこしながら歩み寄って来た。見覚えのある顔である。

「やっぱり宮本君だ。」

げっ。佐々木やんけ。

宮本(注1)と、佐々木(注2)は高校の同級生で、当時、表面上はそれほど仲は悪くなかったのだが、宮本は、心の中では佐々木を嫌っていた。

「やあ、佐々木君じゃないか。しばらく。」

「いやあ、こんな所で君に会うとは思わなかったよ。」

俺だって会いたくなかったよっ。まったく相変わらずキザな格好しやがって。

「ほんとに久しぶりだねえ。夏のクラス会はどうして来なかったんだい？」

そんなこと貴様の知ったことか。貴様の顔を見るのが嫌だったんだよ。

「ちょっと、バイトが忙しくてね。」

「これから飲みに行くとこなんだけど、よかったら、いっしょに、どう？」

(注1) 東京工業大学 工学部 生産機械工学科 2年 東工大のおちこぼれ

(注2) 早稲田大学 理工学部 応用物理学科 3年 やはりおちこぼれ

佐々木はそう言って、後ろにいる2人の女の子に同意を求めた。そうしてまた宮本の方を向いて、

「忙しいのかい？」

けっ。貴様となんか酒が飲めるか。だいたい、後ろにいる女は何なんだ。片方は、見方によってはまあかわいいと言えないこともないが、目がまんまるで、化粧が濃くて、まるで狸じゃないか。それに、もう片方は救いようのない、どうしようもないブスだ。ブタそのものだ。ツービートじゃないが、"泣くな笑うな息するな、ブスが空気を汚染する"というのはこういうのを言うんだろう。

「今日は、ちょっと・・・」

いや、まてよ。どうして、こいつ、2人も女を連れてるんだ。ははあん。どうせ、合コンか何かで知り合った狸を無理矢理デートに誘ったものの、付き添いとして、狸がブタを連れて来たもんでよわってるんだな。まったく、ダサイ話だ。それでこのブタを俺におしつけようって寸法だろう。そうはいくか。ようし。」

「よし。せっかく会ったんだ。付き合うか。」

「うん。そうこなくっちゃ。ええと、こちらが、矢島さんで、こちらが、横山さん。」

狸が矢島で、ブタが横山か、まあどっちがどっちだっていいや。狸は狸で、ブタはブタだ。名前なんてどうだってしいい。

「あ、僕は佐々木君の高校時代の友達で、宮本。よろしくっ。」

ウォップ。ブタともろに目が合ってしまった。

かくして、佐々木に導いられて、歌舞伎町にあるパブに入った。4人掛けのテーブルに、宮本と佐々木が並んで腰かけ、向かいあって、狸とブタが並んで腰かけた。佐々木が、ボールペンをさし出すと、まだほとんど減っていないグラスが出て来た。

おっ。まだいっぱい入っとるやんけ。ははあん、佐々木の野郎、狸と2人で飲みに来るつもりで、ちょっと前に下見に来て、そのとき入れといたんだな。見え見えだぜ。ふく、

飲みに来るような顔をしてよ。まったく、キザな野郎だ。

狸とブタが作ってくれた水割りで、乾杯！ 彼らと何やらしゃべりながら、佐々木は上着のポケットから、LARKと、高そうなライターを取り出し、火をつけた。

「へえ。いいタバコ吸ってるじゃない。」

「ああ、まあね。君は？ セブンスターか何か？」

「いや、セブンスターはまずい。それに、タバコは、もうやめたんだ。体に悪いからね。まわりの人に嫌な顔をされるのも嫌だし。ほら 最近は嫌煙運動が盛んだろう。別にそれに感化されたわけじゃないけど、僕は長生きしたいからね。そろそろ君もやめたらどうだい？」

「そうよ。体によくないわよ。佐々木さんもやめたら？」

狸とブタが口をそろえて同意した。佐々木は、まだ半分位の長さのLARKを灰皿にこすりつけながら、

「そうだな。じゃあ、俺も禁煙しようかなあ。」

ふん、軟弱な奴め。

「ところで、宮本君、学校の方は忙しいかい？」

おっ、巧みに話をそらしたな。

「いや、それほどでもないよ。だけど、今はクラブの練習の方に熱を入れているから、そっちの方が忙しくてね。君は？」

「まあ、忙しい方かな。でもけっこう楽しくやってるよ。友達と。」

「そうか、いいなあ。僕も早稲田の物理に入っとけばよかったかな。けどあとこは狭いだろう。人心多いし。」

「宮本さんはどちらなんですかぁ？」

狸が口をはさんだ。

「僕？　僕は東工大さ。」

「え？　トウコウダイ？」

「東京工業大学だよ。」

「はあ・・・」

どうやら知らないらしい。まったく馬鹿な女だ。こういう女を見てると腹が立って来る。

しらけた雰囲気になって、さすがに佐々木が発言する。

「東工大は国立でもレベルの高い方なんだよ。彼は早稲田の物理学科にも受かったけど、東工大に行っちゃんだ。」

「ああ、そうだよ、学費が安いからね。もういいよ。話題をかえよう。」

狸がまた質問をした。

「さっきクラブの練習って言ってましたけど、何やってらっしゃるんですかあ？」

「剣道」

突然の質問に少しも動じることなく、根も葉もない答えをきっぱり言いきったことに宮本自身、少し驚きを感じた。なぜ剣道を選んだのかは、彼自身にもわからない。とっさに出た答えである。

「へえ、かっこいいですね。」

「これでもまあまあ強いんだよ。秋にあった関東大会でも、結局は、日体大の高木っていう奴に負けちゃったけど、いい所までいったんだ。」

終始、宮本はこういう調子でホラを吹き続け、

佐々木をこきおろし、約2時間が過ぎた。

話のネタも切れてきたし、そろそろ潮どきかな。

宮本は、4杯目の水割りを、ぐいとあけ、少し大きな動作で腕時計を見て立ち上がった。

「それじゃあ、僕はこの辺で。」

「ええ？　もう帰っちゃうんですかあ？」

理が驚いた顔をして言う。

「おい、まだいいじゃないか。ゆっくりしていけよ。」

佐々木が、形式的に引きとめようとする。

「いや、悪いけど、明日〆切りのレポートがあるんだ。もうそろそろ帰らないと書けなくなるから。」

「ええっ？　これからレポートを書くんですかあ？大丈夫なんですかあ？」

理がますます驚いた顔をして言う。

「ああ、大丈夫だよ。このくらい酒が入っていた方が調子が出るんだ。それじゃ、佐々木君、今日はごちそうさん。またこっちの方にも遊びに来いよ。その時

は、僕の知ってる店に行こう。僕のおごりだ。じゃ、おやすみ。」

宮本は、上着を肩にひっかけて、力いっぱいしっかりした足どりで店を出た。とたんに顔がほころんだ。

やった！あいつのあの最後のきょとんとした顔が忘れられんぜ。あいつの性格からして、あいつの方から飲みに行こうなんてもう言って来ないだろう。今晩は只酒を飲んだも同然だ。

彼は、にやにやしながら上着を着、ポケットからハイライトを取り出して火をつけ、ネオン街をゆっくりと新宿駅に向かった。

狸から電話があったのはそれから数日後である。

「もしもし、宮本さんでしょうか？」

「はい。そうですが、」

「あのお、矢島ですけど・・・わかりますかあ？」

「え？・・・ああ、た、佐々木君の・・・」

「佐々木さんに電話番号教えていただいたんです。・・・あの、・・・ちゃんとレポート書けましたかあ？」

「え？ あ、ああ、まあね・・・」

「あのお、こないだのことなんですけど、・・・あの晩割勘になりましてえ、佐々木さんが宮本さんの分、払うって言ったんですけど、あの・・・結局、私が払ったんです。」

「ええっ？」

「それで、・・・あのお・・・今度、暇なときに、飲みに連れていっていただけませんかあ？」

「え、いや、あの、そりゃ、まあ、いいですけど・・・」

「わあ、よかったあ。・・・あ、それから、あの2人、ますます うまくいってるみたいですよ。今晩もデートみたい。」

「え？」

「佐々木さんと横山さんですよ、あれ？ 知らなかったんですかあ？ あの2人、できてるんですよお。」

懐しき北海道 そして我が友達

リキみすぎた〜

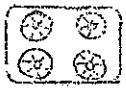
3年B組、Atsushi Saito.

〜合宿で、人間は変わるのだろうか〜

◇出会い

我がクラブでの合宿における班編成は、全くの偶然性を伴なうもので、如何なる班ができあがるかは、事前には見当もつかない。その例にもれず、この班も、ただ偶然のみがもたらしたもので、なんの必然的根拠もない。しかし、この班のmemberが決定した時点では、あの[illegible]を除いては、まあまともだと思っていたのだが…… あの[illegible]が○○○だとは知らなかった。おそましい限りだ…

◇ フェリーにて、

フェリーでは、theory通り、金のかかる食堂などへは行かず、空腹を麻雀でいやしておりました。いやへ、しかし、利島の ポンの後の、  切りかリーチには、まいった。

酒井メモ フェリーで発情!!

… あの女の隣に坐われなかったのをいつまでも悔む!

◇ 釧路〜霧多布

フェリーで釧路に着き、厚岸を経て霧多布に到着。出発前に、永見おじさんから、聞いていた霧多布のがけりの坂にもめげず、本日の走行距離は、90 km

酒井メモ

霧多布の少し手前で、女子中学生を見つけ、思わず手をふる。ヨダレをたらしながら。

◇ 霧多布～根室 $\frac{R_1}{R_2}$ ノサップ岬

一昨年ノサップ岬で食べた花咲がニの味が忘れられず、再び訪ずれたのだが、既に花咲がニは売り切れていた。
しかたなく、根室の駅前で買ったカニを我々の宿である駅近くの公園（この前もここだった）で食べたら、おいしかった。
「ゆ別」にも、うまい！」などと酒を飲みつつ、ダジャレを言って、走行距離を考えると、　110 Km

（酒井メモ）

厚床駅で、実践女子大の2人（マテガエタ～）ずれに会い、思わず○○する。その2人は、春別方面へ行ってしまったので残念がる。
私は、酒井を非難しながら、ひたすら冷静になろうと努めた。

◇ 走行距離、

その後の3日で、105＋100＋100＝…305 Km。これに 90＋110＝200 をたして 505 Km だから、505／5＝101 //

なんと 101 Km/day (average)

ここまでは、冗談でたてた計画がそのまま実行された。しかし、私はここまでだと思ったのだが、…

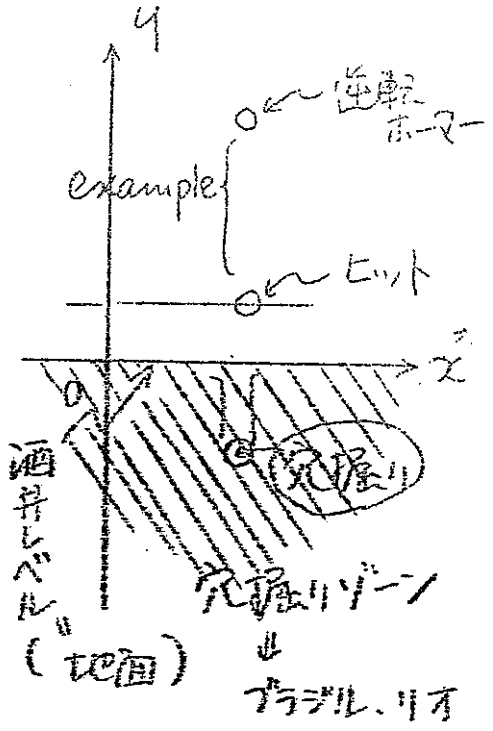
◇ 恐怖の穴掘り

いつの頃からだろうか、ダジャレの神様、高橋氏の影響か、それとも名取ドラの陰謀か、我が班に、ダジャレが侵略してきて、口を開くと、それが80%の確率でダジャレになるという(況状)が訪ずれた。この傾向は、2、3年に特に強く、かくして、ダジャレ合戦が展開されるにいたった訳である。私は、初めのうち、高尚なシャレしか言わぬつもりでしたし、三井もそういう傾向だったが、次第に酒井のレベルに下がってきてしまった。これは、その回数の多さによる純度の低下《古木さん、変な想像はしないで下さい！》と、環境に順応したことが原因と考えられる。そして、何故だか、酒井のレベルが、いわば、

ダジャレ potential の基準となり、しかも、それが、地上での重力 potential との一致をみることとなった。

したがって、酒井レベル以下のものは、地面の下、即ち"穴掘り"となる訳である。

(わかるかなぁ〜？)



穴掘りは、合宿後半程ひどく、穴を掘りすぎて、ブラジルへ行きつくということにすでなった。

そして、最後には、リオのカーニバルでおどるといったエスカレートぶりを見せた。(ジャレのレベル決定は、合議制で行なわれた)

このダジャレ合戦は、この我々の一つの key point だったと思う。このおかげで、合宿のムードは非常によくなったと思う。

私は、合宿でのダジャレをおすすめします。
後輩諸君、三井君、石田君、栄様君……
（提供：日本ダジャレ協会）

こんな標指があったでー

飲んだら乗るな 飲むなら牛乳！

さすが Hokkaido、

◇合宿での酒について、（酒呑みの自己弁護）

今回の班では、紅顔の美少年 三浦工が、○○の○○○副島とは対称的にあまり酒を受けつけないので、酒は、共通費ではなく、個人的に買うようになった。私はもっぱら、小川さんの好きだったGODOショウチュウ、三井は、それか、日本酒か、ウィスキーか、副島は、生意気にウィスキー only、酒井は、節約してあまり飲まなかった様子。えれは、何を飲んでいたのだろうか…？とにかく、

酒を飲むのは、ほとんど夕食後のテントの中で。走行距離の算出やら、明日の予定やら、わいわいがやがやとやって、大分（"おおいだ"ではありません）酔いがまわると、声も大きくなり、時には、歌なども歌ったりしたなあ…
《だいぶ老人の手記らしくなったと、1人ほくそえんだりして…》 私は、この時間が1番楽しかった。（勿論、合宿中、ず～～と楽しかったけど）

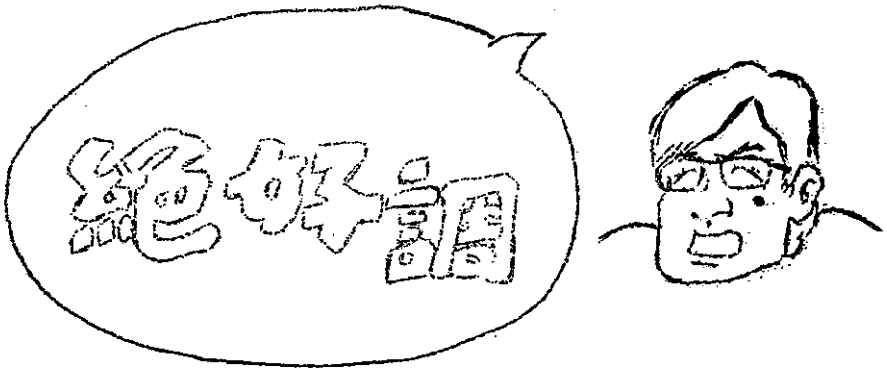
◇ 結論 （原稿提出を迫られているので この辺でやめることにしよう）

今回は、非常に天気にめぐまれ、冗談でたてた計画の8割は、実行できたので、まずまず満足している。合宿で生活を共にすると、他の奴の人間性が見えてきたりして、或いは、その人間が変化していくのがわかったりして、なかなか、おもしろい。そういう意味でも、合宿へ参加するのは、意義があると思う。

◇ 他己紹介

（合宿とは関係がありません）

古賀さん昭つ助



酒が好きで、女が好きで、麻雀が好きな、三拍子そろった我部の長老。人間的には、理系よりも文系的な人ではないかと私は見ております。いろいろな点で、センスのよさが目立つのも忘れられません。

昭和56年4月　発行
限定本
手刷同盟　東工大